

機動戦士ガンダム 「墮落の反逆者達へ～」

ツダ神様

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突撃機動軍所属の一般兵。並のエース以上に戦え、ニュータイプでもある彼は、しかし最後までただの一般兵士であった。このお話は、名も無い兵士の一人として戦い続けた、とある男のお話である

目次

一週間戦争編

開戦の日	1
ブリテイッシュユ作戦	4
ルウム戦役	7
一年戦争編	
第1次降下作戦	12
追撃、ヨーロッパ戦線	17
ハルデイ山要塞基地攻略作戦	21
ヘルシンキの攻防	29
招かれた場所は	34
続・招かれた場所は	38
月面講義	43
地球へ	45
初の戦い	52
オペレーション・レッド 序章	63
オペレーション・レッド 1章	68
オペレーション・レッド 終章	72
壊れた奴隷／英雄	80
君は歯車、彼はエンジニア	86
南米での戦い	92
ガルマの死	97
宇宙へ	109
神の使徒 前編	112
神の使徒 中編	119

神の使徒 後編	125
幕間 ブレイムに関する説明書	129
再臨せし死神の咆哮	131
私は人でした	134
銀の流星	139
強襲	144
ソロモンにて	153
ソロモンの戦い 前編	160
ソロモンの戦い 後編	168
敗走	174
宇宙要塞ア・バオア・クー前編	177
宇宙要塞ア・バオア・クー中編	182
宇宙要塞ア・バオア・クー後編	187
エピローグ 彼の終わり	193

一週間戦争編

開戦の日

「宇宙世紀0079 1月3日」

「月面都市グラナダ上空 月軌道上」

「同 ティアナム中将指揮下、月機動艦隊」

始まりを告げたのは、ジオン側から放たれた、一発の艦砲だった。俺達は先方として敵艦隊に突撃した。それだけで、敵は大混乱に陥った。まあそれも至極当然の事だろう。何と言ったって、ジオンと連邦の国力差は30倍以上だ。勝てるわけがない。だから今回のこれもただの示威行動だろう。そう思っていたのだろう

「沈めえ!!」

サラミスの対空砲火を直上から捻りこむように艦底部へと潜りこんで躲し、そのまま背中のスラスタ横に備え付けられたジャイアントヒートホークを手につハイパーマシンガンと交換し、そのまま両手とスラスタの推進力を生かして大きく振りかぶる。するとジャイアントヒートホークはあっさりとサラミスは艦底部から半分以上も切り裂く、そこに肩のシールドに設置されたミサイルランチャーを2発ぶち込む、それだけで内部からサラミスは膨張し、そのまま爆散する。：あつけないものだ。そのまま燃え盛るサラミスを眺めていると、後方から2機の戦闘機が向かってくる

「まだ来るか?」

武装をジャイアントヒートホークからハイパーマシンガンに持ち替え、その場で宙返りし、2機の戦闘機を通りすがせる、2機は素早く距離を取ろうと逃走を開始するが、俺が放ったハイパーマシンガンによって撃ち落とされる。：これもあつけない。そのまま肩に固定されたバズーカを外し、構えて手近な敵艦へと向かう。どうやらマゼ

ランの左右をサラミスがカヴァーするように航行しており、他の味方は接近できずにいるようだ。情けない

「……行くか」

心底愉しそうな笑みと共に舌なめずりして一気にマゼラン目掛けて突き進む、向こうもそれに気づいたようで、主砲やミサイルなどでこちらを攻撃してくる。：まあミノフスキー粒子のおかげで一切の誘導兵器が使用できず、また通信機器も使用不能になったおかげで、ミサイルは直進しかできない。艦砲も砲手の腕次第。ハッキリ言ってよっぽどの馬鹿でも無きや当たることなんてまずありはしない。そのまま猛攻をかくぐり、マゼランと左のサラミスとの間を縫うように進む、ついでに左のサラミスの対空砲や主砲、ミサイルランチャーなどにバズーカ全3発と、ハイパーマシンガンの弾を120発ほど食らわすとサラミスはそのまま爆散する

「…むっ…」

どうやらサラミスの爆発で幾らかマゼランもダメージを受けたようだ、誘爆までには至らなかつたようで、残りのサラミスと共に撤退を始めたようだ。そしてそれを待っていたかのように、他の味方が追撃を始める

「っんの野郎ども!?!、横取りする気かよ!?!、…ツチ!、させるか!」

すぐさまハイパーマシンガンをジャイアントヒートホークと交換し、シールドの裏側にあるバズーカのマガジンを取り出し、空となつたマガジンと交換し、まずマゼランのエンジン部にバズーカを撃ちこみ、すれ違いざまにジャイアントヒートホークでブリッジを両断し、そのままバズーカの残弾全2発でサラミスのブリッジとエンジンに撃ち込み、そのままシールドのミサイルを全てサラミスの胴体部分へと撃ち込み撃破、そのままジャイアントヒートホークをマゼランの胴体部に叩き付け、そのまま残り少ないハイパーマシンガンの残弾を全て撃ち尽くす。マゼランはそのまま爆散する。周りの味方が機体を使って拍手して来るので、マシンガンを掲げてそれに応える

「現在戦闘中の全部隊へ、敵艦隊は後退を開始した、これより追撃戦に移行する。繰り返す、現在戦闘中の全部隊へ…」

「予想より粘ったな…まあ十分な戦火を上げれたし、武装も尽きてしまった、ここは一度帰還しよう」

既に月の向こう側へと移り始めた戦鬪をしり目に、後方に待機する母艦へと向かう…

ブリテイッシュユ作戦

「我々スペースノイドの故郷。コロニー」

この巨大な円形状の大地で、我々は子を生み…育て…そして…

「死んでいった」

「この一撃は！、愚劣なる地球市民に対する、裁きの鉄槌である！」

「神の放ったメギドの火に！、必ずや彼らは屈するであろう!!」

我々は今、母なる故郷すらも、兵器としてしまったのだ……

「これより作戦の最終確認を行います」

ハンガーからカタパルトに移動する間、オペレーターが作戦の説明をしてくる、…何度もブリーフィングで聞いたというのに、何故いまさら出撃直前でもう一度聞かされなければならぬのだ……

「全MS隊は、コロニーの落下を阻止しようとする連邦艦隊を撃滅せよ。以上です」

凄いな、30分以上のブリーフィングの内容を10秒でまとめやがった。…うちの隊長にも聞かせてやりたいぜ……

「アンチャー1、発進を許可します」

オペレーターから発進許可された、漸くだ。やっと戦場に出れる…
「了解、アンチャー1、出るぞ」

直後、カタパルトが一気に機体を戦闘速度にまで引き上げ、そのまま宇宙空間へと放り出す

「……」

各部の姿勢制御バーニアで機体を安定させ、そのまま背中のメインスラスターで一気に集結地点へと向かう。集結地点となっているコロニーの先端部分にはジオン軍の半数が集結しており。続々とMSが出撃している

「……………」

その壮観な構図に思わず見とれていると、無数のミサイルやビームが、地球側からコロニーと、コロニーを守るジオン艦隊を襲う。

「何!?!」

慌ててハイパーマシンガンでミサイルを迎撃しつつ、ビームはキツ
チリ避ける、ジオン側も反撃を開始し、地球とコロニーの目の前に無
数の光の玉が現れては消えていく。

「続けえー」

白いザクが敵艦隊に突撃し、それに続くように味方も突撃を開始す
る、俺もそれに便乗し、手近なサラミスめがけて両手のハイパーマシ
ンガンをつっぱなす、放たれた対艦用140ミリ鉄鋼弾がサラミスの
装甲を文字通り紙のように貫き、蜂の巣のように穴だらけにしてい
く、そして弾薬庫か機関部にでも命中したのだろう、サラミスは爆散
する

「次は…!?!」

後方の空母から発進したであろう戦闘機群がこちらに飛んでくる、
既にそれに対して苛烈な攻撃が加えられているものの、思ったように
数を減らせていない、相当に腕のいいパイロットたちが乗っているの
だろう…もつと効率よく狙えばいいのに…

「ま、掃除と行きますか」

左手のハイパーマシンガンを腰のマウントに装着し、足に装備した
ヒートホークを抜き取り、一気に戦闘機群の左翼に突入する。敵はす
ぐさま真っ直ぐにしか飛ばないミサイルや、バルカンで迎撃して来る
が、そんな物には当たらない。まるで恐怖を感じない

弾幕をかいくぐり、右手のハイパーマシンガンの4秒間の射撃で十
数機の戦闘機が爆散し、体当たりを仕掛けてきた戦闘機は左手のヒー
トホークによってコクピットを真っ二つにされ、棺となって辺りを漂
う、そして、流れ弾に当たって光の玉となって消滅する

「全く…あつけないものだな」

全くと言っていいほどに歯ごたえが無い、強敵と言えるものにも出
会った事が無い…旧式の軍艦や時代遅れの戦闘機が相手では仕方な
ない事かも知れないが……それにしたって、戦いがいの無いことこの
上ない

「…やっとか」

コロニーが阻止限界点を超え、真っ赤に染まりながら地球へと落ち

ていく。連邦艦隊は撤退しようともせず、コロニーに対して最早何の意味も無い攻撃を続けている。

「フツ、無駄な事を……」

既に勝利を確信した味方の祝砲と、歓喜の声とで、大変うるさくなってきた。俺も便乗してハイパーマシンガンを連邦に向かってばら撒く。最早勝ち揺るがない。そう確信していた……

「み、見ろ……!?!」

勝利に沸く我々を、落胆に変える一言が、通信に飛び込んできた、見ればコロニーが三つに分かれ、バラバラになり始めていた。大気圏突入に耐え切れず、コロニーが崩壊を始めたのだ、それを観て、連邦軍も後退を開始し、一部の部隊が後退する連邦艦隊に対して追撃を始める

「追撃を止めよ!、全軍、後退せよ!!」

コロニー防衛の指揮を取るキシリア少将の号令を聞き入れ、追撃していた部隊が帰って来る、俺も母艦に戻ることにしよう……そろそろ張り合いのある相手と戦いたいものだ

ルウム戦役

キシリア閣下より、ある指令が伝達された

「我が突撃機動軍全軍ニ告ゲル、直チニ宇宙攻撃軍ト共ニ、サイド5へ進撃セヨ。諸君ヲハ今日ココニ歴史ヲ作ルデアロウ」

「俺達はキシリア閣下の命令に従い、ルウムへと進撃する。今度こそ、楽しめると良いのだが…」

「どう思う？、今度の第2次ブリテイッシュ作戦？」

同僚である「カータス・シュバッケン少尉」が、不安そうな顔で俺に話しかけてくる、ここは食堂の端、士官用の個室だ。ガラス越しに広大な宇宙を眺めながら、ハンバーガーとポテトを食っている。以外に美味いんだな、これが

「俺達末端の兵士がどうこう騒いだって、前線送りで殺されるか、懲罰大隊行きさ、俺達はただ敵を殺すだけの機械、それでいいんじゃないか？」

実際はあれこれ考えても馬鹿らしいと思ってるから何だが、それは言ったらめんどくさそうだから言わないでおく

「お前はそれで良いのかよ…」

「言っても悪いも無いさ、俺達は軍人、軍人はただ命令に従うのみ。で、あれば…」

勢いよく席を立ちあがり、そのまま上着を羽織り、トレイを持って個室を出る

「そう言った疑問は覚えなもんさ」

そう言つて、個室を後にする、残されたカータスは

「そんなの、機械とかわんねえじやねえかよ…」

吐き捨てるように呟いたカータスは、そのまま持ち込んだウイスキーの入ったスキットルを一気に飲み干した

「人類史上、決戦ノ舞台、ウチユウノ試シ無シ」

「マシテ艦隊決戦ノ試シ無シ」

「諸君 歴史ヲ生ムベシ」

「綺麗だ…」

ワザとコロニーの一部を破壊して作ったデブリ帯の中で他の味方と共に隠れながら、主力同士による艦隊戦を見ていた。未だにドズル中將から命令は無く、俺達はうずうずしながら、すぐそばで繰り広げられる艦隊戦を見入っていた。文字通り雨の様に放たれる巨大な光とミサイルの撃ち合いにより、両艦隊の陣形は乱れ、綻び、崩れ、無数の光の玉となって消えて行く

「……………」

そんな中、一際大きな紫色の光が、一つ、遙か後方から連邦艦隊を襲う。しかし狙いは大きく外れ、光がおった周辺にいた一隻のサラミスを、その余波で破壊した

「…凄いな」

あんなものが複数あるのなら、連邦軍との戦いもさぞや楽になるだろう

「…オペレーター、今の紫の光は何だ？、一体何処の部隊だ？」

ためしに、聞いてみると、以外にも第603技術試験隊とか言うのが使用している試作兵器だと言う返答が帰って来る

「通信は可能か？」

「可能ですが…？」

よし

「じゃあ繋いでくれないか？」

「はあ…分りました」

俺の嬉しそうな声に、困惑しながらも無線を繋げてくれるオペレーター、少しして、見慣れたオペレーターの顔から、別の女性の顔に代わる

「こちら、第603技術試験隊所属、ヨーツン Heim」

「こちらは第15師団 第22独立MS大隊所属、カイト・バジュール少佐だ。そちらが先程放った試作兵器は、きちんと目標に命中しなかったように見えたが、何か不備でもあったか？」

オペレーターが返答に困ったのか、艦長らしき壮年の男性の方に向き、艦長…、と指示を乞うように言うと、まだ戦場慣れしていなさそうな青年と、いかにも堅物なインテリですオーラ満載の女性士官が出てくる

「こちらは、第603技術試験隊所属、オリヴァー・マイ技術中尉であります」

「同じく、モニク・キャディラック特務大尉であります」

「突然ですが、我々のヨルムンガント…あ、し、試作兵器は間接射撃指示が必要不可欠であります！、是非とも、そちらからの間接射撃指示をお願いします!!」

「おお、凄い剣幕だな…まあはじめっから期待すらしてもらえてなかったんだ、焦りもするだろう」

「了解した。そちらに対して間接射撃指示を行う、心して聞かれたし」「あ、ありがとうございます！」

「全軍、作戦を第2段階に行こうする、全部隊、直ちに攻撃を開始せよ」司令部からの指示だった。…：チャンス到来、しかもとびつきりのだ…！

「P—112、Y—221、Z—114、そこにマゼランが固まっている、よく狙え！」

そのまま通信を切り、一気に連邦艦隊へと突っ込む、やっとこちらの糸に気づいたのか、パニックになったかのように陣形が乱れ、弾幕が張られる。だが

「そんな密集した状況で…!!」

そう、ここまで密集した状態では、いかに多数の対空砲を搭載したサラミスやマゼランと言えど、誤射を避けるように撃てば、十分な弾幕の網を張る事は出来ず、一隻、また一隻と喰われていく。そしてリーダーに一際強いエネルギー反応が、先ほどと同じ場所からこちら側へ向かってくる

「来たか…!？」

そう、例の技術試験隊が持ってきた、期待すらされていなかった試作兵器の一撃である。それはやや中央に位置するマゼランを中心に固まる一部隊と更にその周囲にいた数隻のマゼランやサラミスを破壊し、連邦艦隊に小さくない穴をあける。そこに集中砲火が浴びせられ、更に無数の味方が群がり、その穴を広げて行く。正直想像以上の破壊力である

「…おお…、凄まじいな…よし、次のポイントはX—168、Y—221、Z—142だ！、外すなよ！」

ジャイアントヒートホークでサラミスを3分の1ほど切り裂き、そのまま引き抜きざまにバズーカをぶち込み撃破、そのまま大きく体を捻り、後方から俺に迫る3機の戦闘機を薙ぎ払うように粉々に吹き飛ばし、バズーカをその場に置き、ハイパーマシンガンでマゼランのブ

リッジからブリッジ真下の胴体部分、エンジンを穴だらけにして沈め、俺を狙って突進してくるマゼランにジャイアントヒートホークと交換したバズーカとハイパーマシンガンをばら撒きつつ、空になったバズーカをブリッジに放り投げ、足にマウントされたヒートホークを抜き取り、エンジンに叩き付け撃破、そのタイミングで試作兵器の第2射：いや第3射が飛来し、また10隻以上の敵艦隊を飲み込み、破壊していく

「…さて、ここからどうするか……」

ジャイアントヒートホークを回収しつつハイパーマシンガンの残弾を確認していると、他のマゼランと少し形状が違う青色のマゼランを視界に捉えた

「あれは…!?!」

見間違うわけもない、あれこそ総大将レビルの座乗艦、「アナンケ」だ

機体を一気に最高速にまで加速し、そのまま通り過ぎざまにブリッジの真下にヒートホークをぶっさし、そのまま急上昇し、一回転して、そのまま捻りこむように降下、通り抜けざまにもう片方の足にマウントされたヒートホークでエンジンを損傷させ、航行不能にさせてから、直俺機を全て撃ち落とす。すると黒い3機のザクがアナンケから脱出しようとする一機の脱出艇を捕縛した。完全に美味しい所だけ奪われてしまった。…しかもご丁寧に3人で敬礼してきやがる、撃ちてえ…!!、撃ち殺してえ…!!

レビル捕縛によって指揮官を失った連邦艦隊は一気に崩壊、その3分の2以上を殲滅され、辛うじて残った僅かな部隊がルナツーに逃げ帰った。まさしく大敗北である

一年戦争編

第1次降下作戦

「転属希望…か…」

「はっ」

直属の上司である「オリガー・フォン・ラインガス」大佐に、俺は直立不動のまま答える。大佐は眼鏡を外し、大きく息を吸い、そして吐いた

「よかろう、君がどういう理由で、新設される地球方面軍への転属を希望するのか、その理由は問わん。今日まで、ご苦労だったな」

「はっ、今までお世話になりました、大佐」

大差に敬礼し、執務室を後にする

「…戦争の権化…か」

「先発隊降下！、開始イ!!」

司令部からの指示に従い無数のHLVが母艦から切り離され、投下

される

「あの、地球に降りた事ってありますか？」

同じH L Vに乗る、先日軍学校を卒業したばかりの新兵が、俺に尋ねてくる、その顔も、声も、実戦を前にして青ざめていた。相当な恐怖と不安に包まれているのだろう。…自分が初めて戦った時は意気揚々、敵を殺そうと躍起になっていたと言うのに。覇気が無いな…違うか？

「無いな、降りて見たいとも思わなかったし」

そう言つて、スキットルに入れておいた炭酸に口を付ける。結構好きなんだよな、このガリツトサイダー

「そう…ですか」

何か余計に不安そうになったなコイツ…ったくよお……

「そう不安がるなよ。いいか？、戦場じゃ不安になってようが自身に満ち溢れてようが関係ねえ…、死ぬときは死ぬし、生き残れば次の戦場で死ぬために生きることになる。結局死ぬことは死ぬんだ。ただそれが初めての戦場か、何度か後の戦場かの違いさ」

「……」

「ま、俺の部隊に配属されたんだ、そう不安がる必要もねエよ」

とりあえず安心してそうな笑顔を向けてみる、どうやら効果があつたようで、結構表情が和らいだ。声にも明るさが少し戻った感じだ

「そ、そうですよね、連邦にジオンの死神と恐れられる少佐なら、大丈夫ですよね！」

ちよつと待て、何やその厨二ネーミング。結構嫌なんだけど

そうこうしていると、大気圏を抜けたようで、先ほどまで真っ赤だった景色が、元の美しいものに変わっている、てつきり対空砲火にさらされるものとはかりに思っていたが、そんな事なく、無事に降下可能高度にまで降りる事が出来た。本来であればこのままH L Vで着陸するのだが、俺はおもむろにハッチ開閉用のレバーを引き、そのまま開いたハッチから飛び出す

「えっ？、ええい!？、ちよつ!？、ちよつと少佐あ!？」

新兵の困惑した声が聞こえてくるが、一旦それを無視し、せつせと

今更対空砲の準備をし始めた連邦の陣地に容赦なくバズーカとハイパーマシンガンをぶち込む。連邦兵達は突然空から降ってきた敵と、爆発し、粉々になって吹き飛んで行く味方を見てすっかりパニック状態になってしまった。なっさけない事で…

「さてはて、どうやって遊ぼうか…?」

吹き飛ばした陣地に降り立ち、とりあえず手当たり次第に車両とか施設とかを吹き飛ばし、そこから辺で逃げ惑う連邦兵にどれぐらいの至近弾なら死ぬかを試していると、森の中から戦車らしきものが現れた、特徴的な二つの主砲、間違いなく61だ、吹き飛ばすか

「そんな戦車じゃな…」

61の砲撃をスラストと各部のバーニアを使ったステップで躲し、そのままハイパーマシンガンを3発ぶち込む、それだけで戦車は轟音とともに爆発し、燃え盛るスクラップに早変わりする

「しよ、少佐あ〜!」

やっと新兵の乗るHLVが降りてきた、危なっかしい動きで新兵の乗るザクがこつちに向かってくる

「少佐、いかがいたしますか?」

もう1人、「ラーク・ヒュノックス」少尉が歩いて来た。上層部からは新設される第2MS中隊の中隊長をするよう辞令が来ていたが、家のコネ等を駆使し、3機編成の分隊長として行動していた。こういう無理なゴリ押しが出来るあたり、ジオン軍もなかなか…いや、やめておこう、あまり何でもかんでも口するのは、あまり賢い行為とは言えんからな

「ラーク少尉、ルーキーとツーマンセルでこのエリアの敵を殲滅しろ、特に対空陣地を重点的にやってくれ」

「はっ、了解しました、しかし少佐は…?」

「俺か?、俺は近くにある飛行場を無力化して、敵の航空兵力を少しでも多く潰す。降下中のHLVはただの的だからな」

そう言って、俺は降下前に渡されたオデッサのMAPを見ながら、飛行場へと向かう

「了解しました、武運を。…おい、ルーキー」

「は、はい!？」

周囲を警戒する事に集中していた新兵が、素っ頓狂な声を上げる
「行くぞ、さっさとついて来い」

「はいー!」

2人もこのエリアを確保する為に動き出した

「(っ)か…」

あれから数分真っ直ぐに進み、飛行場に到着した、道中抵抗があつたものの、特に損害を出す事なく排除できた、やはり弱い。飛行場では忙しなく作業平野戦闘員らしき兵士たちが右往左往しており、まともに出撃準備すら整えていないらしい様子だった。

「何ともまあ…もうちよつとまともに機能してくれなくいものかねエ…」

などと言いながら、弾倉を交換したバズーカ全3発、それぞれ一発ずつ格納庫に向かって撃つ。そのまま残る予備の弾倉3つのうち2つの、合計6発のうち5発を使い、8つあった格納庫全てを吹き飛ばし、そのまま滑走路横に置かれた戦闘機を全てハチの巣にして、バ

ズーカで管制塔を破壊し、最後のマガジンを交換して、飛行場内をぐるっと見渡す。どうやらここには守備隊等は折らず、燃え盛る格納庫や管制塔、そして傷ついた兵士たちの悲鳴や絶叫、うめき声と、助けようとする兵士たちとの声で、阿鼻叫喚の地獄絵図になっていた

「投降せよ！、繰り返し、投降せよ!!」

外部スピーカーに切り替え、ハイパーマシンガンをそれに向かって放ちながら、投降を呼びかける

「分かった！、投降するー!」

この飛行場の責任者らしき男の声が聞こえてから少しして、滑走路に残った者たちが両手を上げて集まる、それにハイパーマシンガンを向けつつ、エリアの制圧に向かった2人を呼び出す

「少佐、どうしました?」

「飛行場を制圧した、また同飛行場にいた連邦兵士を多数捕虜とした。本隊到着後、報告してくれ」

「了解しました」

「後、他に降下した先発隊はどうなった?」

「は、でしたら順調なようで、既に割り振られたエリアの確保に成功しました。…無論我々もです」

「そうか…ご苦労だったな、引き続き周囲の警戒を頼む、いつでもから敵が来るか、分らんからな」

「了解しました」

敬礼して、通信を切る

「…来たか」

とうとう第1次降下作戦が始まった。先行した俺らが確保した降下エリアに対し、主力第1陣が降下を開始した。まるで流星群のように降り注ぐHLVの群れに感動しつつ、捕虜とした兵士たちをじっくりと眺める。…ああ、良い絶望^顔だ

追撃、ヨーロツパ戦線

「第1次降下作戦は、第1段階のバイコヌール宇宙基地とその周辺エリアの制圧。第2段階、オデツサとその周辺エリアの制圧。これにより第1次降下作戦は成功。現在俺は敗走する連邦軍を追撃するため、に急遽編成された欧州方面追撃隊に配属された…のだが……」

「はあ!?、私に鹵獲艦の艦長をやれえ!?!」

基地司令のマ・クベ大佐に思わず詰め寄ってしまう、慌ててデスクから離れると、心底嫌そうに、ツボを拭きながらマ・クベ大佐は話し出す

「良いかね?、そもそも君のような階級の人間が分隊指揮官など、下への示しもつかんし、何より軍の命令系統に著しい混乱を……」

「だからと言って!、何故指揮官適正が皆無の私が!、しかも鹵獲艦の艦長をしなければならんですか!?!」

実際士官学校時代の有名な話だからな、そのせいで、無能ボンボンと屈辱的なあだ名を付けられたものだ

「とにかく!、これは命令だ!、君は黙って従えばいいのだよ!?!」

「……はあ……」

「隊長、大丈夫ですか?」

ルーキー：ラーク・ジェイス伍長が俺を慰めてくれる、良い奴だなあ：少尉は当然の事ですとか言っつて、全然慰めてくれなかった：「少佐殿、そろそろ出発の時間です、直ちにブリッジまでお越しく下さい」

聞きなれない、以下にもインテリと言った声質の男の声が、スピーカーから聞こえてくる

「はあ〜：」

一際大きいため息を吐いて、格納庫からブリッジへと向かう
「やつと来ましたか：」

立っていたのは新品の士官服に身を包む、淵の黒い眼鏡を付けた青年だった、彼の名前は「ホオーカス・デユノット」大尉、私よりも4年早く軍に入隊した男で、指揮官としては本当に素晴らしい才能を持っているとの事だ、またクルーとのコミュニケーション夜間の治安維持等も素晴らしいの一言に尽きる。駄々をこねて良かった：

「待たせてすまん。では、出撃だ」

オデッサの陸上戦艦用の停泊地より、一隻の戦艦が出港した。ビツグ・トレーよりも大型で、形状もだいぶ違う。まずビツグトレーの様な長方形ではなく、ブリッジ部分から2つに分かれており、ブリッジのすぐ前と、その2つに分かれた部分にそれぞれ1つずつ、巨大な主砲が置かれている。これはグレイ・フォーク級と言う、俗に攻撃型陸上戦艦とか言われるものだ。コイツの後部にMS整備用のハンガーを取り付けた、アンバー・フォークと言われるものだ

「このまま我々はサンクトペテルブルグに立てこもる連邦軍を撃滅、その後到着する本隊の到着を待つて、北欧の掃討に向かいます」

「我々だけでか？」

幾ら何でも数が少なすぎるだろうに：後ろのハンガーには3機しかMSを搭載できないんだぞ：

「いえ、同型の戦艦が4隻と、1個大隊による相当です、楽な任務になりますよ」

「そうだな、ではスターリンググラードの攻略作戦を練ろうか」

「止まれえー！」

切羽詰まった表情で、余裕が無さそうに怒鳴りながら銃を構える連邦兵士を内心鼻で笑いつつ、奪った連邦の制服を着た俺は

「ま、待ってくれ!?!。俺は味方だ!、撃つなあ!!」

「ッ!?!、す、すまない」

連邦兵士は俺を受け入れてくれた。チヨロイ、町の仲は不安そうに家の窓から様子を見る街の住人と、けが人の手当てに奔走する兵士や、うめき声を上げたり、泣き叫んだりする兵士。これからどうするか話し合う兵士たちの怒号とで、酷い状況だった、左の広場を観ると、61式だけじゃなく、幾つかの車両が止められていた、どうやらここが連中の司令部のようだ、後はここ以外にもまだ連邦の兵士がいなかどうかを確認してから。吹き飛ばす事にしよう

「君、所属は…?」

「…」

「君?」

「ッ!?!、は、はい!?!、自分でしようか?」

あつぶねえ、まさか俺を呼んでいたとは…

「君はどここの所属だ?」

「えくつと…第12戦車中隊の、エラン・シユーグッド少尉であります」

とりあえず元の子の服の持ち主の所属をそっくりそのまま喋る。

「そうか・妹は見なかったかい？」

「いえ…ここには自分一人できましたから……」

何だ、妹も軍に入ってたのか、馬鹿な奴だ…そんな不安そうな顔するなら、最初から入れなきやよかったんだ

「自分はこれで…」

「あ…ちよつ、まっつてくれ…!」

何やらまだ聴きたい事があるようだったが、あいにく何も知らないんで名、さっさと脱出させて貰うよ

「さて…予定通り座標の確認はできたな…」

街を出てすぐの場所で座標をアンバーに送ると、既に潜入した部下全員から座標と脱出の連絡があったと報告を受けた。直後、待機していたアンバー空の砲撃が始まり、街に火の手が上がる、素早く付近のクレーターに隠したザクに乗り込み、街へとバズーカを撃ちつつ接近する

「ひでえな…」

既に部下たちもザクに乗り込み攻撃を始めており、町はアンバーの砲撃とザクの攻撃により、まさに地獄絵図と化していた

「…」

とりあえず街の住人ごと建物をハイパーマシンガンで撃ち抜く。とにかく手あたりしだいに街を破壊していく

「降伏する…!、直ちに戦闘を中止され…!」

可哀想に、もっと早く降伏していればよかったのに…その後明け方まで攻撃は行われ、結果町はただの瓦礫の山に代わり。合流した本隊からこちらに合流した部隊と共に。北欧掃討向け、海沿いのビボルグへと進撃を開始した

ハルデイ山要塞基地攻略作戦

「どうやらビボルグに駐屯していた連邦軍だけでなく、ノルウェー、スウェーデン以西の連邦軍はすべて撤退したようです」

そう言つて、執務室で嫌な書類とにらめっこしている俺に、一枚の写真がついた書類を手渡してくる

「撤退した連邦軍は、この旧フィンランド共和国が全面核戦争時に備えて建設したハルデイ山要塞基地を始めとした、旧フィンランドⅡノルウェーⅡスウェーデン国境に防衛線を築いたようです」

部下が手渡してきた書類に部下の報告を聞きつつ目を通す。内容は至極単純。推定される敵要塞の保有戦力。要塞に敷設された砲台を始めとした各施設の場所などなど。中々の規模の要塞だ、これほどの規模は初めてお目にかかる

「我が隊の戦力はこのアンバー・フォークと、3機のMSのみです。とてもこの規模の要塞を攻略することなど不可能です！、本隊に増援要請を！」

「分かっている！、しかし、マ・クベ大佐からは本隊は既に進軍を始めたので、一切の掩護は出来ん。と言われてしまつてな、現状戦力でどうにかするしかない」

「(しつかしマ・クベ大佐も理不尽なものだな…アンバーのみでこの要塞を落とすのは無謀が過ぎる…やはり北欧方面軍全軍による攻略作戦を練る必要が…)」

「…ラック軍曹、現在フィンランド地区の連邦軍に対する掃討作戦が行われていたよな？」

現在われわれ北欧方面軍は、まず第1段階としてフィンランド地区の掃討作戦をおこなっていた。そしてラック軍曹はやや困惑気味に、そうです。と答えてくれる

「…ならサンクトペテルブルクをもう一度やろうか…。副長、ただちにエノンテキエへに集結して欲しいと北欧方面軍全軍に通信を送ってくれ」

「了解しました、艦長」

副長に通信を送り、ラック軍曹にご苦勞と勞いの言葉も入れて。急いでブリッジへと向かう

「で？、我々を集めて、一体何を話し合うのだ？」

北欧方面軍所属 ラーグ・グール艦長 オスカー・フォン・ルーカス少佐

「……」

北欧方面軍所属 ユニノ・ラークス艦長 ダニオ・オーランス中佐
「ラークス少佐は来ておらんのか？」

北欧方面軍総司令官兼第11混成大隊大隊長 「カエサリオス・バーメリウス大佐」

「ラークス少佐は大隊規模の敵部隊と交戦中のようで、通信すら行えないほどの激戦のようです」

北欧方面軍所属 アンバー・フォーク艦長 カイト・バジユール少佐

「であれば、救援に向かう必要性があるのではないか？」

「その通りだ、呑気に会議何ぞやっている場合ではない」

総司令官であるカエサリオス大佐の言葉に、オスカー少佐も同調する。オーランス中佐は何も言わずに、出された紅茶を楽しんでいる
「失礼します」

大佐と少佐の2人が今まさに救援に赴こうと席を立とうとした瞬間

間。副長が部屋に入って来る。手には何やらメモらしきものを持っている

「先程ラークス少佐から連絡が入りました。どうやら戦闘に勝利し多数の連邦兵を捕虜にしたとの事です」

「おおー、そうかね」

この報告には大佐もご満悦だ。部下の手柄は上司の手柄だからな。そりゃ喜びもするだろう

「しかし、オデッサからの捕虜回収部隊が到着するまで動けなくなつてしまったので、作戦に参加出来そうにないとの事です。報告は以上です、失礼します」

そう言つて、副長は敬礼して部屋を出て行く。大佐、少佐共にゆつくりと椅子に座ると、俺に作戦の説明を促してくる

「ええー、ハルデイ山要塞基地さえ落せば、敵も後退せざるを得ないはずです。しかし…」

「あの要塞基地を相手取るには、もう後2隻の戦艦と、20…いや、30機はMSが欲しいな」

そう言つて、めんどろくさそうに、オスカー少佐はティーカップの中身を飲み干す。そして

「して、我々をここに呼び集めたのだ、それなりの勝算があるのであるう？」

大佐も意地の悪そうな笑みを浮かべながら、ティーカップに口を付ける。実に似合わない光景だ…

「ええ…、その方法と言うのが…」

「司令、時間です」

艦長の言葉に、ゆつくりと頷いた大佐は、副長に砲撃開始を命令した。直後、大佐の乗る「アーク・シップ」を含む3隻の戦艦に積まれた3基の三連装砲、計9基27門の砲塔が、耳を劈き、空気を震わせるほどの爆音、陸の上にある筈の船を大きく揺らすほどの衝撃と共に砲弾を放つ。それは綺麗に弧を描いて、ハルデイ山の山頂付近とその周辺に落着した、

「第1波、着弾確認。敵損害不明…」

「全艦砲撃止め、再度の砲撃指示と同時に撃てるように準備しておけ」
忙しなく動き回る艦長室と、各所からの報告と指示を乞う通信、そして

「(さて…上手く行くかな?)」

「砲撃が始まる5分前… ハルデイ山要塞基地…」
「同、第12ゲート前」

「(いいか、作戦通り、タイムリミットは砲撃が飛んで来てからの10分間、それで全部終わらせろ、見つかった場合は即座にコールしつつ

逃走。無理なら自決だ。最悪基地の車両等を盗んでも構わん。……
時間合わせ」

その場にいた10名と、他の4つのゲート付近で待機する全ての工
作員殿最後のブリーフィングを済ませ

「5……4……3……2……1……0」

直後、味方の砲撃が基地を襲う、それから僅かに時が過ぎた後、う
めき声や悲鳴、怒号が聞こえはじめ、あちこちで誘爆音や火柱が上が
り始める

「……GO……」

一斉にゲートへと走り出す、全員手には「消火器を持っている」

「火を消せえー！」

「火の手は何処だあ!？」

「お、おい！、お前らどこの所属だ!?!…って言うか何で基地の外から：
!」

飛び出して行った俺らがゲートを突破し、歩哨として立っていたM
Pが俺らを止めようとしたタイミングで、消音装置付きのライフルを
持った二人の部下が飛び出し、一発でヘッドショットを決め、そのま
まゲート横の詰め所に死体を隠し、素早く置かれていた消火器を持っ
て、〃目標へと向かう〃

「まず第1段階で、工作部隊が突入する4つのゲートの「周辺」と山
頂付近を艦砲で攻撃します」

「こちらピクシー01、第2格納庫、設置完了」

「こちらピクシー02、配電室、設置完了」

「こちらピクシー11、第2ゲート、設置完了」

「こちらピクシー06、パイプラインのカット完了」

「次に第2段階。艦砲によって混乱した隙を付いてゲートを無力化
し、ハルデイ山周辺の基地施設への爆弾の設置、及び燃料保管庫の制
圧とパイプラインのカット。及び砲台を始めとした防衛設備の無力

化。防衛設備に関しては、第11MS混成大隊に担当して貰います」
「ピクシーリーダーより確認へ、ウサギの穴倉に潜りこめ。繰り返す、ウサギの穴倉に潜りこめ」

「そして最終段階。ハルデイ山内部の電力設備の破壊、格納庫の爆破。そして司令部の無力化、これは第2段階達成と同時に我々が突入します。司令部制圧後、報告が届いたら基地周辺の施設に仕掛けた爆弾を起爆させてから艦を前進させて下さい。後MSも全部出してください。それで降伏を呼びかければ。あっさり降伏してくれるでしょう」
「ん？、…ッ!?、お前らどこの…!?」

「黙ってるー！」
素早く腰のホルスターからサイレンサー付きのマシンピストルを抜き取り、こちらに銃を構えて来た連邦士官の頭を打ち抜き、素早く隣にいた部下が配電室の扉の鍵を取っ手ごと強引にショットガンで破壊し、間髪入れずに俺がドアをけ破りながらマシンピストルの残弾を全てぶっ放して制圧、素早く爆弾を1分半後に起爆するようセットし、そのまま司令部へと向かおうと配電室出た瞬間、警報が鳴り響き、ランプが真っ赤に光り出す。見つかったのだ
「このまま一気に指令室を落とすぞー！」

背中のショットバックからアタッチメント付きライフルを取り出し、予備のマガジンが入ったベストを含む装備一式を素早く装着して、一気に突っ走る

「撃て撃てえー！」
雑多な家具で即席なバリケードから怒号と共に鉛玉が飛んでくる。それをすぐ脇の通路に飛び込む様に躲し、手榴弾のピンを2つ明け、バリケードに投げ入れる。バリケードの向こう側でうわっという声が出た次の瞬間。バリケードごと連邦兵士たちは吹き飛び、障害が排除される

「行くぞー！」
そのまま強引に駆け抜け、とりあえず出会った味方以外は全員殺し

ながら進むと、特殊部隊用と思われるアーマーに身を包んだ兵士数人が、バリケードを組み上げ待ち構えている。そしてその後ろには分厚い金属製の扉が、こちらも分厚い金属製の隔壁によって閉じられようとしていた

「ラックー、パンツァーフアウスト6!!」

「了解」

スライディングしながらバックをバリケードに向ける、直後、バックを突き破り、現れた飛翔体がバリケードの上を通って丁度閉じきった隔壁にぶつかり、すさまじい爆発音と共にその余波でバリケードごと連邦兵士を吹き飛ばす、そのままこちらに倒れて来た兵士たちの頭に容赦なく徹甲弾をぶち込み無力化、そのまま大きく穿かれた隔壁から指令室に入り、対人用のパップコーン（数千発の鉄球を爆発時の爆風で周囲に飛ばす手榴弾のあだ名）を4つ全て投げ入れる。直後、一瞬の悲鳴と共にパアン、と言う炸裂音が4度なり、微かな物音以外何の音もしなくなった。辺りを見渡してみると、パップコーンによって粉々になったデイスプレイやデスク、チェアと共にずたずたに引き裂かれた人だったものの、飛び散った血とで、司令室は真っ赤にデコレーションされている。結構匂いもして来た

「ちとやり過ぎたかな……。……。こちらピクシーリーダー、ウサギヲ捕獲ス。繰り返す、ウサギヲ捕獲ス」

「艦長！、ピクシーリーダーよりウサギヲ捕獲ス、です!!」

オペレーターからの報告を聞いて、副長が何かを言おうとするも、それより早く、大佐の号令がブリッジに響き渡る。直後基地で複数の爆炎と共に煙が上がる

「全艦前進！、全MS隊、発進！」

直後、3隻の陸上戦艦がゆっくりと煤見出し、後方の格納庫から続々とザクが降り、そのまま母艦に追従する

「降伏せよ！、最早貴官らに退路はない！。繰り返す、降伏せよ！」

気の休む間もなく、状況を理解する間すらなかった連邦兵士たちは、無言で両手を上げる。ここに、ハルデイ山要塞攻略作戦は幕を閉じた

ヘルシンキの攻防

「ハルデイ山要塞基地攻略後。俺達北欧方面軍は欧州方面軍と合流する為。敗走を続ける連邦軍を追撃し。ついに最後の拠点であるヘルシンキにまで到達した」

この街を可能な限り無傷で手に入れる、そうマ・クベ大佐から命令された俺らは、MSと歩兵部隊を投入、ゆつくりと時間をかけて後略することにした……。のだが…

「くそつたれがあ!?!」

建物の屋根に隠れた連邦兵士の対戦車砲の直撃を受け、大きくバランスを崩して建物を盛大に巻き込み、その場に倒れる。凄まじい衝撃がコクピットを襲うが、倒れ際にハイパーマシンガンで屋根ごと連邦兵を吹き飛ばす

「だ、大丈夫ですか!?!」

ルーキーが慌てて周囲を警戒しつつ、俺を起こしてくれる

「ああ、なんとかかな…ありがとう、助かったよルーキー」

礼を言って起き上がる、するとロックオンされたことを示す警告と、ロックオンしてきた敵の方向が矢印でコクピットのスクリーンに映し出される

「ッ!?!、避けるッ!!」

「えっ?、うわっ!?!」

反射的にルーキーを突き飛ばし、バックパックのスラスタールと脚部のスラスタールを使ってイナバウアーのような体勢を取る、その目の前を、何かが通り過ぎて行く。砲弾だ、恐らく61式の物だろう。矢印の方向を見ると逃げ出そうとする61式がいた。それにハイパーマシンガンを叩きこみ破壊する

「無事か?」

「だ、大丈夫です…」

反射的だったせいかなかなり強めに突き飛ばしてしまったようで、結構深くめり込んでいた。慌てて建物から引き抜き。状況を確認する為アンバーに通信を入れる

「こちらピクシーリーダー。アンバー・フオーク、応答されたし」

「こちらアンバー・フオーク。ピクシーリーダー、どうした」

透き通った声がアンバーから帰って来る。∴オペレーターにこんな声の女性居たっけ？

「現状の戦況を報告されたし」

「現在エリア12の敵部隊の抵抗激しく、また歩兵部隊の一部はエリア11にて敵部隊の奇襲に会い、後方に後退した模様、ピクシーリーダーはこのままピクシー01と共に、市街地中央を制圧せよ、ピクシー02はエリア3にて中隊規模の敵戦車部隊と交戦中。また、本艦を含めた艦隊による支援砲撃は出来ない、その事に留意せよ」

「了解、ピクシーリーダー、アウト」

通信を終了し、周囲を警戒しつつついて来いとルーキーに手信号を送り、前進する。ルーキーもそれに合わせ、ゆつくりと周囲を警戒しつつ俺の後に続く

「こいつら!」

「隊長!、そこらじゅうにいますよ!」

市街地の中央に続く大通りにて、小隊規模の戦車部隊と遭遇し、これを撃破。しかし、その際反撃は無く、不審に思っただ瞬間。周囲の建物から一斉に対戦車ミサイルが飛んで来た。何発かは何とか躲けたものの、数発が被弾し。そのうち一発がザクのメインカメラに直撃し、スクリーンが真っ暗になってしまう。ルーキーも同様の不意打ちにあつたようで、俺よりかは被害の無い物の、やや右足の損傷がひどいようで、今にも倒れそうなほどに揺れていた

「逃げろ!」

とにかく手あたりしだいにハイパーマシンガンを暴れ内しながら、喉を潰す勢いで叫ぶ。直後、また対戦車ミサイルが撃ち込まれたのだらう、コクピットが激しく揺さぶられ、特にハイパーマシンガンを持っていた左腕の方空凄まじい振動とがコクピットを襲う。コクピット内は一瞬で真っ赤に染まり、機体の損傷が危険域に突入した事

を知らせる警告音が響き渡る。機体の損傷具合をコンソールから見てみると、八割の部位が真っ赤に染まり、武装も足のヒートホーク以外すべて使用不能と表示されていた。もう詰んでしまったと言っても良いぐらいに……笑えてしまうぐらいの窮地だった

「……ここまでか……ふっ……ははは……はははは……」

何故か乾いた笑いが止まらない……ああ……そうか……これが死の間際に出るって言う、笑いか……

「……もうちよつと戦いたかったかな？……ははは……」

ゆつくりと目を閉じる、直後。凄まじい衝撃がコクピットを襲う

「つちよ……だ……ちよ……」

微かに残る意識が、最後に聞いたのは……誰のものかも分からない……女性の声だった……何故か耳に残る、透き通った。とても綺麗な声だ。……そして、そのまま俺は意識を手放した

「……………!!……………」

「……………だ……で……か……」

誰かの声が聞こえる……地獄の門番の話し声だろうか？

「……………はや……め……て……」

いや、良く聞いてみるとルーキーの声だ。どうやら生きているらし

い、俺は

「隊長……、早く……早く起きて下さい!!」

「ん……」

流石にこれ以上寝ていると不味そうなので。ゆっくりと起き上がる、真つ白な視界が、徐々に鮮明にその場の光景を写し始める。が、それは右側だけで、効き目の左側は真つ白では無く真つ黒だ

「隊長……!」

「しよ……いや、中佐殿!」

「……」

どうやら医務室のベットに寝かされていたようだ……体中がえげつないぐらいに痛い。

見れば右手以外の両足と左腕にギブスがはめられ、頭と左目に包帯とガーゼが巻かれていた。と言うか結構体中包帯で巻かれている……あれそんなにヤバい程のダメージだったの? (小並感

「隊長、ちゃんと起きてますよね?、隊長……!?!、隊長ツ!!」

「うるっさいなあ!、ルーキー!?!、起きてるに決まってんだろ!?!」

しがみついて泣きじやくるルーキーをそう言っけ引き剥がす

「だつてえ……!」

「分かつたから!、泣くな!、なつ!?!」

「中佐、仲良くしている所、非常に申し訳ないのですが……」

「これが仲良くしていると本気で思っけんのか!?!」

ん?、今少尉は俺に何て言っけ?、中佐? ……少佐ではなくて?

「キシリア様から「昇進祝いだ」と、我々に宇宙^{ソラ}へ上がれとの指示が……」

「キシリア少将からか?」

「はい」

凄く意味不明だが……指示されれば従うしかあるまい……

「……分かつた。すぐに向かおう……それと……」

「どうかなされましたか?」

俺の返答に、良かったと胸をなでおろし、医務室を後にしようとした少尉が、俺の呼びとめに足を止めた。因みに、ルーキーは泣き疲れ

て眠っている……子どもか

「俺は一体どうやって助かった？」

そう、とてもではないが、あの状況で何故自分が助かったのか、是非とも知っておきたいところだ

「…それですが……分からないのです」

「はあ？」

一体どういう事だ？、何故わからない？、意味が分からん…

「ど、どういう事だ？」

困惑しつつも尋ねると、困った顔をしながらも、少尉は説明し始める

「自分が現場に到着した時。そこには破壊され建物と、そのがれきに埋もれる連邦兵士の亡骸と、ボロボロとなった中佐のザク。そして…」

「そして…？」

「見たことも無いMSでした。両腕の無い、銀色のカラーリングが施され、観たことの無い形状のMSがいました。胸の少し上あたりにリングがあり、そこに八枚の…はね…？…のような物を着けています、自分に気づくと、どこかに飛んで行ったのです」

「……………」

え？、何、それは？

「将官も流星にこれを報告するのはまずいと思ったのですが、機体の記録にはしっかり乗っているのです、ちゃんと。報告いたしました。では、これにて失礼します」

そう言つて、敬礼し立少尉は、そのままルーキーを抱えて回れ右して医務室を後にする

「あ、ああ……」苦労…」

その後ろ姿を困惑しながらも見送り、俺は良く分からんモヤモヤを胸に秘めながら、どうにもできないので、寝ることにした…

招かれた場所は

「で？、B号試験体による今回の実験の成果は？」

サイド3にある自分の執務室で。書類に目を通しつつ眼の前の白衣を着た男。

「ハルファー・フォン・ザクス」主任研究員の報告に耳を傾けていた。彼は額の汗をハンカチで拭きつつ。おずおずと話し始める

「はっ、ええ、今回の実験により、「センチュリオ」の重力下における稼働時の問題点等。非常に多くのデータを得ることが出来ました：ですが……」

「どうした？、何か問題でもあるのか？」

彼らには充分過ぎるほどの研究施設を与えだし、資金だってそれこそ表に出ないギリギリまで渡している。人員だって十分な数をそろえた筈だ……いつたいこれのどこに問題があるのか……

「い、いえ!?……いや、その……実は……その……」

「速く言いたまえ、私もそこまで暇ではないのだよ？」

少々イラつき気味にそう言い放つと、ハルファーは額を何度もハンカチで拭きつつ、たどたどしく容量の得ない説明をし始めた

「た、対人、対艦及び旧式兵器等の実戦データは十分に取れており。最早教育プログラムは8割がた完成したと言っても良いでしょう……ですが……」

「ですが……？」

「対MS戦に関するデータが一切ないため、その部分のみ。完全な空白となっているのです。これはゆゆしき問題です。今後、連邦軍もMSを量産してこちらに対抗して来るでしょうし、「プロジェクト・レギオンズ」のタイムスケジュール見直しも……このままですと視野に入れないければなりません……」

「そこまで深刻なのか……？」

「そうでなければ、この場で総帥にご報告しておりません」

「そうか……では早急に手を打とう。ご苦労。下がって良いぞ」

「はっ、ジーク・ジオン」

右手を斜め前に突き出すジオン式の敬礼をして、ハルフアーは部屋を出て行く。それを見送ってから、ゆつくりと立ち上がり、カーテンを上げて外のズムシティを一望してから秘書を呼び出した

「んんん、久しぶりのズムシティですね！」

長時間の船旅で硬くなった体を屈伸でほぐしつつ。ルーキーが嬉しそうな声を上げる。まあ降下作戦が始まってから、まだ一月半程度しか経っていないんだがな

「そうだなっ、痛ててて」

長旅で傷む体をさすりつつ。少尉に車椅子を押ししてもらおう。何とも情けない限りだ、…こんな状態で本当に訓練教官等勤まるのだろうか…?

「…?、中佐…」

「どうした?」

ルーキーが視線である方向を見るように促してくる。見れば白衣を着た若い男が1人、ふらつく足取りでこちらに向かってくる

「いやあく、どうも。貴方がカイト・バジュール中佐ですね？、私は「国技研」の「ニード・オースランド」です。どうぞよろしく」

そう言つて、オースランドと名乗った男は、こちらに握手を求めてくる。唯一無事な右手で握手に応じ

「で？、一体私に何の御用で？」

手を離してそう尋ねると、男は嫌らしく口元を吊り上げ

「キシリア閣下からの出世祝いを…届けに参りました……」

そう言つて、オースランドは駐車場脇に止められた、一台のトラックを指さす…乗れ…と言う事だろうか？

「ささ、参りましょう」

そう言つて。オースランドがトラックへと向かつて歩き始める

「…中佐、いかががいたしますか？」

「…キシリア少将の出世祝いを知っていたのだ。問題ないだろう…もしかしたら連絡役の可能性もある、ここはひとまず彼に従うとしよう」

「はっ、了解しました」

俺の指示に頷いた少尉は、横目でちらりとルーキーを見る。ルーキーもうなずき、肩に下げていた旅行鞆から拳銃を取り出し、それを腰のホルスターにしまい、何時でも撃てるように身構えつつ、俺と少尉の後ろに着く

「中佐と、お付きの方々にはこちらのコンテナの方に乗車して頂きませう」

そう言つて、オースランドはコンテナの扉を開ける。中は外とはまるで違つていた。まず外側はさびまみれの使い古された金属製のコンテナに見えるが、中は全面真っ白で、汚れやさびなど何処にも見えない。手前にはソファアーのと、ソファアーの眼の前にテーブルが置かれており、その奥に、歯医者の手術椅子らしき椅子を中心として、見た事も無い機械が置かれており、白衣を着た数人の男女がその機会を取り囲むように立って、何やら議論し合っている様子だ

「お客様だ！、準備しろ！」

オースランドのその言葉にハツとした男女は、慌てて機械や椅子の

準備を始め。タブレットらしき端末でチェックを始めた

「ささ、お乗りください。お手伝いいたします」

そう言って、肩を貸す様に俺の目線のあたりにまで肩が来るように姿勢を低くするオースランドに、

「ありがとう」

と礼を言って彼の肩に手を掛ける、すると少尉が

「自分が…」

と行って、俺の身体をひよいつと抱きかかえる。よくもまあ、大人のをこんなにも軽々と持ち上げられるものだ。と内心感心していると、ルーキーがトラックに上がり

「自分が、中佐をお上げいたします」

と行って、両手を伸ばしてくる。少尉は

「助かる、やっと使えるようになって来たな」

と、半笑いで言う少尉、それに反論するルーキーをからかいつつ、彼に引き上げてもらう、やや震えているようだが…まあ任しても何の問題も無いだろう。そのまま少尉が車椅子を持ってコンテナに上がり、俺は車いすに座らせてもらう

「では、到着までの間は彼らがお相手をしてくれます。それでは…」

目の前で機械や椅子の準備を進める男女を指さすと、男は人当たりの良さそうな笑みを浮かべながら、コンテナの扉を閉めた、それからすぐに微かな振動がコンテナを揺らし、車が動き始めた事を知らせるエンジン音と、コンテナの振動が伝わってくる

「(さて…鬼か蛇か…：考えたくもないな…)」

無い真相重いなあガラ、俺は目の前で機械や椅子の準備を進める彼ら彼女らがこちらを向くまでの間片時も目を離さずに、見続けた

続・招かれた場所は

「…これで一体何が分かると言うんだ？」

包帯のみを外した状態で、体中吸盤が付いたケーブルが無数に付けられており、頭には無数のケーブルが付いたヘルメットを被っている。そして機械やタブレットに表示されたデータに目を通しつつ、私の周囲に立つ白衣を着た男女はそれを見ながら議論を繰り広げている

「やは…の…だから…か…ニユ…プだ…う？」

「いや…や…り…だ…も…ちよ…」

「…一体何をしているんだろう…」

テーブルに置かれた菓子を食べつつルーキーが疑惑の声を上げる。

それに対し少尉は携帯端末で趣味の電子小説を読みつつ

「いざという時は俺達で何とかする。それで良いだろう」

と、ゆつたりとしたソファアにどっかりと座って、完全に暇をつぶしていた。

「そりや…そうですけど…」

少尉の言葉に頷きつつも、疑いの目を自分の直属の上官たる中佐をまるでモルモットのようになげう男女へと向け続ける。その手には、中佐に何か異変が起きた時、すぐにあの調査を止めさせるために、銃を握りしめていた

「もう1時間半はあの状態なんですよ？」

そう、ぼくたちがこのコンテナに入れられ。トラックが動き始めてからはや1時間半が経ち。その間中佐はずっとあの奇妙な椅子に座らされ、モルモットのようになげうていた。

「そろそろトイレに行きたいんだが…」

そう俺がいった直後、一際大きくコンテナが揺れ、エンジン音が止む。どうやら停車したようで、すぐに扉が開き、オースランドが現れる

「…いつまで中佐にそれを付けたままなんだ？、早く外して差し上げろ！」

オースランドがそう言うと、白衣を着た男女は慌てて取り付けた器具を取り外し、新しい包帯を巻き、中佐を抱きかかえて、コンテナ外にゆっくりと向かう。それを慌てて車椅子を持ったルーキーと少尉が追いかける

「慎重に降ろしてくれよ?」

半笑いで俺がそう言うと、車椅子を置いた少尉とルーキーが先にコンテナの下に降りて両手を広げ、俺を受け取ると車椅子に座らせてくれる

「ありがとう、少尉」

「はっ」

「では、どうぞこちらに…」

オースランドはそう言って、目の前の真っ白な5階建ての建物に歩いて行く。俺は少尉とルーキーに目配せする。少尉とルーキーは頷き、少尉はゆっくりと車椅子を押してオースランドの後を追う

「ようこそ、国立技術研究所へ…ここはスペースノイドの未来を作る場所、ここに…」

入口の自動ドアを潜ると、機械音声が俺達を出迎えてくれる、ここは円形状の吹き抜け構造となったエントランスホールのように、少ない数の人が行きかっている。無論全員白衣を着ており、いかにも研究所と言った感じだ

「ああ、君。電話を貸してくれないか?」

エントランスに入ったオースランドは、やや焦り気味に受付嬢から電話を借りると素早く誰かとひと言、ふた言、言葉を交わし

「ややや、お待たせして本当に申し訳ない…、ささ、どうぞこちらへ…」

またも人当たりのよさそうな笑みをしつつ、エレベーターのボタンを押すオースランド、俺たちはそのままオースランドが呼んだエレベーターに乗り込み、オースランドが押した3階で止まる。そのままエレベータを降り、オースランドを先頭に通路を進み、第4会議室と書かれた部屋で止まるとオースランドはゆっくりとこちらを向き

「こちらでお待ちください」

そう言って、オースランドは俺達を部屋に通し、そのまま別室に映

る。そして、あらかじめ設置されていたスクリーンにギレン総帥が映し出される

「ッ!?!、ぎぎ、ギレン総帥!?!」

「総帥!?!」

「何故…!?!」

三者それぞれの反応を示す中、眉一つ動かすことなくギレンは「さて、諸君らをここに招いたのはほかでもない、この私設にて保護されている者がいる……入れ……」

直後、別室の扉が開かれ、士官服に身を包む少女が1人、オーズランドと共にでてくる

「彼女の名前はセプト・レギオ少尉だ。彼女を君らの分隊の補充兵として新たに加え、突撃機動軍所属の、第0教導隊に再編する事が決定した」

「諸君らには突然の事で困惑するだろうが、新しい部署で最善を尽くしてほしい、以上だ」

そう言つて、スクリーンに写されていたギレン総帥が消え、スクリーンが天井にへと巻かれていく

「先程ギレン総帥より紹介されましたが、改めて。自己紹介をさせて頂きます」

呆気にとられていた俺らは少女の声のする方向を反射的に見る

「本日付をもちまして、国立技術研究所守備隊より転属となりました、セプト・レギオ少尉です」

年齢は15〜6歳ほどだろうか?、美しい銀のショートヘアの彼女は、真っ赤なサングラスを着けていた、一体何の意味があるのだろうか
…

「…カイト・バジュール中佐だ、よろしく頼む」

まだよく状況を飲み込めていないが、とりあえず目の前の少女…セプト・レギオ少尉に敬礼して迎える……まあこう言つてはあれだが、ギレン総帥からの直々のご命令とあれば、従う以外の選択肢はないし。まあ可愛いし。問題ないだろ

その後、俺はこの重傷を直す為に地下へと案内された

「これが新型の培養治療槽か？」

培養治療槽……簡単に言えば細胞治療液に満たされた容器に体を漬け込むことで短時間での完治を可能にする。最新鋭の医療機器である、これはその最新型で、体の3分の1・5までの欠損を4時間で完治させることが出来る（従来のものが同じ量を完治させる場合、2〜3日かかる事を考えると、まさに画期的なものである）

「前みたいな浴槽タイプだと思ってたんだがなあ……」

これを読んでいるお前らはもう分っているとは思いますが、培養治療槽はその治療法から服を着る事が出来ず、全裸で入らなければならぬ。その為、プレイバシー等々の観点から液体は深い緑色にし、また浴槽タイプとする事で対応した。が、この培養槽はまさに培養槽と言った縦型の丸い物で。使われている素材もガラス化それに類するもののように透明だ、おまけに色は真っ白だと言うのだ……真面目に入りたくないんだが……

「専用の下着で大事な所は隠せるんで、それで勘弁して下さい。さ、早く入って入って！、総帥から明後日までに貴方をグラナダに健全な状態で送り届けるよう言われてるんですから。さあ、早く！」

そう言つてオースランドは俺を更衣室に押し込み、カーテンを閉める。……全く。何でこんな目に……これだから市街地戦でMSには乗りたくないんだ……全く。と言うか手伝つてくれないのか!？」

「ほら、着替えたぞー！」

結局手伝つてくれなかったオースランドを睨みつつ、トランクスー丁で更衣室を出る。全く……なぜこんな破廉恥な格好をせにやならんのだ……！

「このゴーグルと酸素供給用のマスクを着けてください。間違つても外さないようにしてください、治療中は軽い睡眠状態になるので、起きたら無傷の身体に戻ってますよ」

ゴーグルとマスクを手渡しつつオースランドは笑顔で言う「培養槽への扉を開け、俺をその扉から抱き上げて培養槽の中の壁に横たえ

させる

「後はこのチューブをそれぞれ青を右に、赤を左に着けて…と。よし！、準備完了」

マスクの二つの穴に天井から伸びる2本のチューブを取り付け。そのまま培養槽を出て扉を閉め、横に設置されたコンソールを使って何やら操作し始める。そして

「では治療用のナノヒーリングジェルを注入します」

オースランドがそう言った直後、尻の下の地面から冷たい何かが急速に湧き出はじめる

「(冷た!?)」

足元を見ても何も見えないが、もう既に腰のあたりにまで何かが来ていた。これが最新のナノヒーリングジェルか…正直目で見えないから半端なく気持ち悪いと言うか…ぶっちゃけ結構怖い

「(これ本当に大丈夫か?)」

そうこう考えているうちに、とうとう体がヒーリングナノジェルに飲み込まれる。体がゆっくりと浮き初め。姿勢を安定させようにも右手一本だけではどうにもできず、ふらふらと揺れる視界に少し気分を悪くするも、ゆっくりと視界がかすみ始め。先ほどからオースランドの乱雑に置かれたせいで若干悲鳴を上げる両足の痛みが、次第に感じなくなり始めた

「中佐…?…中佐?、この指の数が見えますか…?、ちゅ…さ…き…て…ち…」

うるせーバカ野郎。声がちっせえんだよ…聞こえ…ねえ…だろう…

「…」

「…寝たか、きて。後は4時間。パイロットスーツの事でも考えとくかな…?…例の新型機の開発もしなきゃいかんし…」

そう言っつて。オースランドはコンソールに表示される俺のバイタルデータなどに目を通しながらも、別の端末で何やら研究を始めた…

月面講義

「はあ…はあ…はあ…」

目の前に広がる何もない月面の大地の起伏を使い、敵の攻撃を躲しつつ、手に持つマシンガンで反撃する。しかし敵はそれを難なく回避し、背中に装備したジャイアントヒートホークをマシンガンと持ち替えながら一気にこちらへと接近し、最早斧と言うより鉄塊とすらいえるそれを降り下ろしくる

「ッ!?!、ヒートホーク!」

咄嗟にマシンガンと腰のヒートホークを交換し、受け止めずに重心を反らす様にいなそうとするも。上手くいなせず弾かれ、そのまま右腕を肩ごと切り飛ばされる

「…ッくう!?!。ま、まだ…!」

スラストターで一気に敵から距離を取りつつヒートホークを敵に投げつける。敵はジャイアントヒートホークの刃を横にしてそれを防ぐ。が、そのタイミングで敵の手や足などを狙ってマシンガンをばら撒く。が、敵は待つてましたと言わんばかりにジャンプしてそれを躲し。そのまま上空から絶えず散発的な攻撃を続け、私はあせりと不安、そして疲労感とが募り始めていた

「はあ…!、はあ…!」

このままではいずれやられるだろう、覚悟を決めた私はまずマシンガンで前方の岩を砕き、それを両手で持って、一気に敵へと迫る

「……」

敵はすばやくマシンガンを構え、それを放ってくるも。岩塊に阻まれて彼女にまでその銃弾は届かない、そして

「やあ!」

私は狙っていた距離まで近づくと、盾として持っていた岩塊を敵へと投げつけ。マシンガンを構える。あの岩塊を避けるにしろ防ぐにしろ受け止めるにしろ必ず隙が生まれる、そこを突けば勝てる。私は勝利を確信した

「…いい考えだ」

その通信が聞こえた直後、岩塊が一瞬とまり。次の瞬間には凄まじいスピードで彼女へと迫る

「ッ!？」

咄嗟に各部の姿勢制御バーニアとスラスタを使ってステップを踏むように岩塊を避けるも、次の瞬間敵のヒートホークが頭部のメイソカメラに叩きつけられる

「ぐう…!?!、うう…!?!」

凄まじい衝撃がコクピットを襲う。そして

「さて、どうする?！」

男の声が聞こえた直後、機体が僅かに揺れる。何かに小突かれたようだ

「……降参です」

コクピットを開けて、ゆつくりと両手を挙げつつ外に出る。すると目の前には深い青色を基調とし、それに深緑色が混ざり合ったまだら模様のザクIIが、手に持つそのジャイアントヒートホークをコクピットの目の前に置いていた

「ま、悪くはなかったな。前よりはマシだぞ」

そう言っ、俺は彼女。セプト・レギオ少尉を自分の期待のコクピットへと引き入れる。こうして手にとって見て改めて思うが、本当に小さな体だ。強く抱きしめれば、それだけで潰れてしまうんじゃないか。そう思えてしまうほどに

「中佐?！」

「ツんん?!、んど、どうした!?!」

い、いかんいかん思わず見とれてしまっていた。セプト少尉は不思議そうに俺のほうを見ている。とりあえずコクピットに入り、少尉を引っ張り出した予備席に座らせ、セプト少尉が乗っていたザクIIを背負い、グラナダに帰投する

地球へ

「隊長。幾ら何でも今回の任務はおかしすぎますよ…?」

そうやってウイスキーの入ったボトルを俺に向けてくるルーキー。それを宥めつつ

「まあ落ち着けルーキー、どうした?、悩みなら俺が聞いてやってもいいぞ?」

そうやって向けてきたウイスキーのボトルを取り上げつつ、新しいウイスキーのボトルを開ける。二人で一つのボトルを飲んでいるが、これで3本目である俺も結構酔いが回ってきた、そろそろやめとかないと明日機体の中がゲロまみれになっちゃうな…

「全部がおかしんですよ!、大体ですなエ…教導隊と言っても教える相手はセプト少尉とセプト少尉のそっくりさんだけ。おまけにその事をそっくりさんの送り迎えしてくれるオースランドさんに聞いても「知らなくていい。自分の仕事をしろ」の一点張り!、長期の休暇の申請も絶対に却下され、グラナダの割り当てられたこの区画から出られない!!。これじゃあ監禁ですよ!」

顔を真っ赤にしながら、俺の頭を取り上げたはずのウイスキーのボトルでペシペシと叩きながら抗議の声を上げるルーキー…: 一体いつ取り返した?。って言うか何上官に暴力振ってんだこの泥酔バカ

…

「まあまあ、俺らが所属する部隊も親衛隊なのか、突撃機動軍なのか、宇宙攻撃軍なのか。それとも新設される本土防衛総軍なのか。一体どれなのかわかんない状態だからなあ…: 上もきちんと所属が決まるまでは長期休暇は出さないつもりなんだろ…?」

実際問題そのせいで文句を入れる相手が国技研とその国技研を運営してるっポイ総帥府ぐらいしかない状態なんだが…: 片方は行っても無視だし。もう片方には抗議したら文字通り消されそうだしなあ…

「ま、何とかしてやるから。今は我慢しとけよ…: な?」

そうやって肩を叩いて労う…: が、反応はなくそのまま後ろにあおむ

けに倒れてしまう

「おいおい……大丈夫か？」

頬を軽く叩いてみるも、特に反応はなく寝息を立てるルーキーを見て安堵しつつ。抱っこしてベットに運び、寝かしてやる。……ここ連日ぶつ通しだったし。明日は休暇だ（俺は仕事だが……）……まあゆつくり休んでくれることだろう（適当）

「地球へ降下せよ、ですか？」

「そうだ、君ら第0教導隊は総帥府直属の第12MS親衛大隊所属の第2小隊に名前を変え、新型機と共に地球に降りてもらう。降下先は中国区とモンゴル区の境界線上に位置するランタウ基地だ。以降の指示は降下後、同基地の基地司令より言い渡される。以上だ」

そう言ったのはグラナダにある兵器工廠の一角を陣取り、総帥府から俺達の仕事ぶりを見るためだけに派遣されてきた「ヘルエス・パーシヴァル大佐」だ。共和国時代から軍にいた彼女は、深いブルーの瞳に肩にかかる程に伸びた美しい黒髪を持ち、総帥府に所属するもののみが着れる特別な制服に身を包んでいた。そんな歴戦の勇士である彼女は共和国時代に幾度も重傷を負ったらしく（何を幾度もしたのかは不明）、制服の袖に隠れていない手の甲の半分からやけどの跡が見え、首全体から胸元に向けて銃創や火傷、果ては切り傷らしきものま

で見えている。ハッキリ言って…これほどの美貌を持っていながら、何とも惜しい話である

「了解しました」

敬礼し、回れ右して執務室を出ようと扉に手を掛けた時、大佐が俺に

「貴官は上に気に入られている。精々努力する事だ…」

振り返ると、大佐は怪しげな魅力を纏った笑みを浮かべながらも、その眼は全く笑ってはいなかった

「はっ、ご忠告感謝します」

と行って、再び彼女に向き直って敬礼し、今度こそ執務室を後にした

「これが…俺の乗る新しい機体か？」

格納庫にて整備が進む機体を見ながら、俺は一人つぶやいた…

目の前にあるこの機体、全体的に重厚そうな外見の子の機体は頭部や胴体、そして腰のスカートなどは黒色のカラーリングだが手足や腰と胴体の間には紫色のカラーリングが施されている。頭部は特徴的な十字レーンのモノアイレールを採用しているこの機体。正式名称を「MS-09ドム」と言い、これは正式配備が決定される前にエースパイロット向けに生産された先行量産機だ。そんなものを人数分

用意してくれるとは、どうやら相当気に入られているらしい。格納庫で整備を受ける4機のドムを眺めていると、一機だけ、他の者と違うものを見つけた。頭部を覗き全身を黒味がかつた青に深緑色とほぼ青みが買った緑のまだら模様塗装されており、頭部にはサメの口を思わせるペイントが施された機体。武装は他の物と同じ「ジャイアント・バズ」と呼ばれる大口径のバズーカ砲と主にグフが使用する「ヒートサーベル」をドム用に改良した新型タイプとここまでは通常のドムと同じなのだが、他の機体とは違い、両腕に射撃用のぞき窓が付いた盾（ジオン軍が良く使うL字型ではなく連邦軍などが使うタイプと同系の物）が装備されており、先端部には金属製のスピアが3本生えている、俗にいうデュエリング・シールド（ソードシールド、スパイクシールド等の呼び方もある）を装備しており、また腰の後ろにあるマウントに新型と思われるマシンガンが装着されている

「しっかし…こんな新型まで回してもらえるなんて、うちは出世したなあ…」

上には気に入られてるし（本当に気に入られているかは正直怪しい）、教導隊として充実した仕事も出来てるし（教えているのはセプト少尉とそっくりさんのみ&グラナダの割り当てられた区画からは絶対に出れない&休暇も取れないで実質軟禁状態）、おまけにこんな良い機体まで回して貰えた（その代わりに唐突に部隊ごと配属替えするとか言う通常の軍隊なら確実にあり得ない人事…人事と言っているのか？+総帥府直属の親衛隊行きできなくさきさき300%状態）……………あれ？、目から涙が止まらないや…

「い、いかにいかに…！、機種転換訓練が明日から始まるのだ、早く寝なくては…」

「機種転換…って、何で同じ規格じゃないんですか？」

マニュアルとにらめっこしながらルーキーが純粋な疑問をぶつけてくる…まあ分らんでもないが…

「ザクを作ったジオニックと、個のドムを作ったツイマッド社じゃコクピットの操作方法がまるで違うんだぞ？、と言うかコクピットや機体に使われてる部品とかの規格もまるで違うしな。それに今更すぐに変わる事も出来ん。ま、諦めて早く覚えろ、後一月半しかないんだからな。こういうのは学校で飽きるほどやっただろ？」

と、行ってみたものの、実は俺こういった勉強はガチで無理な方なんだよな…

「…(ちら)」

「……………」

隣に目をやれば物凄い勢いでマニュアルや教本を読み上げて行くセプト少尉が視界に入る訳だが…相変わらずとんでもない吸収力だな。スポンジみたい(小並感)

「一月半後…地球……………」

「最終チェック…オールグリーン。HLVの効果予定ポイントまで、後18秒」

「同、静止衛星軌道上」

再び降り立つことになるあの青い星に、俺はとある期待を抱いていた。それは単純だ

「投下まで3…2…1…投下!!」

自分を殺しうる存在と戦いたい。それが叶うのではないか?、そう言った期待を…俺は抱いていた……

「隊長、予定より少し早いようです…」

そう言つて、隊長と呼んだ男に双眼鏡を渡す

「諜報部が手に入れた情報が間違っていたのか…いや、そうであればそもそもこの地点に敵は降下して来ないだろう…」よし、総員配置につけ！」

男はそう言つて双眼鏡を返すと、機体へと乗り込む。マニュアル通りに期待の各機能を起動し、スクリーンを起動する。一瞬にして、外の景色が表示され、計器類の明かりのみだったコクピット内を照らす「全機、許可するまで発砲は禁ずる、抜かるなよ…相手は新型だ…」

そう言つて、機体を立ち上がらせる。そのタイミングで月明かりを遮っていた雲が消え、光が彼らを照らす。その月明かりに晒されたシルエットは…この後彼らに地獄を告げる…

初の戦い

「……」

目の前は地獄と化していた。

破壊されたMSの残骸は、それが如何に惨たらしく殺されていったのかを物語っていた。そして辺り一面、破壊された格納庫内におかれていた車両やMSと残骸のオイルと、肉塊へと変わった人だったものの血肉、それらでコンクリートで舗装された地面は真っ黒になっていた。そしてそれをいつの間にか降り出した雨が洗い流していく。その中心にたった一機。体の表側をオイルで真っ黒に染めたドムが一機、残骸の上に馬乗りとなり、残骸にシールドの先端に付けられたスピアを刺した状態で止まっていた。……そして

「うえッ!？」

気がついた時にはすでに口の中まで胃の中のものが逆流してきていた。私は慌ててメット脱いで左手で口を押え、残る右手でコクピットハッチを開け、シートベルトを外した、そして

「うう……、……ッ!?!、うぐうッ!?!」

ハッチを開けた瞬間。今まで嗅いだことも無い死の香り^{戦場}が、コクピット内に一瞬で充満する。それに一瞬身を引いた直後、耐え切れずに私は転がり込むようにコクピットから開いたコクピットハッチの下側に移動し、勢いよく地面へと全てを吐き出した。

「おええ……、はあ……はあ……、うっ!?!、オロロロロロロ……!」

胃の中のものをすべて吐き出しても未だに胃をわしづかみにされたかのような痛みと言いやうのない不快感は消えず、今度は胃液を吐き出し始める。そしてそれすらも全て吐き出しきっても痛みと不快感は消えず。私は呼吸するたびにその吸った空気とほんのわずかな胃液を吐き出した

「はあ……はあ……うええ……!!。……?」

気がつくくと、オイルに染まったドムが目の前にいて、男が1人、私の目の前に立っていた。男はその場に崩れると、まだ吐き続ける自分を抱き寄せ、泣きだした

「う、うう……！、クソツ！、クソツ!!、クソガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

私はその男が誰なのか、何故私を抱きしめて泣いているのか、そんな事を考えた次の瞬間には私はまた吐いていた

「うええ……！、はあ……はあ……！、うつ?!、おええ……！」

「うう……ひつく……くそつ！、クソがあ……！、くそがああああああああああああああああ!!！」

少女を抱きしめた泣く男とその胸の中でえずき続ける少女が、血みどろの戦場跡で激しく降り注ぐ雨に濡れるその光景は、何とも形容しがたい恐怖の光景だっただろう……

「事の始まりは今より約1時間半分ほど前」

「ようこそ地球へ…、私はランタウ基地基地司令のヤン・ハーディ大佐だ」

　　といって、嫌にも陰気くさそうな細身の男が俺に敬礼して来る、それに俺も敬礼で返す。因みに降りて来たばかり尚で、士官服ではなくノーマルスーツを着用している

「第12MS新鋭大隊第2小队小隊長、カイト・バジュール中佐であります」

「さっそくだが、貴官らには総帥府より直属の命令書が届いている。内容が内容なだけに、私の執務室にて直接言い渡す、さあ来たまえ…」
　　そうやって大佐が歩き出したのとほとんど同タイミングで警報が鳴り響く

「敵襲!？」

「馬鹿な!?!、ここは前線からは40キロは離れた我が軍の勢力圏内だぞツ!?!、第一今の連邦にそんな余力など、あるわけがなからう!!」

　　俺の言葉を否定するように大佐がどなった。直後、基地のあちこちで爆音と火柱が上り、吹き飛ばされた人や建物、車両などの残骸や破片が宙を舞う

「ツ!?!、ばっ、馬鹿な…、こんなっ…、こんな馬鹿な話があつてたまるかあ!?!」

「大佐、お逃げを…!」

現実を拒絶するように絶叫し、その場にへたり込んだ大佐を助けようと手を伸ばすも、大佐は飛来したミサイルによって欠片も残さず蒸発し、爆発時に発生した地面を舗装するコンクリート片が俺を襲う
「ッ!？」

突然の事態にロクに防御の姿勢すら…いや、目の前で何が起こったのかすらも理解できず。俺は無数の破片に襲われた

「ぐあああああああ!？」

爆風によって吹き飛ばされ、何かに叩き付けられる

「ガハッ!？」

重力に従って叩き付けられたなにかから剥がれ落ちるように地面に激突する

「あっ……………」

その瞬間。俺の中の全てが止まった。自分に何が起きたのか理解できない、いや何故自分がこうなっているのかも理解できない。視界は真っ白に染まり。信じられないほどの耳鳴りによって、音すらも入ってこない

「……………!!……………!?!……………!!……………」

誰かが俺に話しかけてきている気がした。だが、未だに真っ白に染まった視界では話しかけてきた奴の顔は分からず。声も耳鳴りに遮られて何をいつているのか分からない

「た……ちよ……す……せ……たい……ちよ………」

次の瞬間激痛が俺の頬を襲い。真っ白だった俺の頭と視界が色を取り戻し。ゆっくりと意識が戻り始めてきた

「隊長!、起きて下さい!、隊長!!」

ルーキーの悲鳴とも絶叫とも思える声によって完全に意識を取り戻した俺がまず目にしたのはコロニーの空とは違い、どこまでも果てのない青空とそれを覆い隠そうとする黒煙。そしてMSらしき発砲音と、爆発音が耳鳴りの代わりに俺の鼓膜を激しく叩いた

「ッ!、なっ!?!、何がどうなって…」

「説明は後です!、立てますか!?!」

見ればセプト少尉と一緒にラーク少尉が俺の腕を引つ張つてHLVの方へ…いや、正確に言えばHLVから俺達のMSを乗せたトレーラーの方に走っていた

「立てるかどうかはやってみなきゃ分からんな!、状況は!?!」

伊丹に顔をゆがませながらもそれを笑い飛ばすように俺がそう言うのと、少尉が険しい表情のまま報告してくれる

「敵からの攻撃です!、攻撃は南側から来ています!!」

「数はあ!?!」

「分かりません!、基地の指揮系統は第1派の攻撃で壊滅、一部が独断で応戦しましたが、ほとんどがやられたようです!」

「指揮は誰が引き継いだんだ!?!」

「誰も引き継いでないません!、言ったでしょう、壊滅したと!!」

「クソツたれが…!、最悪だな!?!」

そうこう話しているうちにトレーラーまで到着した、HLVの前には2台のトレーラーが置かれており、まだ2機のドムがHLV内に置かれている、俺はトレーラーの陰で地面に降ろしてもらうと、生まれたての小鹿のように震える両足に活を入れながら、何とか立ち上がる「これに積まれてるのはいったい誰の機体だア!?!」

「ひっ、ひい!?!、ちゅ、中佐とセプト・レギオ少尉の機体ですう!?!」

そう言つて、トレーラーの中で震える心配らしい女性兵士に内心怖がらせたことに対して謝罪しつつ

「今すぐ非戦闘員用の退避壕に避難しろ!、急げ!!」

「で、ですが…その…に、任務が…」

そう言つて、彼女はどうしたらいいか分からないと言つた顔で後部の荷台へと目を向ける。それに舌打ちして

「いいんだよー、上官の命令は絶対だー、さっさと行け!!」

「はっ、はいいいいい〜!!」

俺に怒鳴りつけられるように命令された女性兵士は、ほとんど悲鳴のような声を上げて運転席から飛び出すと、急いで建物へと向かつて走り出す

「よしー、セプト少尉と俺はMSに搭乗、ルーキーと少尉が乗るまでの間、2人を掩護する!」

「了解しました」

「りよ、了解です!」

「はっ、行くぞ、ルーキー!」

「まっ、待つてくださいいよお〜!」

全速力でHLVへと向かう少尉を情けない声を上げながら追いかけるルーキーに苦笑しつつ、トレーラーに付いた梯子を使って荷台の上まで上がり、そのままドムの腕をよじ登る、そして腕から胴体へと飛び、コクピットハッチ横のスイッチカバーを開けて、中の開閉用のスイッチを押してコクピットハッチを開け、コクピットへと入る

「融合炉機動：エネルギーゲインの基準値までの上昇を確認：各システム起動、各機関への動力伝達確認：全システムオールグリーン。：スクリーン投影開始……」

一つ一つ、起動するための手順を確認するように呟きながら行っていく。すると殆ど明りの無かったコクピット内を徐々に計器やエネルギーゲイン、ダメージコンソール（機体のどこがどんな状態であるのかを表示する物と覚えて貰えれば良い）の光が照らしはじめ、スクリーンが起動し、外の形式が見れるようになるのと同時に完全に明るくなった。

「全システム：オールグリーン……、……さて……と、セプト少尉、そちらはどうだ?」

セプト少尉の機体との間に通信回線を開く、するとスクリーン右側に回線のウィンドウが表示され、そこにはパイロットスーツに身を

包んだセプト少尉の顔が見えた

「はっ、問題ありません」

「よし、武装も一緒に積み出されているはずだ、荷台の足元のあたりに積まれてる筈だが、固定具とかは別に引きちぎっても構わん、とにかく急いで戦える状態にするんだ」

そう言った直後、機体が起動した事を告げる独特の音が聞こえてくる、そこら辺は変わんないんだな。開発した会社違うのに

「よし、行くか……」

機体を立ち上がらせることなく転がるように荷台から降りると、荷台がこちら側を向くようにトレーラーを倒し、そのままトレーラーから体が出ないように気を使いながら荷台下部に固定された武装を強引に固定具ごと引きちぎり、装備していく。するとセプト少尉のドムが普通に起き上がる瞬間が視界に映る。

「馬鹿!?、立つな!!」

回線でセプト少尉を怒鳴りながらバズの安全装置を解除せずに弾倉を取り外す

「え?」

少尉の困惑した声が聞こえてきた直後、MAP上に急速に接近する何かを複数捉えた。俺は瞬時にそれが敵の攻撃であることを感じ取った俺はそのままバズをセプト少尉のドムへと投げつける

「きゃあああ!」

荷台から起き上がるようにしていたセプト少尉のドムはバランスを崩して転倒し。回線から少尉の悲鳴が聞こえてくる。その少尉のドムの頭上を無数の銃弾やミサイルが通過し、トレーラーやその周囲のコンクリートで舗装された地面を粉々に吹き飛ばしていく

「ぐっ……、うう……、も、申し訳ありません……」

「謝罪は良い!、さっさと俺のバズを返せ!」

謝罪の通信を入れてきたセプト少尉の声を自分の声で掻き消す。少尉は一瞬悲しげな表情を浮かべた後、すぐに俺のバズを投げ渡してくる、それをキャッチし、弾倉を装填してからしっかりと安全装置を解除し、脚部の熱核ホバーエンジンを起動する。そして移動可能になる

と同時に背部のスラスターを使って一気に飛び起き、そのままジグザクに動きつつセプト少尉を襲った銃弾とミサイルの方向から大まかなながらも敵がいるであろう方角へと向かう。

「いたな……」

基地を書こうフェンスの向こう側にそれがいた。全長はドムよりもやや小さい、15……いや16m程の大きさのそれは、手足や頭部等を白色に、胴体や腰が赤く塗装されており、頭部はジオン系のMSとは違い、より人間に近い形状となっており、特に人間でいう目に当たるメインカメラの形状がジオン軍で採用されているモノアイ型ではなくゴーグルのような形をしており、後頭部が半円上に拡がっていた。装甲はグフと同程度の厚みがありそうで、俺から見て右胸に連邦軍のエンブレムが施されていた

「なっ!？」

全く予想だにしなかったその登場に驚いた俺は、そのあまりの衝撃に一瞬動きが鈍る、するとそれはそのすきを逃さす手に持つマシンガンを俺へと向ける。直後、連続で鳴る発砲音に続いて無数の銃弾が俺に迫る

「ッ!?、しまった……!？」

慌てて建物を建てるように進路を変えると、その建物から出る直前で一気にジャンプする。出てきたところを撃とうとマシンガンを構えていたそれは、全く予想外の方向から現れた俺を見て一瞬どう対処すればいいか分からず動きが止まる。その瞬間を付いて胴体から頭部に掛けてマシンガンをばら撒く。すると胴体はそこその数が弾かれたものの、頭部はまるで紙を撃ち抜くかのように貫通し、爆散する。頭を吹き飛ばされたそれは力なくその場に倒れ、着地する直前にロックオンされたことを告げるアラームが鳴り響く

「チッ!？」

反射的にスラスターを使わず脚部の力のみでジャンプするのはほぼ同タイミングで複数のミサイルが着弾し、更に何発かのミサイルは地面には着弾せずにジャンプした俺を追尾して来る

「クソッたれが!、ミノフスキー粒子を散布せずに攻撃して来たって

のか!、何でここまでされるまで気付かなかったんだよクソツたれが!!」

マシンガンで追尾して来るミサイルを全て叩き落として着地すると、そのタイミングを見計らったかのように背後からそれが1機、ヒートホークを手に襲い掛かってくる

「ッそがあ!」

反射的にマシンガンを頭部へと投げつける、投げつけられたそれは大きく頭から仰け反るような姿勢になるも、手に持つヒートホークを振り下ろそうとそれを振り上げる。が、マシンガンを投げつけた手でヒートサーベルを持った俺は、横薙ぎにサーベルを振るい、その胴体を真っ二つに切り裂く。切り裂かれたそれは重力に従って上半身が地面へと落ち、下半身も膝をついて倒れた後爆散する。が、敵機の接近を告げるアラームがコクピット内に響き渡る

「はあ…はあ…まだ来るのか…?」

直後、ロックオンされたことを告げるアラームが鳴り響くのと同時にスロットルレバー一気に引いて機体を走らせ、止まらずに走りながらマシンガンを回収する。するとMAP上に20:いや30個の新しい反応が表示され、全てにミサイルと書かれている。クソが…!」

「まだやるってのかよ!」

基地施設等を使ってミサイルを回避するも、散発的な敵の攻撃により、回避できるルートが制限されてしまっていた

「クソ…! (奴らどつかで俺を追い込むきか…だったら…!)」

そのまま回避を続けていると、敵の攻撃から逃れようと建物を曲がった瞬間、それが3機、マシンガンやミサイルランチャーらしきコンテナを構えて待ち構えていた

「ばあ〜〜〜かがあ!!」

胸部から放たれた眩い光によつて一時的に行動不能になったところでバズを全て撃ち込み撃破、そのまま球切れとなったバズをその場に捨てて、適当なその残骸からマシンガンを2丁奪い取る。そのままMAPを確認しつつ移動を開始する。するとラーク少尉から通信が入る

「隊長！、現在連邦のMSらしきものと交戦中！、大量の負傷者を抱えていて動く事が出来ません！、援護願います!!」

「了解した、すぐに向かう」

MAP上に示された少尉たちの地点を確認し、全速力で少尉たちのもとへ向かう、少しして、格納庫内でトレーラーを盾にして戦う少尉たちが、敵のキャノン砲らしき量手持ちの重火器やミサイルランチャーで吹き飛ばされる瞬間が見えた。間に合わなかった…のか…？

「ッ！、クツ…！、ツ貴様らがアアアアアアアアアアアア!!」

喉が張り裂けんばかりに叫びながら両手のマシンガン弾が無くなるまでばら撒きながら敵の中央へと突き進む、背後から奇襲される形となった彼らの中で最も後方にいた3機が撃破され、4機が損傷した、そのタイミングで反撃がそれから俺に対してくるもの

「そんなもので止められるものかあ!!」

素早く左腕のシールドを構えて銃弾を受け止め、マシンガンでそれやそれが飛ばすミサイル等を撃破し、キャノン砲の攻撃のみしっかりと回避する。そして胸部の拡散ビーム方の射程内に入ると同時にそれを放ち、動きが止まった2機の胴体をシールドのスピアを勢いよく振りかぶる。金属が突き破られる鈍い音が2度連続して響いた後、2機のそれが機能を停止する、が、1機のそれがキャノン砲を構えて俺を狙うも、セプト少尉のドムに背後からヒートサーベルで切り裂かれてその場に倒れる

「中佐!!」

「死ね、死ね！、死ね！、死ねエ!!、死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね!!、しいねえええええええええええええええええ!!」

私の声も届かず、中佐は殺戮を行った、敵の攻撃を躲し、受け流し、弾き、防ぎ。そして殴り殺し、突き殺し、蹴り殺し、そして。

「やっ、やめろお…！、やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

残った最後の1機の両腕をシールドのスピアで破壊し、倒してから

馬乗りの状態で、胴体に少しずつ、ほんの少しずつ、ゆっくりと、スピアをくいこませていく

「やめてくれえ!?!、助けてくれ!?!、なっ!?!、おい!?!、そこのお前!?!、こいつを止めてくれ!?!、頼む!?!、たすけてくれえ!?!」

私を見つけたそれは、泣き叫びながら助けを求めてきた、だがその時の私は何も出来ず、ただただ中佐の狂気を見ている事しか出来なかった

「た、頼む!?!、止めてくれえ!!、あっ…ああ、や、やめろ…!?!」

中佐のスピアがある程度胴体にめり込んだところで男の声質が変わった。その瞬間、私は中佐の顔が寒気がするような歪んだ笑顔になる瞬間を見た気がした

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!?!」

直後、男の断末魔は勢いよく刺し込まれたスピアから発せられた鈍い金属音と共に止まった。そしてゆっくりドムは天を仰ぎ、ゆっくりとこちらに視線を向けた

「ひっ…ちゅ…中佐…?」

その体の表側半分をオイルで真っ黒に染めた中佐のドムは、スピアの先端部のみ、赤く染まっていた。その赤が何であるか、私はすぐに理解した…

その後援軍が到着するまでの間、私たちはそれぞれ泣き叫び続け、吐き続けた。その時最初にその場を見た物は、その光景を「血の池地獄」に例えたと言う…

オペレーション・レット 序章

「連邦軍のMSが補給基地を壊滅させた」

「ジオンの死神と連邦に畏れられるカイト中佐が連邦軍MSを皆殺しにした」

当初、戒厳令まで敷かれていたにも関わらず、カイト中佐が補給基地を襲った連邦軍MS全12機を殲滅した、という事実は人の口を介して急速に広まって行つた（無論、話の本身も急速に肥大化して行つたのは言うまでもないことである）。結果、ジオン地上軍内に置いて何故かカイト中佐は英雄視されるようになってしまった…なつてしまったのだ（絶望）

「ジオン地上軍、北京基地 地上軍病院。病室」

「……」

士官用の個室に寝かされたルーキーとラーク少尉の2人を椅子に座つて見ながら、俺は医師からの報告を聞いていた

「ジェイス伍長は脳挫傷と肩ごとの右腕欠損。ラーク少尉は骨盤陥没に肋骨全骨折と、まあどちらも生きていたのが不思議なほどの重症ですが、まあ山場は越えたと見てよいでしょう。培養槽による再生治療に関しては二人の意識が回復次第行う予定です。では、私はこれで……」

そう言つて、カルテを手に医師は部屋を出て行く。俺はしばらくの間、2人を眺めた後

「ゴメンな…俺が無能じゃなきや…お前らをこんな目に合わせずに済んだのに…俺がもつとちゃんとしてれば…！、こんな目には合わずに済んだはずなのに…！」

ルーキーのベットのシーツを引きちぎらんばかりに握りしめ、俺は声押し殺して泣き続けた。するとセプト少尉が病室に入って来る。いつもと変わらない彼女の無機質な表情にはほんの少し、影が差しているように感じられた

「隊長、基地司令のゴートン准将がお呼びです」

「分かった…すぐに行く……」

「第2小隊には来る東南アジア攻略作戦「オペレーション・レッド」に備え、前線に点在する連邦軍基地に対する強行偵察任務についてもらう。作戦期間中は貴官とセプト少尉のみ、補給等はできるが、それ以外の支援は一切できん。現場での判断は全て貴様に一任する、以上だ」

「…はっ、カイト・バジュール中佐、任務了解しました」

かすかに残った気力を振り絞り、出来るだけ普段どおりに敬礼し、回れ右して執務室を出ようと歩く、すると

「部下を失いかけたただけですんだのは幸運なことだと思ふのだな。戦場では部下どころか上官である貴官までも、消耗品なのだからな」

振り返ると眼鏡を付けた准将がゆっくりとコーヒーカップに淹れられたコーヒーを飲みながら書類に目を通していた。そして俺が口を開こうとするのと同時にコーヒーカップを置いて、行ってよいと言わんばかりに手を二度振る

「…っ、失礼します」

そう言っつて、俺は執務室を後にする

「…ふん、たかが部下を失った程度であそこまで精神をやられるとは…あんなもので使えるのか？、総帥は何を考えておられるのやら……」

そう言っつて、ゴートン准将は既に冷え切ったコーヒーカップの中身を飲み干し、執務室から見るこの北京基地の飛行場を眺めていた

「カイト中佐の機体はとにかく四肢のマニピュレーターの損耗が激しすぎて、全取替えになってしまいました。急遽予備パーツを全部使って何とか間に合わせましたけど。くれぐれも機体に負荷をかけるような戦い方をしないでくださいね?、もう全取替えとかになっても直せませんからね!、部品ないんですよ!」

目の下にとても濃いクマを作りながら、今にもその場に倒れてしまふんじゃないかと心配になってしまふほどに疲れましたオーラを全身から発しながら、整備班長が半泣きになりながら俺に詰め寄ってくる。・・・そんな酷い壊しかたしたっけな…?

「大体なんでMSで返り血みたいにおイルが表側全体ツ!、しかもシールドのスピアには血液や肉片まで付着してるんですか!、いったいどんな戦い方をしたらあんな風になるんですか!、もうあんなの掃除したくありませんからね!」

俺の両肩をつかんで懇願するかのように涙目で怒鳴りつけてくる整備班長に若干困惑しつつも謝罪しながら班長を引き剥がす

「わ、分かった!、分かったから!!!。悪かった!、次はもうあんなことはしないと約束する!!」

そう言っつて、俺は逃げるように機体へと乗り込む。今のドムは胴体のカラーリングや東部のペイントはそのままだが、四肢や腰は通常のドムと同じ、やや黒っぽい紫のカラーリングである。原因は言うまでもなく、塗装できるほど時間に余裕がなかったのである

「融合炉機動:エネルギーゲインの基準値までの上昇を確認:各システム起動、各機関への動力伝達確認:全システムオールグリーン。:スクリーン投影開始……」

期待を起動させるための手順をひとつひとつ、口に出して確認しながら行っていく。そしてあの時と同様、ほぼ真っ暗だったコクピットを計器類やダメージコンソールによってうっすらと明るくなり始め、

スクリーンが起動すると同時に完全に晴れた。といつてもここは格納庫内だから明るいのであって、深夜の今外に出れば再び薄暗くなるだろう

「第2小隊、出撃を許可します。格納庫を出てファットアングルに登場して下さい」

と、司令室からの出撃許可が来た

「了解」

そう答えて期待の固定ロックをはずし、ゆっくりと格納庫入り口付近の武装ラックまで移動し、武装を装備していく。まず腰の後ろのマウントにマシンガンをセットし、ヒートサーベルを背中のマウントにセット、そのままバズを手持てば武装完了だ

「中佐」

いつの間にかセプト少尉が回線を開いてこちらに話しかけてきていた、どうやら出撃準備が完了したことを報告したかったようだ

「よしー、第2小隊、出撃だー！」

そう言つて格納庫を出てすぐ左側、滑走路の端で今にも飛び立ちそうなファットアングルを一機確認した

「よう兄弟ー、快適な空の旅を約束してやるよ」

ファットアングルから若い男の声で通信が入ってくる

「はっ、そいつは有難い、さぞかし楽しい旅になりそうだ」

そう言つて、俺はファットアングル正面から機体下部のMS運搬用のスペースに入り、少尉のドムもそれに続く。所定の位置につくと、脚をカタパルトのようなもので固定し、固定用のロープが機体にどんどんと巻きついていく。そして俺達の機体の固定作業が終わってから少しして

「アテンションプリーズ〜ズツ！、当機は北京基地初、地獄行きでございまあ〜す！、到着まではおよそ1時間半…ぐらい…？。まあとにかく、快適な空の旅をお楽しみくださいあ〜い！」

直後、アングルが動き出したことを告げるわずかな振動の後、少しして離陸時特有の押しつぶされるような感覚が俺を襲う。が、それもすぐにおそまり、俺は自分のパイロットスーツのポーチから携帯端末

を引つ張り出すと、到着までの時間をつぶすためにゲームを始めたの
だった

オペレーション・レット 1章

「作戦を確認します、予定通りファットアングルはあと1分半後には前線を通過します。第2小隊は前線を通過後、所定のポイントにて超低空降下。その後前線にて我が軍と交戦中の連邦軍部隊の配置状況より推定される各基地施設に対する強行偵察を行い、偵察終了後、自力にて連邦軍の戦線を後方より突破し、ラン・グイナ基地に帰投する。以上です」

全く：上もまあこんな無茶な任務を押し付けてくれる。第一たった2機で敵中を強行偵察なんて、冗談だとしても笑えない。まあ：少尉はやる気満々みたいだし、俺も腹を括るか…

「時間だ、降下準備」

直後、固定用のロープがすべて外され、アングルの隔壁が開かれる。「ご搭乗ありがとうございます！、またのご利用をお待ちしておりますまあ〜す」

「次はファーストクラスで頼むよ」

そうやって、俺はアングルから飛び出す。眼下には月明かりと夜空を色どる満点の星空のみが世界を照らす。地球でしかみることのできない美しい夜景が広がっていた

「綺麗だな…地球で観る夜景ってやつは…」

そう言いながら俺は背中のスラスタ―を使ってゆっくりと地面に着地、少尉も俺のすぐ後ろに着地する

「よし、ここから偵察目標に指定されている物の中で最も遠い目標Hから遠い順で行くぞ。MAPにマークする」

そうやって、俺はMAP上に表示されたA〜Hまでアルファベットが宛てられた赤丸のうち、Hを当てられた赤丸にスポットする

「確認しました、自分が先行しましょうか？」

「いや、マシンガンがある分こっちの方が突発的な戦闘で隠密行動がしやすい。バズをぶっ放しちまえば爆発でばれちまうからな。こっちの方がマシだ」

まあ発砲しちまえばその時点で終わりなんだがな。の部分は飲み

込み、Hに向かって前進する。因みにIFF（敵味方識別信号）はOFF、おまけに通信は直接回線（機体の一部に触れる事で触れている機体同士のみでの会話が可能となる）以外の通信回線を全てカットしている

「中佐…、パトロール機がこちらに接近中です」

少尉の言葉に振り替えると、少尉が北東の方角を指さしていた。見ればデツシュが一機、こちらに向かって飛んでいた

「ッ!?、止まれ!、融合炉を停止して予備電源に切り替えろ!!」

デツシュを指さす少尉の機体の腕をつかんでおろし、怒鳴るように指示を出す

「ッ!?、は、はい!」

少尉の返事が聴こえるのとはほぼ同時に融合炉の電源を切り、予備電源に切り替えると同時に少尉との直接回線とMAP以外のすべての機能を停止させる

「ちゅ…中佐…!」

「堪えろ…、動けば死ぬぞ…!」

デツシュはその後、俺らの周囲を何度も往復したのち、何処かへと飛び去ってしまった

「…つふう…、融合炉を起動しろ、急いでHに向かうぞ」

少尉にそう伝え、予備電源から融合炉に切り替え、各システムが起動した事を確認してから移動を開始する

「見えました、どうやら推測は間違っていないかったですね」

少尉がそう言つて、コクピットハッチから双眼鏡で連邦軍の基地を見ていた。規模は中々大きく、どうやら開戦前から建造されていたら

しい、なかなかの規模の基地だ

「滑走路は中規模の飛行場並、格納庫は滑走路内のだけで12、基地全体で30以上……うへえ……方面軍クラスだな……。取れるだけの写真を撮ったら次の目標に行くぞ！」

「了解しました」

「A、B、E、Hは指定されたポイントに存在しました。が、C、D、Fは指定されたポイントにはいなかったものの、F以外はさして離れていませんでした。大きく離れていたのはFだけですな」

少尉が司令部から渡された敵基地の推定位置を記したMAPと、修正したMAPとを比較しつつ報告してくれた。その報告を聞きつつ、俺が一番近い前線の街へと向かっていた。すでに山向こうがうつすらと赤色に染まり、燃え上がる黒煙によって何やら不気味な感じになっていた

「中佐、敵の左翼が動き始めました、どうやら機甲師団を集中運用して前線を突破しようと考えているようです」

山を登り終え、激しい爆発音と砲火が鳴りやまぬ戦場を木々に隠れながら注意深く俺達は観察していた。そして、敵の機甲部隊が密集体型を取って、一気に前進を開始した光景を見つけた

「よしー、行くぞ少尉！、後ろは気にするな!!」

勢いよくその場からスラスターを使ってジャンプし、そのまま一気に中腹にある指揮所らしきテントに着地する。無論、着地の瞬間にはスラスターで減速した。そのままは熱核ホバーエンジンで一気に山を駆け下りる

「ちゆ、中佐!?!、危険です!」

少尉が慌てて俺を追いかけつつそう言ってくるが

「今敵が攻勢に出ようとしてるタイミング意外に突破は不可能だ!、敵の左翼をこのまま突破するぞ!」

後方の補給部隊や自走砲陣地を吹き飛ばしながら一気にななめ右後ろから敵左翼に突入する。マシンガンの弾薬が空になるまで打ちつくし、続いてバズとサーベルを抜き取り、指揮車らしき車両をバズ4発を使って撃破できるだけ撃破し、此方の防衛線を突破しようと密集体型をとっていた敵戦車をサーベルで薙ぎ払うように振るう、少尉も合流し、更に内側から陣形が食い破られていく。更に陣形が崩れた事を察知した味方が反撃に転じた事で、一気に連邦軍の左翼が崩れ、そのまま敵の戦線は崩壊した。そして俺達はもはや軍隊としての体を成せていない配送する連邦軍を追撃する味方とは合流せず、そのままラン・グイナ基地に向かって移動を開始した

オペレーション・レット 終章

「…うぐつ…い、ちゆ、中佐…い」

半分以上がブラックアウトし、残るスクリーンもモザイクまみれで良く外が見えないスクリーンにセプト少尉の顔がウインドウ越しに見えた、ヘルメットを外した彼女の銀髪は半部以上が血まみれとなり、顔の半分近くが頭から流れた血によって真っ赤に染まっていた。無論、パイロットスーツも血まみれである

「少尉…お前のドムは…まだ動くか?」

朦朧とする意識の中、俺は力の無い声を出した。少尉は不安そうな顔をしながらも俺の問いに答えてくれた

「…両腕は使い物になりませんが、脚部は無傷ですので動けます」

少尉の答えに安堵した俺は

「そうか、では少尉。逃げる、これは上官命令だ」

彼女に逃げるよう命令した

「ツ!?、そつ!、そんなことできるわけ…!?!」

「行け!、これは命令だ!!」

残った力を全て振り絞り、叫ぶ。その衝撃で俺は血を吐き出し、軋む体に苦悶の声を上げた。その様子を見て、尚少尉は俺を救出しようとしてこちらに向かってくる。それをサーベルを彼女の機体の足元の突き刺さる様に投げる事で止める

「頼むツ!、行ってくれえ…!!」

体中に突き刺さった破片による痛みと出血は、止血剤と痛み止めによつてある程度緩和できた。が、体中の異物感とそれによつて生じるは吐き気や気分の悪さは収まらず、俺は胃の中身と共に血を吐き出しながら。少尉に叫んだ

「ツ!?!」

「はあ…はあ…、お、俺なら…俺なら大丈夫…大丈夫…だから…な?」

自分と少尉に言い聞かせるようにそう言つて、俺は精一杯の笑顔を見せた。それを見て、少尉が何を想ったのかはわからない。だが

「了解…しました…」

そう言つて、彼女は敬礼して通信を切る。そして、ゆつくりとドムは本隊のいる後方へと退却を始める。それを見て

「ふっ…、終わったな……」

何が終わったのか、何に対してそれを言つたのか。もう分らないが、俺は笑つて機体を起こした、起こそうとした瞬間。ダメージコンソールがエラーを吐き出し、機体が軋む、先ほどからバチバチと火花が散っていたが、今度はコクピット内のあらゆる箇所から火花が飛び散るが。とりあえず無視してマシンガンを構える。既に左腕は粉々に吹き飛び、両足の熱核ホバーエンジンはいつ爆発しても何らおかしくはない、数十カ所の被弾痕と、切り裂かれた事によつて頭のとっぺんから2割ほどビームサーベルで切り飛ばされた頭部。…：ほんつと、自分でも不思議に思うんだが、良く動いてるな、この機体

辺りには燃え盛る基地施設とスクラップに変わった敵の61やつい最近戦つたそれらしきもの、確かザニーとか言つたか？、そのザニーと全く違う。明らかな地上戦闘用の重装甲のMSが2種類、頭部の目が凸字型のバイザーが、人間っぽいかの違いだが。それらが約50…いや70程か、最新鋭機とは言え、よくもまあこんだけ殺れたもんだ、我ながら自分で自分をほめちぎりたいね。帰つたら間違いない、勲章ものだ

「さて、後1分半で到達する敵本隊はこの数十倍の数が想定される。ま、精々突っ込んで負けようかな？」

何て事を言いながら、俺はザクマシンガンを始めとした武器や弾薬を集めた。そして

「投降せよ！、最早貴官に勝ち目はない！、逃走も不可能だ！。無駄な抵抗をやめて降伏せよ!!」

敵本隊の旗艦らしきビツク・トレーからの投稿勧告が来る。俺は、それに対して

「はっ！、ク タ バ レ!!」

そう言つて一気に敵陣へ突っ込む、敵は待つてましたとばかりに艦砲や爆撃、銃火器によつて俺を迎撃してくる、それを可能な限り少な

い動作で躲し、防ぎ、そして、ある程度の距離で拡散ビームを敵へと放つ、まばゆい閃光が敵から目を奪う、俺はそのまま目につく敵すべてに右手のマシガンをぶち込み、弾切れになると同時に一機のMSの両腕を破壊し。コクピットに直撃しないよう気を付けながら胴体にシールドのスパアをぶつさし、ついで両足も切り飛ばす。そして「さあ撃ってみな!、コイツごと俺を撃てるならな!!」

そう言つて、俺はそのMSを盾にしつつじりじりと下がる。一応高濃度のミノフスキー粒子入りのスモークグレネードが十分な数あるものの、それを使つてもとても逃げ切れるとは思えないほどに敵との距離は近かった。ので、俺はシールドに突き刺したMSを背中に回して全力逃走を開始した。が。敵のビック・トレーが砲撃を開始した「味方ごと撃つのかよ!?!」

一瞬この人質を捨てようとも思ったが、ビック・トレー以外は特に撃つそぶりすらも見せなかつたので、これを背中に抱えたままとにかく全力で逃げる

「(あともう少し!、あともう少しで基地を抜かれる...!、あの遠くに見えるジャングルでスモークを使えば逃げられる...!。逃げてやる...!、俺は...!、俺には...!、まだッ!!)」

「うおおおおおおおおおおおおおおお!!」
気力を振り絞るように雄たけびをあげ、全力で逃げる。そして、基地のゲートを突破した次の瞬間、爆発音とともに俺の機体が前のめりに倒れた

「ッ!?!、がああああああああああああああああああ!!?」

凄まじい衝撃と共に世界が何度も回転し、衝撃でスクリーンや既に破損されていたコクピットの壁が砕け、破片がコクピットスーツやヘルメットのバイザーを突き破り、文字通り体中に突き刺さる。機体がレッドゾーンに入ったことを告げるアラーム音が鳴り響き、至る所から火花が飛び散る。そして

「グッ!?!、がああああああああああ!!?、あああああああああああああつあつあつあつあつあつあつあつあつ!!?」

その衝撃は俺の傷口をえぐり、脳を揺らした、何がどうなってなん

で？こんな…

「……………」

……………ここは…

「……………」

……………ここは…何処だ…？、俺は死んだのか…？、分からない、何も見えない、何も聞こえない。…あ、光が見えた。なんだろう？。まあどうでもいいか、今…俺は…とても…眠いんだ……………

「……………」

「目が覚めたかい？」

「……ん……」

ゆつくりと瞼をあける、すると眼の前にはジオン軍の制服を着た軍医ではなく、連邦軍の制服を着た軍医がいた。年は20代前半ぐらいだろうか？、真つ黒な髪とその肌色の皮膚から見て、恐らくアジア系の人間であることが分かった。そして

「ッ!?!、何処だ此処はッ!?!」

ここが少なくとも味方の医務室ではない事だけは瞬時に理解できた。俺は素早くこの軍医を人質にしようと思ひかかろうとするも、四肢と胴体をベルトのような物で拘束されていた。その為、拘束されていなかった方から上の身が激しく上下すると言う何ともあほらしい格好となつてしまった。それを見て、やっぱりかと態度で表した軍医は、ため息を吐いて俺を押さえつけた

「クッ!、放せッ!?!、私は士官だぞ!?!。捕虜の扱いは南極条約に乗っ取るべきじゃないのか!?!」

抑えつけられながらも出来るだけ威圧感を込めて軍医を睨みつつそう怒鳴るも、軍医はまるで動じず

「貴方が士官なのはパイロットスーツに縫い付けられた階級章を見れば分かります!。ですが貴方は捕虜であり、重傷を負っていたため、こうしてこの医務室で手当てをしていたのです!、それに!、貴方がこうやって暴れてるから!、私はこの拘束具を外したくとも外せないんですよ!?!」

そう言った軍医を、俺は見つめた。そして

「…分かった、手をどけてくれ」

観念したとばかりため息を吐きつつ、俺はベットに体を横たえた。それを見た軍医が安心した用意胸をなでおろし、そのまま信用のテレビ回線で何やら誰かと話を初め、少しして、艦長らしき士官服に身を包んだ男が入って来る

「私は地球連邦陸軍 第2連隊所属カイル・トレー艦長のアーニクス・ブラットス中佐です」

そう言つて、アーニクスと名乗った男は見事な敬礼を見せてくれる。見た目は軍医とほとんど変わらない…兄弟なんじゃないのか?。

しかしこつちの方が大人びた雰囲気があるから……こつちが兄貴で向こうは弟か……？

「ジオン公国総帥府直属 第12MS親衛大隊第2小隊小隊長のカイト・バジュール中佐です」

俺も自分の所属と階級を明かし、ジオン式の敬礼を取る。そして向こうが敬礼を解いて椅子に座った為、俺も敬礼を解く。アーニクス中佐は真剣な顔で俺の顔をじつと見つめ

「単刀直入に申し上げます。ジオン軍の侵攻ルート、各基地の場所や物資集積所の位置。そして各部隊の配備状況と、貴方が乗っていた新型機に関する情報の全て。これらを話していただきたい」

「断る。私は軍人として……いや、一人の人間として、味方を売る事は出来ない」

ぶつちやけそんなもんばらした日には人生終了待ったなしだからな、……自白剤とか盛られた何の抵抗も出来んが、少なくとも言わされてるからある程度の体面は保てる。だから、俺は言わない。少なくとも自分からは

「もう話す事はないだろう？」

そう言つて、俺は彼から天井へと視線を向け、そのまま寝る姿勢を取る

「……失礼します」

アーニクス中佐はそう言つて、医務室を後にした

「随分と態度でかかったね？、その場で殴られたりとかするんじゃないか、とか考えなかったの？」

アーニクス中佐が医務室を出るのを待っていたかのように、自分のデスクで小さくなっていた軍医が俺に話しかけてきた

「あのさあ……お前マンガとかゲームとかに影響されすぎじゃない？。てか、軍学校出てないだろ、お前」

呆れた俺がため息混じりにそう言うと、男はとても意外そうな顔をした後

「驚いた、確かに僕は民間から徴兵された唯の医師だ。僕はいった覚えがないんだけど、君は何で分かったんだい？」

「いくら捕虜といつても人権と言うものがある。さらに言えば、南極条約でさらに厳しく且つ細かく定められているからな。捕虜に対しての暴行や自白剤などを使うのは一切禁止だ。それぐらい、軍人なら知っていて当然だぞ?」

実際締結されてから慌てて条約の内容を覚えたからなあ…あれは地獄だった……

「そうなんです、僕は軍属になってからそこまで日がたつてないから、良くわかんなくて。正直早く元の職場に帰りたいて、ずっと思ってるんですよね」

そう言つて苦笑しつつ後ろ髪を搔く彼は、俺にはとても悲しいものに思えてしまった。ジオンでも部分徴兵が始まっているが。連邦軍は65歳以下、10歳以上の男女全てが徴兵対象らしい。…：戦後のことちよつとでも考えたらそんなキチガイじみた徴兵制可決する筈がない筈なんだよなあ…?」

「ま、後1年もすりや戦争は終わるよ、そしたらお前も元の職場に戻る。ま、そこが無事ならの話だがな?」

そう言つて、俺は胸ポケットから煙草を取り出そうとして、タバコが無い事に気づく、と言うかこれ誰のパジャマだ?、ツ!、と言うか俺の服は!?

「はい、貴方の煙草です。…：それと戦争が後1年で終わるつて。どういふ事ですか?」

あんがと、と言つて煙草を受け取りつつ、いつの間にか隣に座っていた軍医に、俺はこう聞いた

「お前…：名前は?」

「フォーデ・ブラットス少尉です」

そう言つて、フォーデと名乗った男は煙草をくわえた俺のすぐ目の前、丁度煙草の先に火を付けたライターを出してきた。俺はライターにそ煙草の先を近づける

「ふう…：ブラットス少尉。我々は開戦当初、サイド1、2、4を強襲し、連邦の駐留艦隊ごと全てを粉碎した。そしてコロニー一基を地球に落とすブリティッシュ作戦で地球全土にかなりな被害と、気候の変

動をもたららし、さらに降下作戦の為に、地表の対空防衛網を月のマスドライバーを利用した隕石落として徹底的に叩いた。それもすぐに修復できないよう周辺の都市まで、…徹底的に破壊した。そして降下作戦により地球の約3割以上を占領、その過程で行われた激しい戦闘により、我が軍の占領下の大都市、中都市までは完全に瓦礫と廃墟の都市となった。おまけに俺らはそこまで占領下の連邦市民が生きれるような配慮は行っていない。つまり…」

そこで一旦区切り、大きく煙草の煙を掃出し。続きを口にする

「仮に取り返せたとしても、連邦はただただ荒野と廃墟しか手に入らず、終戦後。長期間に渡ってその国力を復興に割かなきゃならん。と言うより、国民の半数以上を失ってるんだ。最早連邦は元通りにはならん、この戦争が起き、ここまで進んでしまった時点で、連邦の負けだ」

「ま、ジオンはスペースノイドの自治独立のために戦ってるし。連邦は地球をここまでした鬼畜ジオンを殺せ！、って感じ出いな。どっちかが滅ぶまで終わらんだろう」

そう言って、俺は吸殻を適当に隣の台に置かれていたコップの中に入れる

「ま、あくまで俺の個人的な意見だ。鵜呑みにしないように。しっかりと大局を見極め、持論を持ちたまえ」

そう言って、俺は新しい煙草を口に加え、火を付けると上下に動かした

壊れた奴隷／英雄

「いい加減吐いたらどうですか…？、はあ…はあ…スツキリしますよ？」

そう言つて、ガタイのいい連邦兵士は、肩で息をしながら俺にそう言つてくる。……まさか下士官とか末端の兵士程度までしか拷問せんだろう思っていたが。…どうやら彼らの我々に対する負の感情は南極条約すら超えるらしい……勘弁してくれ…

「ゴホッ！、ゴホッ！。へ、へへ…俺は何にも吐かねえよ……。吐かせたきや自白剤でも使うんだな」

何分経つた…？、もう3日ぐらい殴られてると思うんだが…。時計位置いとけよな…

「まだ自分の立場が分かつてねエらしいなあ？、中佐様よお…！」

男の鋭い一撃が、俺の左胸に突き刺さる。サンドバックを殴るような鈍い音と共に骨の折れる音が聞こえ。次の瞬間、俺は大量の血を口から吐き出した、そのまま男はなぶるように俺を殴り続け、俺は男を睨み続けながら、歯をくいしばって耐え続けた

「うう…!?!、ガッ！、アッ！、グフッ！、ゴフッ！」

「ほらほら、先ほどの威勢はどこに行つてしまわれたんですか…？」

そう言つて、男は俺の指を一本一本、机などに固定させるタイプの持ち運びが可能なプレス機を使い。小指から順番に、時間を掛けてゆっくりと指をプレスした

「ほらほら…、早く喋らないと、指が全部無くなっちゃいますよお…？」

「…ッ！……!!……！」

残った気力と軍人としての最後のプライドを振り絞り、俺はプレス機によつて徐々に指が押しつぶされていく恐怖と、そして痛みによつて絶叫しそうになる口を閉じつづけ、結果、声にならない悲鳴のような物を、俺はずっと出し続けた

「ハハハハ！、さあゝて、何時まで耐えられますかな？、中佐殿?!」

男はとても愉しそうな笑みを浮かべて、嬉々として指をプレスして

「いい加減に……！」

ある種の恐怖すら覚えた男がこぶしを振り上げた、次の瞬間。部屋の天上や壁が砕ける

「何い!?、ぐわあああああああああああああああああ!?」

「ヒイ!?」

そのまま男はがれきの下敷きとなり、俺は瓦礫が落ちた際の衝撃で椅子が倒れたため、そのまま起き上がる事も出来ず。ただただ泣いていた。体中が痛くて、目の前の男が次は何をして来るのか、それを考えただけでもう怖くて……けど逃げる事も出来なくて……もう嫌だ、俺が……僕が……こんな目に……

「もう嫌だよお……ひつく……もうやだよお……！」

そうやって俺が縮こまっていると、何処からか自分の階級を呼ぶ少女の声が聞こえてくる

「え……？」

俺が顔を上げると、そこにはパイロットスーツに身を包んだ少女が1人、崩れた天井や壁の瓦礫の上に立っていた。美しい銀色のショートヘアに、特徴的な赤色のサングラス。間違いない、見間違うはずもない。彼女は……

「せ……ぶ……と……しよ……い…………？」

そう、間違いないそこにはセプト少尉だった

「中佐！」

少尉は瓦礫から俺の足元に降りると、腰のポーチからナイフを取り出し、それを使って俺の手足を椅子に固定していたガムテープを切り裂き、俺を慎重に起こす

「申し訳ありません……！、もっと早く来ていればッ……！」

自分を責めるようにそう言ったセプト少尉に、俺は抱きついた

「ツ!?、なっ!?、え!?」

「うわあああああああああああああ、怖かったよおく!、痛いのもう嫌だよおおおお!!」

そのまま俺はずっとセプト少尉に抱きついたまま、子どものようにわんわん泣いていたらしい。ほんっと。今思えば赤面ものだな……

「中佐!?、ご無事ですか!?!」

MSの駆動音と共に、手のひらに乗ったラークが天上の穴から入って来る。そのまま俺の元まで駆け寄ったラークは素早く応急処置を行いつつ、ルーキーを呼び出し、セプト少尉には周辺の警戒に移るよう命令した。セプト少尉が頷いて外に出ると。それと入れ違いにルーキーが青ざめた顔で転がり込んできた

「中佐あ!?!」

盛大に瓦礫の上から転げ落ちたルーキーが痛てててと言つて地面に落ちた時に打った腰をさすりつつ起き上がるのと同タイミングでラークがルーキーを怒鳴る

「馬鹿やってないで中佐の手当てを手伝え!!。速くツ!!」

「は、はいー!」

慌ててルーキーも俺の傷の手当に入り、持ってきた医療鞆から麻酔薬の入った注射器を取り出し、俺に注射する

「痛ツ!?!、痛いのはツ!、ツ!?!。い…痛いのは…い…や…」

そのまま眠ってしまった俺の頬を軽く叩くなどして麻酔が効いているかの確認をした後、慎重にラークが乗っていた掌の上に俺を置き、ルーキーはその横から外へと出る。ラークはそのままコクピット前まで手を動かし、そのまま俺を掌に置いたままコクピットに乗り込む、そしてコクピットハッチが閉じてから少ししてモノアイが起動し、他の2期に追従するよう手信号を送って基地から逃走を始める。その後を追う二機は手に持つマシンガンの玉が尽きるまで手当たり次第に目につく者全てを破壊し、置き土産にナパームグレネードを投げてから。ラークが消えて行った方向の漆黒の闇の中に消えていった…

「幼児退行……ですか？」

個室の壁にはめられた大きなガラス製の窓を挟んで看護師二人と積み木で遊ぶ中佐を見ながら。私はラーク少尉やジェイス伍長と共に、主治医のハボック先生の話を聞いていた

「原因は恐らく拷問による心理的ストレスや激しい痛み。そしてそれらから逃れられない事に対しての恐怖。ああ、後それらの元凶である拷問官に対する恐怖もあったでしょうね」

そう言つて、ハボックはガラス越しに隊長を見ながらスケッチボードに挟んだ隊長の診断書をめくり、続きを話し始める

「カイト中佐が捕虜として置かれていたバックガン補給基地は君達先遣隊の奇襲攻撃後、本隊によって攻略された。実は資料が幾つか残つていてね。その中に中佐に関するものがあつたんだよ。…拷問に関するね？」

「ッ……！」

何かをこらえるようにうつむき、ぎゅつとズボンを握りしめるセプト少尉。他の2人も何やら不甲斐なさそうに顔をしかめている。…まあ無視しよう

「それによれば、捕虜となつてから君らに救出されるまでの2週間のうち、約10日間。3時間の休憩をはさんで延々拷問を繰り返していたらしい。実際この病院に運ばれて来た時の彼は酷い状態だった。顔はボロボロで腫れあがつてたし、右目は潰れてて左目は何で無事なのか分からない状態だったし、口の中まで傷だらけで、舌はボロボロ。歯は14本も抜けてたし。肋骨は時間をかけてゆっくりと、急所に出るだけ刺さらない様に折られてるし。左肩が外され、関節は辛うじ

て動く有様。手の甲は砕かれ、指は両手合わせ手全10本全て潰されてたし。下半身は骨盤が砕かれ、足は使い物にならないよう関節の間が腐らせてあったから、両足とも足の付け根まで切除したし。特に酷いのはアレが玉ごと潰されてたことかな?。……酷かったよ。本当に」

そう言ったハボツクの顔は少し血の気が引いた、やや青ざめた顔だった

「身体的な欠損や外傷に関しては培養槽でどうにかかりますが。精神的な問題……幼児退行に関しては具体的な治療法は確立されておらず、唯一。効果が認められているのは親しい人物が話しかける事のみ……まあ中佐の知人友人、家族等もうみんな死んでいるので。皆さんが話しかけてあげてください。では……」

「ま、待ってください!、今、中佐の親しい方は皆死んだって……」

ルーキーがそう言うのと、ため息を付いたハボツクはゆっくりと振り返り

「彼はサイド4出身でした。これで分かるでしょう?。」

そう言っつて、今度こそハボツクはどこかに行ってしまう。私たちはそれを見送った後、看護師たちと遊ぶ中佐のもとに向かい、ひとしきり遊んだ。……その時見せた中佐の笑みは、本当に無邪気で。まるで……子供のようにだった……

君は歯車、彼はエンジニア

「カイト・バジュールが北京の軍病院に入院してから1週間後 宇宙世紀0079 7月12日」

「サイド3 ズムシテイ」

「ほう、つまり君は彼はもう十分戦ったから、こんな事はせずに休ませてあげるべきだと。そう言いたいのかね？」

そう言つて、ハルファーは革張りの椅子から立ち上がると、ゆっくりと私のほうに歩いてくる

「はい」

私は少しも動じることなく、ハルファーの目を真っ直ぐに見つめながら頷く、するとハルファーは深いため息を付きながら頭を抱えると、心底鬱陶しそうに顔を上げ

「良いかね？、セプト・レギオ。……いや、7号試作体よ。既にムーン・レイス達から入手した情報通りに我々の戦争は続いている。つまり、もう時間が無いのだよ……？」

そう言つて、私を忌々しげに睨み付けると、ハルファー咳払いして続きを話します

「……ん！、良いかね!?、我々はこの戦争が集結するまでの間に可能な限りの、それも多種多様且つ膨大な量のデータを取る必要があるのだ!!、その為にも彼には出来るだけ早く戦える状態にまで回復して貰い!、戦ってもらふ必要があるのだ!、……データの為にな!？」

「で、ですが……、それが彼である必要が……!」

「必要がなければこんなことはしない!。中尉は私が何の必要もない

負傷兵一人に貴重な薬品と時間を消費する愚か者にでも見えるのかな!？」

「そ、それは……」

凄まじい剣幕で一方的に話し続けるハルファーに、私は思わず後ずさってしまおう

「7号試作体!!、大体貴様は私に何時から意見できる程に偉くなったんだ!、身の程をわきまえたまえ!!」

そう言つて、ハルファーは少し厚みのある封筒を押し付けてくる。表側には「精神回復薬に関する取扱説明書」と書かれている

「君にはこの際はつきりと言つておくが、君ら試作体は幾らでも替えが聞くんぞ??。いわばただの歯車。道具だ、道具ツ!!、分かるか!？」

そう言つて、ハルファーは私を指さし、何度も何度も頭を叩いてくる。まるで出来の悪い学生に脳みそはあるのか?、と頭を叩く教師のように……

「しかし彼は違うツ!、彼が隊長として部隊を率いれば、おのずと功績は彼の物となる!!、そうすれば。君が戦果を挙げてても彼の手柄に出来る!!。分かるかね?、君らはただの歯車だが、彼は……そう言うなればエンジンアだ!、彼がいるからこそ、君らは我々のために働けるのだ!、それを忘れるなよ!？」

怒鳴り散らすだけ怒鳴り散らしたハルファーは、肩で息をしながら椅子に座り。手を振つて外に出るように促してくる。それに私は黙つて従い、部屋から出て行った

「……ふん、あそこまで《人間臭くなるか》……やはり、不良品だな」

そう言つて、ハルファーは胸ポケットから取り出した鍵を使って一番上の鍵付きの引き出しを開け、一枚の書類を取り出すと、赤色のペンで大きくバツ印を書類の真ん中に付けた。それがどういう意味なのか、俺はかなり後に知った

「2か月後 北京軍病院」

「精神回復薬に関する取扱説明書」

「精神回復薬は、精神が成熟した状態で尚且つ精神に異常をきたした人間にのみ効果を発揮します。精神が未熟な子どもでは効果がありませんので、飲まさないように」

携帯端末が使用できない士官用の個室に移された俺は、仕方なく院内のコンビニで販売されている小説を読みふけていた。そんな昼下がり。俺の部屋を誰かが二度ノックした

「どうぞ」

俺が入室を許可すると、セプト中尉が紙袋を持って見舞いに来てくれた。正直嬉しい

「失礼します、お体は大丈夫ですか？」

そう言っつて、セプト中尉は俺のベットの左側に置かれた椅子に座る

第1項、精神回復薬を処方する場合の注意点

この薬は1日1錠です。それ以上の使用は使用者が死に至る危険がありますので。絶対にやめてください

「おかげさまでな、健康そのものだよ」

俺はそう言っただけで起き上がり、その場で胡坐をかく

「それより、ラークとルーキーはどうだ？、もう意識は回復したのか？」

俺がそう聞くと、彼女は嬉しそうな笑みを浮かべ

「はい、お二人はもう意識を回復されています」

そう答えてくれた

第2項、服用者に関する注意点

この薬を精神に異常をきたした人間に服用させる場合、毎日飲ませる度にこの薬が甘いかどうかを確認してください。この薬は幼児退行した人間などでも飲みやすいよう外見と味をアメにしています、が、この薬の味が甘く感じない場合、精神に異常をきたしてはいけません。また、精神が回復し出すと、回復した度合いに応じて甘く無くなりま

す即刻使用をやめてください

「マジかよ!?、じゃあすぐにでも見舞いに行かなくちゃ…って、俺も病人か…」

そう言っただけで、後ろ頭を掻きつつ苦笑する俺にセプト少尉は

「お二人はもう既に退院なさいましたよ？」

と言ってくる。それに俺は

「ああ、培養槽が使えるからな。よかったよかった…」

そう言った中佐の顔は。まるで今までずっと胸の内に秘めていた苦しみから解放されたかのような、そんな笑顔でした…ですが、とても悲しそうにも見えませんでした。まるで、何かから逃れられない事を理解

し、その上で全てを諦めているかのような、そんな顔でした

「それで？、俺は何時復帰できるんだ？、今日はそれも言いに来たんだろう？」

と、打って変わって期待に満ちた目でそう言ってくる中佐に、あそこまで酷い拷問を受けたのに、まだ戦場に帰りたいたいと思っっているのか。と、内心驚きつつ

「その前に何時ものアメを舐めてください」

紙袋からアメを取り出し、袋を開けて中佐に手渡す。アメは本当によくあるタイプで、簡単に言えばドロップの白い奴みたいな感じだ
「これかあ………これもう舐めたくないんだよ………何か自分を超える感じがしてさ？」

そう言った中佐の顔は深刻だった。本気で嫌そうだ

「一口、舐めるだけでいいので……！」

私が強気でそう言うと、中佐は

「……舐めるだけだぞ？」

と言つて、一口、本当に嫌そうに、恐る恐るアメを舐める

「どうですか？、甘いですか？」

「……甘くない、何の味もしないぞ、これ」

と、私の質問に答えてくれた

第3項、使用者の精神の回復度合いの見極め方

精神回復薬を一定期間服用させると、表面上は完全に精神が回復している様に見えるものの、まだ完治はしていない（完治していると言えるのは甘さを感じない状態）その為、使用者の言動を注意深く聴き、以下のセリフと同じ、または類似するものがあれば、それに合わせた対処をする事

あまり、そんなに、できれば《などの台詞を使用者が発した場合、表面上は精神が完治している証、精神回復薬を与えて、甘いかどうかを確かめる事

もう舐めたくない、それを食べていると自分を超えてしまう気がする

《などの発言をした場合。完璧に精神が回復した証。ただし、念のため一口舐めさせ、甘さがあるかどうかを確認する事。味がしないと回答した場合、精神が完治した証。即刻精神回復薬の使用をやめる事

「そうですか？、では今日で最後ですね」

そう言っ、彼女は紙袋から書類の入ったファイルを手渡してくる

「…ドム…ジュンゲル？」

ファイルを開けて中身を取り出す、どうやらこれはドムタイプの新型機に関する資料のようだ

「はい、詳しくは追って本土から来られた技術者の方が教えてくださいます。では、私はこれで」

そう言っ、立ち上がった中尉が敬礼して来るので、俺も

「ああ、今日はありがとうな」

と言っ、敬礼で返す。中尉はそのまま敬礼を解いて部屋を出る

「…新型か…良い機体だと良いんだが…」

そう言っ、俺は渡された新型機の資料に一通り目を通した跡、隊員の為、身の回りの物の片づけを始めた

南米での戦い

「宇宙世紀0079 9月24日 中米 パナマ基地格納庫内」

「これがドム・ジュンゲル…」

深緑に深い青色のまだら模様の塗装に頭部にはサメのペイントが施されたこの機体、ドム・ジュンゲルは南米や東南アジアなどでの使用を前提にした、ドムのバリエーション機の一つ…と言うよりドムの特定局地特化機みたいなものだ。主な改修点としては関節や熱核ホバーエンジンの泥土や水の浸入を防ぐフィルターを装備。熱核ホバーエンジンの改良により加速性と機動性が向上した…後は追加で装甲が増設されたぐらいだな。武装は近距離での使用を想定し、発射直後に弾頭から散弾を発射するショットバズを使用可能な新型のテクニカル・バズⅡ、腰の後ろのマウントに装備された新型のMMP-80マシンガン、そして腰のマウントに装備されたグレネードランチャー（パンツァーフアウスト30みたいな外觀）を装備している。そして背中のランドセルと一体化した大型の…バックパックか？、から両肩のキャノン砲に給弾用のベルトが伸びている。どうやらあれが弾薬庫のようだ。スベックは…

「155mm!?!、嘘だろ!?!」

こんなもん両肩に載せたっていうのか!?!、あつたまおかしいんじゃないのか!?!

「まったく…まあ俺の要望にはしつかり答えてるんだよなあ…」

片手で後ろ頭を掻きつつ上を見上げると、機体の両腕と同じところに俺が乗っていたドムが装備していたものと同様のデュエリングシールドが両腕に装備されている。これが無いと咄嗟に襲われた時に対応できねえからな…やっぱり盾は偉大だな

「しゃーない、新型送って貰ったんだ、それに見合うデータで返してやるでしょう」

そう言つて、俺はパイロットの着替えと控え室を兼ねた待機室に向かった

代わり映えしない南米のジャングルを映し出すスクリーンとMAPを交互に見ながら、慎重に川を遡る。既にパナマ基地を出発してから1時間半が経過していた。ここは連邦軍とパナマに司令部を置く南米方面軍の支配地域の境目、要は最前線だ。俺達第2小隊は前線の警戒部隊として、毎日午後3時から午後6時までの3時間の警戒任務に就いていた。

「…暑い」

コクピット内は空調設備を最大にしているにもかかわらずどこか蒸し暑く、既に持ち込んだボトルは残り半分を切っていた。さつさと終わらせて風呂に入ろう。そう思った俺が

「敵が来てくれればなあ…」

と、ぼやこうとした直後。MAP上に複数の機影を確認、すぐさまMAPが画面上で立体的な形に代わり、気鋭の大半が航空機である事とその高度、そして3…いや5隻の敵艦と戦車などの車両と平行して移動するMSらしき機影が表示された

「…まずいな……ラーク！、すぐに司令部に連絡を！。我大規模な敵部隊を発見セリ、航空機の存在も確認したため、敵部隊はパナマ空襲

を視野に入れた可能性有り、至急応援願う、だ」

「了解しました」

すぐさまラークが俺との回線を切り、司令部へ連絡を入れる。俺はそれに頷き

「よし、各機後退しつつ敵部隊に可能な限りの損害を与えるぞ!!」

コンソールを操作し、かたの155mmを起動する。今まで動力の通っていないかった155mmとベルト式給弾システムに動力が入り、左右のベルトが玉一発分前に進み、スクリーン上に装填した事を告げる表示が出るので、安全装置を解除、最後に射撃姿勢に期待を動かし、引き金を引く。凄まじい発射音と共に放たれた2発の155mm対艦用徹甲弾は真っ直ぐに先頭を走っていた敵艦に着弾、着弾からワントンポ置いて船体に開いた二つの穴が膨張したかのように爆発し、そのまま先頭を走っていた敵艦はその場に停止する、そこに間髪入れずに2撃目を加え。先頭の敵艦：ビクトレーは爆散し、紅蓮の炎と共に黒煙を天へと吹き上げる巨大なスクラップに早変わりした。強いなこれ。流石は155mmだ

「各機散開！、ポイントaにて合流だ！」

「了解」

直後、上空から無数の爆弾と共に砲弾が降り注いで来る。俺は機体を敵へと向けたまま機体を後方に走らせ、走行中のために激しく標準がずれるなか、とにかく敵のビクトレーのみを狙って155mmをぶっ放し続ける。無論足止めの意味もあるが、何よりこんなモン景気よくポンポン撃ちまくってりゃそら：

「ツぐう……！」

砲弾の一発が右足のすぐ近くに着弾し、機体のバランスが一瞬崩れる、それを左手を地面につけ左足の熱核ホバーエンジンを一気に吹かして回転蹴りをするように機体を一回転させ、着地。そのまま155mmを撃ちつつ後退する

「俺ばっかり狙うわなアー！」

空から降り注ぐ死の雨を必死に回避しつつ敵艦へ攻撃を続ける。すると爆弾が落ちて来なくなる。不思議に思っていると。突如コク

ピット内にアラームが鳴り響き、スクリーンの左側に左方向を指す矢印と、コンピュータからMSらしきものが接近中であることを告げてきた

「ッ!?、この距離までッ…!?」

反射的にその場を飛び退くのと、ミサイルが俺が立っていた地面に命中したのはほとんど同タイミングだった。恐らくだが、後2〜3秒遅ければ俺の機体は爆散していただろう

「何ガッ!？」

間髪入れずにジャングルの中から現れた蒼色のMSが、手に持つサーベルで俺の155mmを切り裂こうとして来るのを拡散ビーム砲を使って動きを止め、そのまま両足を蒼い機体に押し当て、熱核ホバーエンジンで相手を吹き飛ばしつつ距離を取り、そのまま飛んだ際の反動を利用して宙返りの要領で機体の姿勢を変え、そのまま着地と同時に機体をターンさせる事で着地時に蒼い機体を吹き飛ばした時の反動を流しつつ更にあの機体との距離を稼ぎ、肩後ろのマウントに装備されたMMPを取り出し、バズをマウントに装備させる

「…しまった。この機体、近接の装備がシールドしかねえ……」

どうしようと悩みつつ、とりあえずマウントに装備したバズを取り外し、両手にバズとMMPと言う状態で待ち構える。するとロックオンされたことを告げる警告音と共に2つの飛翔体がこちらに急接近してくる様子がMAP上に表示される

「来たか……」

待つてましたとばかりに2つの飛翔体をMMPで撃ち落とす、そして。それによって生じた爆炎の真ん中からあの蒼い機体が現れる

「バカ正直に……」

両肩の155mmを青い機体へと向け、引き金を引く。が

「エラー!？」

見れば両方の155mmに砲弾を給弾するベルトが破壊されていた。これでは155mmを撃つ事は出来ないだろう。その事実には俺は思わず盛大に舌打ちをかましつつ、肩の155mmと弾薬庫をパージする(前述の機体解説の際には一体化したと説明したが。完全に一

体化していたと言うわけではなく、このように155mmが使用不能になった場合、ウェイトを減らす為にパージする事が可能なのだ)、そのままボクシングのファイティングポーズに似たポーズを取る、開いてもこちらの意図を察したのか、マシンガンをしまい、抜いたサーベルを両手でしっかりと構え、一気に突っ込んでくる。俺はそれを迎え撃つ形となった

「(…チャンスは一瞬……)」

まずワザとシールドを払うように大振りに横に振るう、蒼い機体はそれを伏せる程に低く屈むことで躲し、シールドによつてできた死角を突いて、鋭い刺突を放つ

「……だア!!」

熱核ホバーエンジンを起動した状態で機体の足を蹴りあげる。エンジンによつて爆発的に加速した足はコクピットへとサーベルを突き刺そうと延ばしきっていた両腕の関節部分に直撃する。そのまま蒼い機体の両腕は空高く吹き飛ばされる。そこに間髪入れずにシールドを叩き付けようとするも頭部のバルカンに牽制され、防ぐためにシールドを使ってしまう。その隙を逃さず、蒼い機体は一目散に逃げ出す。直後、敵からの爆撃が再開したため、俺は追撃はせず、α4へと向かう

この後パナマより出発した南米方面軍主力が連邦軍と交戦。連邦が撤退したことにより、タウンハの攻防と呼ばれることになるこの戦いに、ジオンは勝利した

ガルマの死

「宇宙世紀0079 10月6日」

「地球方面軍司令 ガルマ・ザビが戦死した」

「俺がその事実を知ったのはパイロット用の待機室に置かれていたテレビで放送されていた。ガルマ・ザビの国葬式典だった」

「これにより地球方面軍の指揮系統は崩壊。連邦軍が各地で大規模な攻勢に出る。……そしてそれは俺達がいるこの中米例外ではなく」

「宇宙世紀0079 10月14日」

《center》「パナマ攻略ヲ目標トシタ連邦軍ノ大部隊ガジヤブ
ローヲ出発ス」《center》

「どの報がパナマ基地司令部に届く。これを受けパナマ基地基地司令兼南米方面軍司令官の「ハヴオック」准将はヤビサを中心として建造された要塞線「パナマライン」に全兵力を集結、連邦軍の撃退を計る」

「弾薬積載量の確認…チェック、各システムの起動再確認…チェック、通信システム…あくあくテストス、ルーキー聞こえるか？」

格納庫内で機体の最終チェックを行っていた俺は、最後に残った通信システムの確認を行う為ルーキーに回線を開く、するとスクリーンの左端にブラックアウトしたままのウィンドウが表示され、すぐにルーキーの顔がウィンドウに表示される

「どうかしましたか？」

「いや、ちよつと通信システムのチェックをな」

「そうでしたか、丁度自分も中佐にチェックを兼ねた通信を入れようと思つてました」

「おいおい、部下が上官をモルモット扱いするのか？」

「いッ!?!、いえ!、そんなつもりは毛頭ありません!、はい!!」

「ハハハ、冗談だよ、冗談」

「中佐、第1種戦闘配置中ですよ?、他愛のない会話は慎んでください」

「分かったよ中尉」

「中佐、出撃準備完了。指示を」

「待機だ、セプト中尉」

ラークとセプト中尉の2人もこちらに通信してきたため、ウィンドウが3つになってしまった、こうなるとスクリーンの左右が大分見にくくなってしまふ。が、今は置いとく

「こちらCP、ドーン01、応答せよ」

今度はウィンドウは開かれず、簡易回線での通信が入る。俺はすぐさま意識を切り替える

「こちらドーン01。CP、どうした？」

「これより作戦の最終確認に映る。第2小隊総員傾注」

その言葉に他の3人も意識を切り変え、オペレーターの言葉を一語一句逃さず聴き取ろうと神経をオペレーターの声と耳へと集中させる

「…現在ガウ攻撃空母8機からなる急襲部隊が敵本隊中央部に向け飛行中です。強襲部隊の目的は敵司令部の撃破、ないし損害を与えて進軍を停止させ。パナマラインの防衛態勢を整える猶予を稼ぐことです。回収作業は不可能なため、自力での帰還をお願いします。…以上です、質問は？」

誰も口を開く事は無い。分かり切った事だ、ようは時間稼ぎのため死んで来いと言われたのだ。ま、しゃーない。誰かがやらなきゃならん仕事だ

「降下30秒前に空爆を敢行し、撤退時のルートを開きます。その後、衛星軌道上から30分間、敵軍の混乱が回復しないよう軌道爆撃を行います。そのため作戦時間は機動爆撃が終了するまでの30分間のみ、それまでに主目標を達成して帰還して下さい。降下まで後1分」

「全機、ロック解除、兵装の最終確認」

部下にそう命じて機体を固定する格納庫のハンガーの固定ロックをすべて解除し、ハンガーに固定されている装備を取り出し安全装置を解除。コンソールを操作して火器管制とリンクさせる

「降下30秒前、全機空爆開始」

直後、格納庫内が僅かに揺れる、おそらくガウが機体下部のハッチを開いたのだろう

「降下15秒前、ハッチ開放。全機降下準備」

格納庫の扉がゆっくりと開かれ、外の景色と共に強い風が格納庫内へと入って来る。時刻は夜の12時、僅かな月明かりと星々の光のみが照らすこの夜の世界に、俺はまた見惚れてしまう。何せコロニーじゃ二度とお目にかかれない光景だ、しっかりと目に焼き付けておく

「降下5秒前」

「よっしやあー、行くぞッ!!」

熱核ホバーエンジンは起動せず、足を使って開き切った格納庫の扉へと向かって走る

「ええ!?!、中佐あ!?!」

「全く…行くぞルーキー!?!」

「…中佐に続きます」

他3人はそれぞれアクションを取りつつ俺に続いて格納庫の扉へと走る

「2…1…0、全機降下開始」

CPが作戦開始を告げるその降下命令と共に一番に飛び出した俺は、雲よりも高かったが為にまず雲の中に入った。一瞬のうちにスクリーンが真っ白になり、MAPに頼るしかない状況…はものの10秒ほどで終わり、眼下に燃え盛るジャングルと、パナマへと進撃する連邦軍第8軍が見えた、仕事の始まりだ

「3500…3000…2500…2000…1500…」

背中のレストランのスタスターを使って徐々に加速させつつ、高度計で減速させる高度を見極める。が、1500を切った瞬間MAP上を赤い点が埋め尽くし、敵からの攻撃を告げるアラームが鳴り響く。直後、周囲の空で無数の爆炎が発生し、機体を激しく揺らす。コンピュータがすぐさま原因を分析し。地上部隊からの対空砲火であるとの結論をスクリーンの中央にデカデカと表示して来る。邪魔ア!?!

「クッソー、予定よりちと遅いが…!、その分密度が想定より多い!?!」

今回は降下用の増加装甲を装備しているが、はつきり言って敵の対空砲の直撃を受ければ機体が持つても俺が持たない

「神様…:…お願いだから俺と部下には当てないでくれよ…!」

「全機状況報告!?!」

「こちらドーン、02問題なし」

「こちらドーン03、敵対空砲火による被弾は今のところ皆無。作戦行動に支障なし」

「こ、こちら…うわっ!?!。あ、ど、ドーン04!?!、問題なしです!?!」

「全員無事だな!?、このまま予定通りポイントL74に降下する!」

高度計が表示する高度が目標高度に達すると同時に一機にスラストターを全開にして落下速度を下げつつ、俺は丁度よく降下ポイント内にいるMSの上に乗った。…と言うよりある程度落下速度を下げた後そのまま敵MSに突っ込んだ、そう言った方が良いだろう。そのまま敵MSはバラバラになりながら大きく吹き飛ばされ、爆散。俺は着地と同時にMAP上に表示された敵マーカー目掛けてMMPをばら撒き、手近な敵艦へと155mmを打ち込む。そのタイミングで他の3人も降下し、各々が目標と定めた敵を攻撃していた

「中佐、周辺の敵部隊にある程度の損害を与えることに成功。このまま目標へ向かうべきだと判断します」

直接回線でのセプト中尉の進言に頷いた俺は、各機に手信号で進軍を指示してそのまま目標へ向かって走り出す。が、すぐに敵の攻撃が飛んでくる

「各機散開」

そう手信号で命令しつMMPで攻撃してくる敵へと反撃する。少なくとも攻撃が飛んできた方向には6つの敵反応があり、内4つは目視にて確認できた。MSだ、確か陸戦型GM（以降陸GMと呼称）と言われるやつが1機に、GMとか言われる凸字みたいな形状のバイザーをつけたMSが3機、後は61が2両、そこそこ豪華な編成の小隊のようだ

「各個に応戦せよ」

手信号でそう命令し61めがけて155ミリを正射。しかし61は戦車とは思えないような軽快な動作でかわすと、そのままもう1両の61と共に距離をとりつつ反撃してくる、中々に腕の立つ戦車乗りが乗っているようだ、その事を素直に賞賛しつつMMPを戦車の進行方向のほうから戦車の方へ向かうようにばら撒いて撃破、お返しとばかりにもう1両の61が攻撃してくるのでそれを回避し、バズで地面ごと吹き飛ばす

「ん?」

バズのマガジンをシールド後ろに取り付けられた散弾と交換しれ

いると、陸GMが手に持つマシンガンを撃ちながら接近してくる、それをシールドで防ぎつつバズを腰の後ろ側のアタッチメントにしまい。腰のアタッチメントに装備されたヒートサーベルを左手で引き抜き、構える(前回の戦闘の後、急遽俺の要望で追加させた)。陸GMもマシンガンを捨て、もう一本サーベルを抜いて、まず左手のサーベルを横なぎに振るう、それを逆手で持ち替えたサーベルで受け止め、そのまま頭部へMMPを構え、引き金を引く。が、陸GMは素早くMMPを持つ右手の肘を狙ってサーベルを振るう

「うおう!」

反射的に機体を大きく回すようにターンすることで回避するも、MMPが真ん中から切り飛ばされる。

「しまった!」

素早くMMPを放り投げる。その直後にMMPは爆発し、これで残る飛び道具は腰の後ろ側のアタッチメントに直したバズと肩の155ミリのみとなる。正直言っただけかなりヤバイ、しかしこの焦りを悟らせないようもう一本のサーベルを引き抜き、正面でクロスさせるような構えを取る

「……」

後ろへと素早く移動した陸GMは、油断なく両手のサーベルを逆手に構える。俺もそれに応え、2期の間に不気味な静寂が訪れた。が、それも束の間、2機の丁度間に飛来した1発のロケット弾が起こした爆発を合図に、陸GMが凄まじい速度で俺へと迫る、俺は両肩の155mmを陸GMへと斉射する。が、陸GMは機体各部のスラスタを利用して素早く155mmの弾道から機体を逃がし、155mmが通り抜けた後にすぐさま戻る

「上手い!?!」

興奮しながらそう言った俺は、素早くリアシート正面から見て左側、計器類の中に紛れた一列のスイッチを上から全て押す。すると155mmと弾薬庫の固定ロックが外され、155mmと弾薬庫は地面へと落下する

「全機、無線解除」

俺がそう命令を発してからわずか5秒で3人分のウィンドウが開かれ。3人の顔が表示され。それとほぼ同タイミングで陸GMが俺へと左手のサーベルを振り下ろしてくる。それを右腕のサーベルで受け止める

「ツぐう…!?!」

振動が機体を震わせ、コクピット決して弱くない強さで揺さぶって来るが、そんな物で動揺はしない。俺はそのままウィンドウに表示された3人を見ながら怒鳴る

「俺がコイツと他のMSを抑える!、お前らは目標へ向かえ!!」

そのまま陸GMを吹き飛ばし、そのまま着地した瞬間を狙おうと駆ける

「ですが一人で4機も相手にするのは危険です!、こいつら…!」

「黙って行けッ!!」

ルーキーの言葉を遮る様に怒鳴りつつ、今まさに着地しようとしていた陸GMへと両腕のサーベルを大きく振りかぶる。が、しかし向こうもそれには気づいているようで、着地する瞬間に背中のスラストを全力で吹かして後ろへと飛ぶ

「何?!」

おかげで俺の攻撃は完全に空振りに終わり、その大きな隙を突くように側面から2機のGMが俺へと手に持つマシンガンで攻撃してくる。それを熱核ホバーエンジンの機動力と旋回性能で無理矢理回避しつつ、思わず

「チツ!?、ルーキーたちじゃ抑え切れなかったか…!」

しかし、それは同時にルーキー達がフリーになった事を告げていた。ならば…!」

「作戦時間は限られてるんだぞ?!、いいからさっさと行けッ!!」

大きくひり破られた陸GMの攻撃を弾き飛ばしながら怒鳴る。この時点で降下してから約10分が経過していた

「何?!、ウオツカスが!?!」

深緑に深い青色のまだら模様のカラーリングと頭部にサメのペイントが施されたドム。…ジオンの死神と恐れられるジオンのエースパイロット「カイト・バジュール」が乗る機体へサーベルを構えたまま、俺は部下からの報告に動揺を抑え切れずにいた……そんな……あのウオツカスが…

「は、はい…やけに動きの速いドムがいて、あつという間にやられました…」

涙声で部下がウオツカスの最後を話してくれる、本当はアイツの死を悲しみ、涙を流したかった。……だが今は戦場において、敵と対峙している。なら一人の友として友人の死を悲しむよりも、隊長として、部下を指揮しなければならぬ。そう自分に言い聞かせながら。俺はもう1人の部下に

「他の敵は?」

と聞いた。すると

「他の敵は司令部の方へ向かいました、敵部隊と合流しようとしているのではないかと…」

と返してくる

(逃がした…か。…なら…)

「ここで死神を叩く、各機。援護を」

俺がそう言うのと、2人分の了解、と言う言葉が聞こえてくるので、そのまま一気に機体を死神へと向かわせる。死神は迎え撃とうとするも、左右に移動した部下の攻撃に追い立てられ。迎撃の体勢を整えられずにいた。その隙を逃さず、もつとも確実に殺れるタイミングで一気に入らんと潜りこみ、そのまま両腕のサーベルで胴体と頭部を狙う

「取った!」

しかし、死神は理解^{わか}っていたかのようにターンを決めて躲すと、そのままシールドのスピアを俺のから空きとなった脇腹に決りこむように突き出す

「しまっ!?!」

殺られる!?!、そう直感的に理解した俺は、ぎゅつと目を閉じた。が、部下の1人がシールドタックルで強引に俺から離そうとするも、容易く回避され、逆にガラ空きとなった脇腹にカウンターをいれられそうになるも、もう1人の部下の掩護射撃に阻まれ失敗。そこに体勢を立て直した俺が振り上げた2本のサーベルを全力で振り下ろす。それを死神は右手のサーベルで受け止め。そして、…何故か左手のサーベルをしまう

「うおおおおおおお!」

一体何の意図があつてしまったのかはわからないが。このまま一気に押し切れればいいだけ…、勝てる…。勝てるぞ…!

「隊長!、このまま仕留めます!!」

「ラーバッツ!?!」

ラーバッツと呼ばれた俺の部下が、手に持つマシンガンで死神へと向ける。が、鳴り響いたのはGMが持つ100mmの乾いた発砲音の連続ではなく。死神が左手に持っていたジャイアント・バズの発砲音だった

「ツ!?!、ラーバッツ!?!」

まるでハチの巣のように機体が穴だらけとなったラーバッツのGMは、そのまま仰向けに倒れ。爆散した

「ラーバッツ!!」

爆散した機体の方を見ながら俺がそう叫んだ直後、凄まじい衝撃が俺を襲う。まるでミキサードでシェイクされたかのように視界が激しく揺れ、一際激しい衝撃と共にそれが終わる

「ガハッ…!!」

衝撃で肺の中の空気をすべて吐き出した。何も分からない。耳鳴りがする、……あれ?、何で何も見えないんだろう?、一体何がどうなったんだろうか……?

「このお…よくもッ!!」

微かに聞こえた部下の声が俺の意識を呼び起こす

「ぐ……う……」

視界が徐々にはつきりと世界を写し始め、機体のダメージが危険域に入ったことを知らせる紅い光がコクピット内を寺師、至る所から火花が飛び散っている。そして

「このッー、くそッ!!」

大量のノイズと至る所がブラックアウトしたスクリーンに映る部下と死神の戦い。それを見た俺は、部下を助けようとレバーを動かそうとし、気付く

「…?」

自分の左腕にコクピットの破片が突き刺さり、動かせなくなっていた事に。そして…

「があああああああああ!」

今まで経験した事のない、言葉で言い表す事すらできないほどの激痛が俺を襲う。

「ぐうウ…い、クッソがアア…!!」

引き抜こうと破片を掴むも、抜こうと力を入れた瞬間。さらに激しい痛みが俺を襲う。額に嫌な脂汗が流れ、今にも吐きそうになるが。部下を守る為、そう自分に言い聞かせながら一気に破片を引き抜く

「ぐあああ…!?!、ぐう…ガッ…はあ…い、はあ…!!」

引き抜くと同時に俺を襲った余りの激痛に意識が遠のく、それを傷口を殴ることで強引に意識を覚醒させ、最低限の応急処置……止血と

救急バンテージ（アムロが肩に開いた傷を塞ぐために貼ってたやつ）を貼る。しかし次の瞬間

「うわああああああああ!!」

最も聞こえて欲しく無かった声がコクピット内に響き渡る。見れば左腕を切り飛ばされ、地面に倒れ伏す部下のGMへと死神がジャイアント・バズを構えていた

「止めろ……」

しかし俺の声は聞こえない、そのまま死神はジャイアント・バズをしまい。GMへと手を差し伸べる

「ッ!、な、何を……?」

突然行動に困惑する俺と、困惑しながらもその手を取る部下、そして

「貴官らは実によく戦った。その健闘を讃えよう」

やや成熟しながらも、少し若い男の声が聞こえてくる。訳が分からないまま

「あ、ありがとうございます……」

と、状況を飲み込めず、死神の称賛の言葉を素直に受け取る部下

「うん、じゃあ……」

そう言っつて、GMの手を握ったまま、もう片方の手でサーベルを高く振り上げる死神

「死のつか?」

そう言うと同時にサーベルをコクピットへと突き刺し、抉るように切り裂く

「は……?」

そのまま部下のGMは爆散し、燃え盛るスクラップへと変わる

「イエーガン!?!。ッ!、クソがッ!、絶対に……絶対に殺してやる!!」

そして、ゆつくりと頭部のモノアイを俺へと向けた死神はそのモノアイを光らせ。そのタイミングで先程死神のもとを離れたの3機のドムが死神を元に戻って来る。そしてその周囲を2〜30機のMSが通り過ぎて行く。全てジオン製のMSであることから。降下してきた敵部隊だろう

「運が良かったな……」

先ほどの若い男の声が聞こえてくる。どうやら俺に対して言っ
て来ているようだ

「絶対に殺してやる……絶対に……殺してやるッ!!」

反射的に激しい憎悪と憎しみの込めて死神へ叫ぶ。それに対し、鼻
で笑いながら

「貴様じゃ俺は殺せん。諦めて軍を辞める事だな……」

そう言っつて、3機のドムと共に通り過ぎて行った降下部隊の後を
追っつて、燃え盛るジャングルの中へと……死神は消えて行った

「……ッ……ッ……」

俺はその後ろ姿をに居ら見続けながら、痛みと言いやうのない胸か
ら来る何かに押しつぶされるような感覚を味わいながら。声を押し
殺して泣いていた

その後救助された俺は、司令艦を始めとした艦隊が半壊したこと、
後続の第11軍の到着を待つて進撃を再開する事を知らされ。確信
した。連中が何故あれほど無謀な行動をとったのか……その狙いはこ
れだったのだ……

「ッ……」

気が付くと俺はまた泣いていた、何で泣いているのか?、理由は分
からない……だが

「……絶対に殺してやる……!」

この胸の内で煌々と燃え上がるこの復讐の炎が何故生まれたのか、
その理由だけは……確かに覚えている……

宇宙へ

「怯むな！、シャトル発射まであと5分だ!!」

第33MS中隊の中隊長を務めるオットー・シャール少佐は、苛烈な攻撃の前に怖気づき始めた部下を必死に鼓舞していた。既に本隊はヤビザでの防衛に失敗。司令部は基地の放棄と宇宙及び北米への撤退を決定

「ッ!？」

すぐ近くの地面に命中したミサイルによって巻き上げられた土砂と、着弾時の衝撃によって機体が激しく揺さぶられる。が、すぐさまそれを思考から排除し、敵をこれ以上近づかせまいと右手のバズーカを放つ、敵はすぐさま建物の陰に隠れてバズーカを回避するが、後続の車両に着弾し、その周囲にいた車両や地面を巻き込んで盛大に爆発する

「馬鹿がッ！、この狭いパナマの中に、密集状態で入って来るやつがいるかよッ!？」

そう、既に最深部である湾口施設と一体化した宇宙港と基地司令部手前にまで敵が侵入して来ていたが、某2千年の伝統を持つ国最大のスラム街よろしく複雑に入り組んだ道と幾つもの施設や建物によって敵は部隊を分散させ、更に奥地に迎うにつれてどんどんと移動ルートが狭まり、結果。敵は部隊を密集させたまま前進させなければならなくなっていた（敵としては中米攻略の足掛かりであり、また大西洋と太平洋を繋ぐパナマは戦略上非常に重要であり、出来る限り施設に損害を与えることなく制圧しようとしていたため、建物などを壊したルートを確保する。と言った事が出来なかったことも兵力分散と言う愚と敵陣地を前にして過度の密集状態と言う愚の二つの愚を犯させる原因となっていた）しかし

「うおっ!？」

ルートが限定されたと言ってもここに通じるルートだけで6つ、全体を見れば30を超えるルートがあるのだ、その為宇宙港防衛の任を

受けているこの第33MS中隊はその兵力を各ルートに分散させねばならず。更に中央に位置し、最も通るルートが多い此処は敵の集中砲火を受けていた。現に側面の裏路地から対MS歩兵によるロケット攻撃が左肩のシールドに命中してしまった。衝撃と反動で機体が倒れてしまうが、倒れ際に裏路地へ左手のハイパーマシンガンを撃ち込んでミンチにし、MS用のカバーポイントから体が出ないように起き上がりつつハイパーマシンガンだけをカバーから出して撃ちまくる。俗にブラインドファイアやゲリラ撃ちなどと呼ばれるものである。

「しよ、少佐！、これ以上はもう持ちません!!」

ハーバックの悲鳴にも似た声が通信に聞こえてくる。MAPには数えるのも嫌になるほどの赤い点が、今俺が球をばら撒いてる方向に表示されている：正直言えばあと数分持たないだろう

「じゃあ死ぬまで撃ち続けろ！、どうせもう殿が逃げる場所もなければ投降する何て言う選択肢も無いんだからな！」

そう言つて起き上がりつつバズーカを全弾撃ち込む。3度の爆発とともに密集状態だったが為に避けきれなかったMSや車両が周囲の味方を巻き込み、燃え上がるスクラップとなつて道を塞ぐ、すぐさまカバーポイントに積まれたザクマシンガンを持ちだし、炎の方へと両手のマシンガンを構え、ばらまく。すぐさま敵が反撃してくるからカバーポイントに隠れて攻撃をやり過ごす

「うッ……、けどもう武器g……」

直後、スクリーンに映っていたハーバックのザクを塗りつぶす様に凄まじい爆風が表示される

「ッ!?!」

何が起こつたのか理解するよりも速く、凄まじい衝撃が俺の機体を襲う

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

何が起きたのか理解できず。次の瞬間には何かに叩き付けられ高の様に一際激しい衝撃がコクピットを揺らし、それからワントンポおいて再び何かに叩き付けられる

「ぐっ…あっ……」

いつの間にか寝転んでいた。空が見える。ノイズのせいではほとんど見えないし、見えてる部分もあれだが、その空に、一筋の光が見えた。それは10個ほどで。皆空へと雲を作りながら昇って行く。俺達が稼いだ時間は無駄じゃなかった。俺達の命は確かに仲間を生かす事が出来た…そう思うと…命を掛けたかいがあつたと思えるな…

「……………ぐう…」

身をよじって腰のあたりを触る、どこだろう…もしやさっきのアレでどこかに飛んだか？

「ど、何処だ……？」

しばらく腰のあたりを触っていると。目的の物らしき感触が手に伝わる。あつた、俺の拳銃…

「……」

もう意識が途切れそうだ。さっさと逝こう……

「ごめんな、メアリ……」

そう言つて、俺はヘルメット越しにこめかみに当てた拳銃の引き金を引いた

「宇宙世紀0079 10月20日」

「ジオン公国は中米の放棄と、南米方面軍の解散を発表した」

神の使徒 前編

「地球 静止衛星軌道上」

「同 回収ポイント」

「……まさかこんなもので迎えに来るとは……正直想像もできませんでしたよ」

HLVのブリッジ…と言うよりコクピット内にあるモニターに映る「ハルファアール・フォン・ザクス」博士に敬礼する。博士は

「君と言うサンプルが貴重だった、と言うだけの事だよ。それに君への新しいおもちゃを運用するにはこれくらいのサイズじゃないとまだキツくてね」

と、博士は相変わらず素の笑い方とは思えないほどに歪な笑みを浮かべて見せる。ほんつと。良くこれでそんな地位にいれるな…

「しっかしこんなものまで引つ張り出せるとは…流石総帥お抱えの国技研のトップと言った所か…」

そうやって俺がコクピットの窓から眺める艦はドロス級超大型空母と呼ばれるもので、その搭載可能なMS数は何と182機、それを艦体下部の縦に七つあるカタパルトで一斉に射出し、最短約8分で全艦載MSを射出できる。更にか艦の全長は492m。これは我が軍が主力として運用するムサイ級の倍に及び、艦体上部両側面にそれぞれ3門ずつ計6門の連装メガ粒子砲（MS一機分を横に寝かせたぐらいの大きさ）が装備され、ムサイ級一隻分はあろう巨大なエンジン2基にはそれぞれ1基に付き2門の連装メガ粒子砲が備え付けられており。対艦攻撃能力は非常に高い。しかしその巨体故非常に鈍足であり、また対空砲を始めとした対空能力が無い、文字通り無い。その為艦載MSがその役目を担うのだが…今回はドロスを守るように展開しているムサイ級やティベ級などが護衛にしているようだ

「君達の回収作業はすぐに行なう。幾ら軌道上の制宙権は我々の物だが、これほどのデカ物が来ているとなれば話は別だ。それにこれはノ

口いしな。：ああ、それと中佐とセプト中尉にはドロスに乗艦後すぐに私の元ん来てくれたまえ、迎えはよこす」

一方的に言いたい事を言って通信を着る博士に思わずため息を吐く。それから少ししてドロスのカタパルトからざつと見30を超えるMSが出撃し、俺が乗るHLVや一緒に上がって来た他のHLVの側面にある穴に牽引用フックをひっかけてドロスへと引つ張る。引つ張る際僅かに機内が揺れたが、その後は比較的揺れることも無くドロスへと運ばれる

「あの、もしかしてカイト・バジュール中佐でありますか？」

「ん？、そうだが」

牽引作業をしてくれてるMSのうちの1機が俺に話しかけてきた。とりあえずそう答えると

「やっぱり！、ジオンの死神と恐れられるあのカイト中佐にお会いできるなんて、自分、感激です！」

と、正直ちよつと引いてしまうぐらいに喜んでいる……何でかなあ、ただ死なないように戦争を楽しんでただけなのに……なんでかなあ……？

「そんな大層な二つ名付けられるほど、戦果は挙げてないんだがな」

「謙遜を……貴方はグラナダ宙域戦では4隻、ブリティッシュでは1個中隊相当の戦闘機群をたった一人で殲滅し、ルウム戦役では更に3隻の敵艦と、あのレベルの座乗艦であるアナンケを撃沈させたんですよ!。大戦果じゃないですかッ!？」

捕獲して手柄を立てたのは黒い3連星だがな……と誰にも聞こえないぐらい小さな声でつぶやく。：あれだな、自分の武勇伝（に周りか勝手に認定して勝手に騒いでる）を聞かされるのは……その……なんだ、正直すつごい恥ずかしいから今すぐ辞めて欲しい。ガチで

「それに第1次降下作戦では自信が指揮する分隊で当該エリア内の全対空陣地と防空システムを破壊し、単機で敵飛行場を制圧、同飛行場に所属する数百人規模の連邦兵士を捕虜にし、北欧方面軍では連邦軍の抵抗の要であった要塞基地を制圧し、ヘルシンキでの戦いで瀕死の重傷を負ったものの、すぐに軍へ復帰して教導隊として総帥府直属の

あの親衛隊を指導して。地球方面軍に再転属してすぐに降下地点であったランタウ基地を強襲した多数の敵MSを撃破し基地の防衛に成功。その後ラン・グイナ防衛線では捕虜になるも。奇跡の生還を果たし、更に更に重度の精神障害により復帰は無理だろうとすら言われたのに、貴方は再び戦場に返ってきた！、これは本当にすごい事ですよ!？」

ぶっちゃけ救出された時の事はただの黒歴史何で。出来れば触れて欲しくはなかったんだがなあ…

「分かった！、分かった！。もうよしてくれ!!」

このままでは話が終わらんからと無理矢理話を切らせる、そのタイミングでHLVがドロスのカタパルトに到着する。…と言っても正確にはカタパルト横のエアロックに到着しただけだ(ドロスにHLVの収容、またはドッキングによる移動方法とかは設計されていないため、HLVないの人員やMS等に移して、HLV自体は放棄するらしい)慌てて話を終わらせてコクピットからHLVのエアロックへと移動する(無論荷物などはキッチリ持って行く)、すると

「あ、中佐」

「中佐、操縦ご苦労様です」

「…お疲れ様です」

丁度同じタイミングで3人もエアロックに歩いてくる。俺はそれぞれに挨拶をした後

「中尉、博士が私と君に話があるそうだ。案内役が向かうから部屋に来て欲しいとき」

「了解しました」

中尉はそう言って頷く。そのタイミングでエアロックの表記が行できないと言う意味の赤から通行可能を示す青に変わる

「まず怪我人からだ！、どいてくれ!!」

と、担架や他の兵士に肩を担がながら負傷兵たちが通って行く。その後に続いて俺らもエアロックを通過してドロスへと乗艦する

「すげえ…まるで基地だ……」

ドロスに入るなりルーキーが感嘆のため息と共にそう吐き出す。

確かにここが軍艦の中だとはとてもまはないが思えないぐらいだ。
：それに若干の吐き気がするレベルの油と金属の焼ける匂いが鼻を
突いてくる。：しっかしそれにしても2〜30機のMSがずらりと
並べられて、整備される光景つてのは壮観の一言に尽きるな、これと
同じ規模の格納庫が他にも存在し、且つこのドロスの中にあると言う
のだから。ジオンの国力：と言うより技術力の高さには本当に感服
させられる

「失礼、カイト・バジュール中佐と、セプト・レギオ中尉ですよね？」
不意に後ろから名前を呼ばれた事に内心ちよつとだけビビるも、そ
れを表に出さないよう気をつけながら振り返る

「そうだが、君は？」

振り返ると、そこには上下黒のスーツとズボンに身を包んだ若い男
が立っていた、男は柔和な笑みを浮かべながら

「これは申し遅れました。ザクス博士の使いとして参りました、ナナ
フシと申します」

そう言つて、ナナフシと名乗った男はこちらに会釈して来る

「お二人を博士の私室までご案内します、途中お二人に割り当てられ
た部屋に立ち寄りますので、荷物の方は置いて行つて下さい。それで
は、参りましょう」

そう言つて、格納庫の出口へと歩き出す。俺は

「二人とも負傷者の搬送を手伝ってやってくれ。その後は割り当てら
れた部屋で待機だ」

と命令する。二人とも了解。と俺に敬礼した後すぐさま負傷者の
列へと荷物を持ったまま走つて行く

「博士は待たされることが嫌いなお方です。お早く」

と言つて、ナナフシが急かして来るので分かつたと言つて歩き出
す。ナナフシは満足そうにうなずき、そのまま歩き出す

「遅かったじゃないか。ナナフシ!？」

部屋に入ると同時にザクスの罵声が聞こえてくる。部屋の中は足の踏み場がない程に資料やら何やらが散乱していた。そんな汚部屋の中央にある、辛うじて机だと分かる（ほとんど机部分が見えないほどに資料とかで埋まっている）書類の山の後ろからザクスの声が聞こえていた

「どうかご容赦を…」

そう言つて深く頭を下げるナナフシ。それに対しザクスはふん、と鼻を鳴らしながらも

「まあいい、それよりもこの書類をどうにかしてどけろ!!。これでは二人の顔が見えんではないか!？」

怒鳴る様に命令するザクスに畏まりましたと答えてすぐさま書類をどかしにかかるナナフシ。その手際は見事なもので、あつと言う間に書類の山から机とザクスの上半身が現れる

「博士、資料をお配りしても?」

「おお、気が利くじゃないか。さっさと配れ」

何でアイツあんなエラそうなんだろう…てかよくこんな有能そうな執事を雇えたな。…まあ、総帥のお気に入りつて言うのはそれだけで色々と優遇されるのかね…

「お受け取り下さい」

そう言つてナナフシがクリップボードに挟まれたやや厚みのある資料を渡してくる。表紙には

「…センチュリオ計画…概要？」

と太い赤字で書かれていた。しかも最後の方には持ち出し厳禁と判子が押されている。…持ち出しちゃダメなやつじゃないのか？

「次に左手にありますスクリーンへご注目ください」

ナナフシがそう言っただけのリモコンを操作する。すると壁に埋め込まれる形で設置されていたスクリーンが点灯し、何かの機体が表示される

「…博士。この機体は？」

とりあえず渡された資料に目を通しながら、スクリーンに表示された機体について博士に聞いてみると、博士はその台詞を待つていましてと言わんばかりの表情で

「この機体は…プロト・ブレイム。我々の間では使徒と呼ばれている機体だ」

総自信満々に博士が俺の質問に答えてくれる。スクリーンに表示された機体は今までのMSとは全く違うデザイン…と言うより全然違う。まずジオン製MSの共通した特徴（と言うか何故かそこ以外はジオニックとツイマッドは全く規格が違う。何でだろう？）であるモノアイではなく、連邦製MSと同じデュアルカメラになっており、頭部の形状は…何と言うかキノコ傘…だったか？、あれが一番近い形状をしている。それが大体人間の頭部で、顔に当たる部分はデュアルカメラと相まってかなり人間に似た形状になっている。しかし連邦の…ガンダム…だったっけか？、あれとはまた違った形状の顔だ。胴体や四肢に関して言えばもう本当にジオンとか連邦とか関係なく全く違う。と言うかコクピットブロックが納まる筈の胴体部分…人間で言えば胸からちょうど腹の少し上あたりまでの範囲がドム並みにかいのにそれより下から腰までが何か逆ピラミッドみたいに細くなってるんだけど。いびつっでレベルじゃないんだけど…あれ？、てか良く良く見たら腕無くね？…肩しか無いとかマジか…あれなの？、腕使わずにどうやって戦ったらええの？。後足も細いけど、まあ細すぎるって訳でも無いし、大丈夫か…

「博士、これ一体どんなコンセプトで開発したんですか？」

ものすつごく懐疑的な目で見つめながら博士にそう聞いてみると。予想通り：いや予想を遥かに上回るレベルの笑顔に顔をゆがめた博士が話し始める。凄いい剣幕で

「そうかいそうかいそれが聴きたいかい!？」

え?、あ?、いえ。別にそこまで聞きたいって言う訳では…

「まあまあまあ、聴きたまえ。言いかね?。まずこのブレイムはセンチュリオ開発の為にテストベットとして開発された機体なのだよ。この機体はIフィールドビームドライブのおかげでジェネレーターを始めとした駆動系が不要となったのだよ!。しかもこのIフィールドビームドライブそのものとIフィールドは同一であって全く別物なのだよ!。更に言えばターンタイプのおかげで飛躍的に進歩したナノマシン技術によりこの機体は世界で初めてナノマシンで建造された機体なのだよ!!。これがどれだけ素晴らしい事なのか平凡な君には理解できないだろう、いやする必要が無いと言うかそもそもこれを理解する事の出来ない君に説明する価値がなかったね?。じゃあそれは省いて君にはこの機体を扱う上での注意点を話しておこう…」

「は?」

「ん?」

「あの…これを…私が動かすのですか?」

「そうだが?、何か問題でもあるのか?」

「……因みに拒否権とかは…?」

「寝言でも言ってるのか?」

博士がそう言うのとほぼ同時にナナフシが俺の後頭部に何かを当ててくる。それがマグナムであることにはすぐに気が付いたが。それとほぼ同タイミングで俺の身体から一気に血の気が抜けていく。

…ああ

「……喜んでモルモットになる所存であります。はい」

転職してえ…

神の使徒 中編

「……パイロットのスーツとの同調を確認…問題ありません」

オペレーターの報告に満足そうにうなずいた私は、部屋の中央に置かれた革張りの椅子から部下たちに指示を出す。ここはドロス内にある実験フロアで、私がいる部屋はそのコントロールルームだ、私が連れて来た多くの科学者（部下）が忙しなく部屋の中を動き回っている。いやあ…下つ端は大変だなあ……。おっと、中佐じゃない事に驚いたかね？、私だよ。ザクスだ

「パイロット、待機室を出ました。コクピットへ向け移動中…」

オペレーターの報告に頷いた私は、左耳につけた通信機を起動し、中佐にこう話しかける

「中佐、そのスーツの着心地はどうかね？」

少しして中佐の声が、私の左耳に差した通信機から聴こえてくる「最高です。きているって感じが全くしませんよ、これ」

と、嬉しそうな声質で中佐が答えてくる

「それは良かった、こちらも作った甲斐があったというものだよ。…ああ後手術後、何か体に異常があると言った事は無いかね？。どんな些細な事でもだ」

何せかなり荒っぽい施術だったからな、最悪拒絶反応を起こして体が壊れる（文字通りの意味で）可能性もあるし。聴くだけ聞いておこう。まあこの実験が終わればその結果が成功であろうと失敗で在ろうと緊急手術確定な訳だから。まあ聞かなくても良かったが…まあ念のためだ

「特には、と言うか手術してから体の調子はすこぶるいいですよ」

「それはなによりだ、中佐。…中佐、先ほども説明したと思うが、この実験は非常に危険だ。最悪、命を落とす場合もある。…柄にもない事だとは自分でも思うが、君が辞めたいと言うのであればこの実験を中止する事も出来るが…」

無論嘘である。演技である

「……博士、あんたがそう言うこと言う時つてのは、絶対こつちが断れ

ない時だけって言うのはとっくに分かってるんで」

「良く分かっているじゃないかモルモット君。さっさと乗れ」

渡し後そう言うのと、やれやれと言った感じに肩を透かしながらコクピットへと中佐が乗り込んで行く

「…説明は受けたが……とてもコクピットだとは思えんな」

コクピットの構造は今まで自分が乗って来たタイプとは違い、球体状だ。そしてリニアシートには操縦桿やペダルと言った操縦系が一切ない。あるのは予備のパイロットスーツが収納されている座席後部の収納スペースを開く為の取っ手（扉は外開きではなく横にスライドさせるタイプなので、取っては引き戸用の物が使われている）と、パイロットが座る為のリニアシート。そしてこの球体上の部分全てがスクリーンになると言う全天周囲モニターとか奴のみだ

「こんなもので本当に操縦できるのか？」

そうぼやきながらリニアシートに座ると、コクピットハッチが閉まり、コクピット内は一切の光の無い暗闇に支配された

「中佐、準備は良いかね？」

ハッチが閉まってからワンテンポおいて博士の声が聞こえてくる。

俺はそれに

「いつでもどうぞ」

と返す。すると

「これより第1次機動実験を開始する。固定ロック機動」

博士が実験開始を告げる言葉に続いて発した言葉に、部下の博士が発したと思われる了解と言う言葉が聞こえた直後、リニアシートから突如として現れた金属製の手枷が俺の両手首と両足首を固定する

「耐衝撃急襲用拘束板のセット開始」

続いて天井から何やら金属製の板のような物が降りてくる。形状は鎧の前側だけを切り取ったみたいな形状をしており、それが俺の身体に付けられると、かたと脇腹のリニアシートから伸びた金属の固定部分とかみ合い、固定される

「よし、問題ないな?……コネクトケーブル接続」

博士の言葉と共にリニアシートが僅かに揺れ、後ろから何か機械の稼働音と…移動音だろうか?、が聞こえてくる。そしてそれは俺のすぐ後ろにまで来ると、手術によって取り付けられた首筋の接続口に差し込まれる

「ぐう…!?!」

鋭く差すような痛みと共に鈍器で殴られたかのような衝撃が伝わり、リニアシートに固定されているにもかかわらず俺の身体が大きく揺れる

「ブレイム本体との接続に問題なし…中佐、意識をしっかりと保ちたまえよ。マザーシステムの秒読みに入れ」

その言葉を博士が発すると先ほどとはまた違う部下の声が聞こえてくる

「システム起動まであと10秒…9…8…7…」

部下が秒読みを開始すると同時に全身に力を入れ、置く場をぎゅつと噛みしめる。事前の説明では死ぬほど痛いそうだが…一体どれほどのものなのやら……

「5…4…3…2…1…0」

瞬間。ケーブル接続時とは比べ物にならないほどの激痛が首筋から全身へと瞬時に駆け巡る

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああああああああ!?!」

今まで経験した事も無い激痛に俺は10秒も耐え切れなかった、全身から滝のような汗が吹き出し、目は白い部分が無い程に充血。鼻の両側から鼻血が流れ、胃の中にあつた物全てを吐き出しながら叫び続ける。

「止めるオオオオオオオオオオオ!?!、止められくれエエエエええええええええええええええええええええ!!」

まるで全身の皮膚を内側から強引に引き裂かれ、その身が焼かれていくかのような伊丹に耐え切れず俺がそう叫ぶ。しかし

「止めるな!!、後も少しだ!!」

「いったあツ!?、パイロットの状況はア!?」

一瞬、ほんの一瞬だがブレイムが起動した事をモニターから感知したザクスは歓喜の声を上げる。しかし喜んだ瞬間には機体は再びその機能を停止させてしまった。その原因がパイロットにあることを瞬時に理解したザクスは、パイロットの状況を私に報告していた部下に怒鳴る

「心停止を確認しましたッ!!」

「死なすな!!。スーツの生命維持機能を最大!、心臓マツサージ!!」

部下の報告に間髪入れずに命令を下す。

「は、はいッ!?」

部下は慌てた様子でコンソールを操作し、コンソールの一番上にある赤いボタンを押す。直後、天井から縦ではなく斜めに置かれたディスプレイに写されていたパイロットの胸部が僅かに上がる

「…も、戻りました!!」

パイロットが生き返った事を知らされると同時にザクスは飛び上がる

「いよっしやああああああ!。パイロットの脳は大丈夫なのか!」

全速力で鵜B化の隣まで息、パイロットのバイタルデータを表示する画面を食い入るように観ながら部下に聞くと。驚く&余りの興奮っぷりに若干引きつつ

「あ、ありません!、正常です!!」

オペレーターがそう告げた直後、ブレイムのデュアルカメラが点灯し、灰色だったボディが深緑に深い青色のまだら模様になる。それを見たザクスは

「成功だああ

————— あああああああああ

アアアアアアア!!」

と、歓喜の声を上げ、その場にいた全員が歓喜の声を上げる

「すぐに実験を修了する!。パイロットを急いでブレイムから降ろすんだ!!」

ザクスの指示に先程まで手放しで喜んでいた部下たちが弾かれるように動き出す。すぐさま待機していた救護班がコクピットハッチを開き、高速を解いてパイロットを担架で運び出す。コクピットから運び出されたパイロット…カイトはまるで拷問を受けた後の死体のように両足首と両手首がボロボロになっており、顔は酷くやつれ果てていた。肌の色も真っ白を通り越した何やら灰色に近くなっていた。「良く頑張ったよ。君は…」

運び出されるカイトを見ながら、ザクスはそう言っ、小さく拍手する。その音に気づいた者は誰もいなかった…

神の使徒 後編

星々の明かりのみが照らすこの漆黒の宇宙に、二筋の残光が振れるように交差しながら進んで行く

「当たれえええええ!!」

そう叫びながら両腕のマシニングンを敵へとばらまく、しかしその大部分は避けられ、僅かに命中した球はまるで分解されるように粉々に消滅していく。その光景に舌打ちしつつ両腕のマシニングンを投げ捨てる。投げ捨てると同時に両腕が肩を残して光の粒子となって消滅し、背中のクロノス上部に集まる。そして粒子は4つの金属製の塊となるが、そのうち2つが再び光の粒子となって右肩に集まる。そしてそのまま光の粒子は右腕を形作り、限界ができた部分から光が消え、先ほど消滅した右腕になっていく。そしてさらに右腕には二つの銃を束ねたかのような形状の銃が現れる

「こいつは耐えられるかッ!」

二つの銃口から放たれたのは徹甲弾極太のビーム。それは一瞬のうち敵に命中し、凄まじい勢の衝撃波を放つほどの爆発を起こす。

「やったか!」

その銃口を敵へと向けながら、思わず俺の口からそう言葉が溢れる、そして爆煙の中から漢方どころか戦艦よりも高いビームが放たれる

「ッ!」

レルム・Dを最大出力で展開しつつ回避行動に移る。間一髪直撃は避けれたものの、掠れたクロノスの左側面に設置されたサイコ・アームが装備していたバズーカごと吹き飛ばす

「ぐウ…!」

衝撃波が機体を激しく揺らす。しかし、態勢を立て直す暇すら与えないと言わんばかりに敵は両手に刀身から光の粒子を放つ大剣を手に襲いかかる

「一息つかせろって…!」

すぐさま残るサイコ・アームで攻撃しつつ各部のスラスタ―を使っ

て後ろへジャンプし、残るクロノスの二つの金属製の塊から左腕を作り出し、銃を消滅させ。できた光の粒子を使ってこちらも敵と全く同じ大剣を2本作り出し。それを両手で持ってしっかりと構える。敵は俺の行動に答えるように一気に俺へと迫る。俺は迫る敵の頭部を突き砕くように右手の大剣を突き出す。それを敵は体の重心を右に逸らしつつ左手の大剣を使って受け流す。そしてそのまま右の大剣を左手の大剣を突き出した事でガラ空きとなった俺の胴体の真ん中を狙って横薙ぎに振るう

「させるかあ!!」

残っていた右手の大剣を使ってそれを受け止め、ジャイアント・バスを装備するサイコ・アームを残弾がなくなるまで撃ちまくる。当然ほとんどゼロ距離で爆発した為に爆風で吹き飛ばされるが、敵との距離を開くことができた

「……………」

勝負がついてはいない。そう確信した俺が大剣を両手でクロスさせる形で構える。そこから再び敵が爆煙の中から現れる。しかしその頭部は外装の半分が砕け、機体のいたるところに亀裂が走り、左腕が肩ごと吹き飛んでいた。しかし眼前に迫るその敵は本来であれば戦うことを放棄してもなんらおかしくないほどの損傷を負って尚、全く臆することなく俺へと迫る

「いい加減にくたばりやがれえッ!!」

そう敵へと叫びながら迫る敵へと両腕の大剣を大きく振りかぶる。しかしそのタイミングで敵は更に加速し、俺が大剣を振り下ろすよりも早く。残る右手の大剣を機体のコクピットコアめがけて突き出す

「ぐううう…!?!」

すんでのところで身をよじったが為にコクピットブロックへの直撃を免れることに成功するも、敵の放った一撃は機体の左肩を切断する

「まあだだあ!!」

残った右の大剣を全力で振り下ろす。振り下ろされた大剣は左肩を切断した直後の敵の右腕の、人間でいえば肘にあたる関節部分へと

振り下ろす。完全に硬直しきった状態では回避することも叶わず、敵の右腕は関節部分から切り落とされる。俺はまだ武装の残るサイコ・アーム全てを敵へと構え、躊躇うことなく残弾がなくなるまで撃ち込む。そして弾切れになるまで撃ち込んででもまだ切り落とされた右腕を俺へと向け、近づこうとする敵へと大剣を差し込み、振り上げる。敵は一瞬のうちに内側から体を真っ二つに切り裂かれ。爆散する

「シユミレーションを終了します」

という機械音声が聞こえてくる。次の瞬間には全てのスクリーンが停止し、俺の体をリニアシートに固定していた全てのロックが解除され。続いてコクピットハッチが開く

「ふう〜……」

体の緊張を解きほぐすように肺の中の空気を全て吐き出し、首筋の接続口に差し込まれていたコネクトケーブルを引き抜き。ヘルメットを外しながらハッチをくぐって外へと出る

「ご苦労だったな？、今回は中々にハードだっただろうか？」

コクピットハッチを出るとザクスがそう言っただけ俺にスポーツドリンクを投げ渡してくるのでそれをキャッチし、中身を一気に飲み干す。疲れきっていた体に塩分と糖分が染み渡る

「我々が作ったこれまでの君の戦闘データとプライムの操縦訓練で得られたデータを基にして作り上げた君はどうだったかね？」

「ええ…自分がどれほど狂ってるのかをよくよく理解できましたよ……」

博士が誇らしげな顔をしながら自慢げに語ってくるので、精一杯の皮肉を込めて返す。……どうせ皮肉を皮肉として受けとらねえんだろうなあ……

「ま、やはり君が勝ってしまったがね。全く…やはりAIではまだ完璧に元となった人物のコピーを作り出すことはできんか…どうするかなあ……」

途中から完全に独り言に変わる＆俺の方を見ずに実験フロアの出

口へと地面を蹴って飛んでいく。…こういう時につくづく思う。天才はやっぱりどっかが壊れてんだろうなあ…と

「ま、考えてても仕方ねえか…シャワー浴びて寝よ」

もはや考えることすらも嫌だと言わんばかりに頭を振り、更衣室とシャワールームが一体化した控え室へと向かう。とにかく早く寝たい…

幕間 ブレイムに関する説明書

「G-000 プロトタイプ・センチュリオ・ブレイム」

「プロジェクト・センチュリオに基づいて開発された。センチュリオシリーズのプロトタイプ。その機体をナノマシンによって構成しており。特殊な防御フィールドを展開してあらゆる攻撃を分解し吸収する「レルム・ドミナートウス」と言う防御兵装に加え、ナノマシン自体が分裂、増殖する事で損傷箇所を修復する「プロト・ナノスキン」と呼ばれる特殊な自己再生装甲を有している。そして本気最大の特徴が金属製の塊。正式名称を「マシン・タンク」と呼ばれる羽根状のナノマシンの集合体により取り付けられていない腕部の生成。更に連装ランチャー「ランチャー・ジェミナス」や刀身から放出したナノマシンがビーム状の刃を形成し、あらゆる防御を貫通する事の出来る近接兵装「ブレード・ルミナリウム」。またデータベース上に保存されたあらゆる兵装を瞬時に作成する事が出来る」

「本機は前述した機能に加え、本機最大の特徴として手足を使わずに機体をコントロールする事が出来るサイコ・コネクターが試験的に導入されている。しかしこのサイコ・コネクターはニュータイプでなければ起動させることが出来ず。またパイロットの神経系にダイレクトに接続する為、パイロットには手術によって首筋に埋め込まれた専用のプラグにサイコ・コネクターとの接続するためのコネクト・ケーブルを刺し込む必要性がある。またこの手術は適合率が低いと体が拒絶反応を起こして物理的に壊れてしまうケースもあり。最低でも80%異常の適合率が認められなければ手術の許可は下りない」

「更に本機はIFBD（Iフィールドビームドライブ）と呼ばれる新技術を使用する事で既存のMSとは違い機体内部でジェネレーターや駆動装備に占有される容積が極端に少なくする事に成功、このため上半身はがらんどで駆体そのものが装甲や構造材を兼ねた構造となっている。しかし本機は当初要求されていた速度を出せるほどのエンジンを時間不足のため開発できず、急遽専用に作られたコンテナの中

にメインスラスタ―1本とその周囲に4つのサブスラスタ―がスラスタ―用の燃料と共にコンテナ内に格納されている（メインが中央、サブはそれぞれメインの左斜め上、左斜め下、右斜め上、右斜め下に設置される）そしてコンテナには8本のサイコ・アームと呼ばれる作業用アームが上下左右に一本、ぼってんを作る様に左斜め上、左斜め下、右斜め上、右斜め下に1本ずつ設置されており。それぞれ上下左右がドム用のジャイアント・バズ。罰点がザク・マシンガンを装備しており。空きスペースに設置された簡易弾薬庫から弾薬を補給する（弾薬補給は武器を持つアームとはまた別のアームが行う）。この武装コンテナとでもいうべきものは「クロノス」と名付けられ、マシン・タンクは使用されていない時はこのクロノスの上部。にあるサイコ・アームの手前に設置されている」

「本機はクロノスによつて他の追従を許さない圧倒的な加速力を有しているが、半面機動性や旋回性能は絶望的に低く、基本的に1撃離脱以外の戦法を取ることが出来ないのが、唯一の欠点と言えるだろう」

「本機によつて得られたデータが、センチュリオ開発に貢献できるところを切に願う…」

「国立技術研究所所長 ハルフアー・フォン・ザクス」

再臨せし死神の咆哮

「……………」

真つ暗なコクピットの中で。俺は敵を待ち続けた。そして…

「敵艦隊を確認」

AIの無機質な機械音声が俺の脳内に響き渡る。直後、MS特有の起動音と共にスクリーンが点灯する。しかしスクリーンは依然として何も写さず。コクピットは暗いままだ

「Fake Comet解除」

直後、僅かな振動と連鎖的な爆発音が聞こえ。暗礁宙域内での隠密行動用にカモフラージュとして機体表面を覆っていた岩を固定していた固定用のアームが全て外れ。それに前後してスクリーンが宇宙の景色を写し出す

「全システムオールグリーン、作戦行動を開始せよ」

再び脳内に響き渡る機械音声に。俺は…

「…さて、ひっさしぶりの狩りと生きますか……」

極上の獲物を見つけた瞬間の猛獣のように舌なめずりして、マシン・タンクを二つ分解し。右腕とブレイムと同じぐらいの長さを持つライフルへと再構築し。身をひそめる暗礁宙域から出ると同時に敵艦隊の中央へと構え。引き金を引く。直後、ライフルから放たれた極太のビームが艦隊中央部にいたマゼラン級と、その周りにいた4隻のサラミス級を飲み込み、爆散。更にその周りにいたサラミス級に爆発によって生じた衝撃波や吹き飛んだ艦の残骸が襲い掛かり。2次被害が広がっていく。そこに俺はライフルを分解し、更にもう一個のマシン・タンクも分解して両腕にブレード・ルミナリウムを再構築する。そのタイミングで残る敵艦隊から反撃が飛んでくるも、レルム・Dによって全て分解、吸収されていく…

「雑魚が…」

サイコ・アームを展開してから一気に敵艦隊めがけて突っ込む敵は全く効果のない無駄玉を俺へと浴びせかけるが。無駄無駄無駄だ、そんなもんでレルム・Dが砕けるかよ

「落ちろオ!!」

まず手近なサラミス級のブリッジへと両手のブレードを叩き込む。一瞬のうちにサラミス級のブリッジがぺしゃんこになり、ブレードがサラミスの底を突き破る。そのまま両手のブレードを分解して飛び立つ。飛び立つと同時にまた敵からの攻撃が始まり。さらに敵艦隊から飛び立ったGMによる攻撃も加わる。まあブレイムこいっになってなきや漁る状況だが。こいつのおかげで焦る要素は皆無。恐怖も何にも感じねえ…ほんつと。つくづく思うが、<rb>こいつ</rb><rp></rp></><rt></rt>>ブレイ
</rt></rp></></rp></></ruby>はバケモンだ
「鬱陶しいな…ハエの分際が…」

分解したナノマシンを今度は2本分のジャイアント・ヒートホークの形に変形させ。サーベルを手に迫り来るジムをまるでガラス細工のように粉々に吹き飛ばす。あっけない。もうここまで来れば訓練した軍人と赤ん坊ぐらいの差だな

「ま、手加減せんがなw」

意地の悪い笑みを浮かべながらそう言った俺は、敵MSをジャイアント・ヒートホークで吹き飛ばし、サイコ・アームのマシンガンやバズーカで撃破しながら一隻、また一隻と撃破していく。そして

「飽きた。吹き飛ばそう」

今まさに敵MSへと振り下ろそうとしていたジャイアント・ヒートホークを分解しながら俺はそう言ってGMを蹴り飛ばし。分解したジャイアント・ヒートホークを先ほどの極太ライフルに再構築する。今度は両手持ちだ。それを大きく開いて完全に水平になるまで持ち上げる。そして…

「さあ…死ね」

その一言と共に引き金を引く。放たれた極太ビームは一瞬のうちに7隻の敵艦と20機以上のMSが破壊し。俺はそのまま機体を回転させ、残る敵艦とMSを全て焼き尽くしていく

「敵艦隊の殲滅を確認。ミッションコンプリート、帰投してください」

AIからの言葉に俺は大きくため息と共に

「終わるとつまらんものだな…」

と吐き捨てながらライフルを分解。マシン・タンクに再構築してそれをクロノスの上部に設置し、母艦へ帰投しようと機体各部のスラストターを使って機体を反対方向に回転させる

「助けて…」

全周波数回線で誰かの声が聞こえて来た。AIに位置を特定させると、おそらく奇跡的に先ほどのローリングバスターを食ら技にすんだランチが数艇、固まって救難信号を発していた。位置を特定できたのもこれのおかげだ。……ああ……

「俺がいなくなってから発信すれば助かったろうに…」

呆れた悲しみが混ざった声質で俺はそう言った。そしてランチに向かつてサイコ・アームのマシンガンとバズーカをマガジンがからになるまでばら撒き。続いて再びマシン・タンクを分解、ライフルに再構築して生存者を決して逃さぬよう丁寧に丁寧に残骸ごと蒸発させていく

「……生存者は…」

「生存者はいません。帰投してください」

俺の問いに一拍置いて答えてくれる。俺は

「そうか…」

と残念そうに言って、今度は母艦へ向かって飛んでいった…

「後の世に死神の虐殺と歌われる南極条約違反の大量虐殺行為の始まりである」

私は人でした

「任務ご苦労。大佐」

コクピットから降りるなりザクス博士が出迎えてくれた。いつもはこんな事してくれないのに：教は何かいい事でもあったのだろうか？

「出迎えなんて珍しいですね？」

「ま、君が初めて出撃して、戦果を挙げて帰ってきた日なんだ。出迎えぐらいはするさ」

そう言っつて、博士は相変わらず巢の笑みとはとても思えないほどに歪で胡散臭そうな笑顔を浮かべてくれた。：まあいつか？

「ありがとうございます。じゃあ自分は今回の戦闘のレポートをまとめる仕事があるので。これで…」

そう言っつて。俺は格納庫の出口へと飛ぶ。博士は

「それはまた後日でも良いから。今日はゆっくり休みたまえ！」

と声をかけてくれた。優しいな：博士は……。俺は心の中であらためてそう思いながら。格納庫を出て自分の部屋へ向かう

「カイト・バジュール大佐の調整と身体能力及びニュータイプ能力の強化は完全に成功したと言えます。記憶の調整と処理も滞りなく完了しましたし。これで彼は我々にとって忠実なモルモットになったと言えるでしょう。まずはその事をお喜び申し上げます。…ザクス博士？」

部下がやや怯え気味に私を呼ぶ

「何だ？」

私がそう言うと。部下は額の汗を拭いながら。絞り出すようにかすれた声で

「い、いえッ!?…なっ、何でもありません…」

そう言って部下は慌てて報告を続ける。その様子には私はさらに苛立ちを募らせた。…ん?、苛立ちを募らせた？

「(ああ…なんだ。そう言う事か…)」

彼の報告を聴いている間に。私は大変機嫌が悪くなっていったらしい。今すぐにでもトイレに駆け込んでさっき食べた夕食をすべて吐き出したい衝動とはらわたが煮えくり返るような感覚に襲われているが。何時ものように顔の上から仮面をかぶせて表情を何時も通りにし、全身に力を込める。それでようやく部下は安堵したのか口調が何時もの物に戻る

「…ええ、今回の戦闘による戦果はサラミス級9隻、マゼラン級1隻。そしてMS約40機です。…まさに大戦果と言ってよい数値ですが。博士」

「何か？」

「一体なぜこれほどの戦力を制圧しても何のうまみも無い暗礁宙域に差し向ける事が出来たのですか？」

部下のその問いに。私は難問に正解した生徒を褒める教師がするような満足げな笑みを浮かべ

「なあに、簡単な話だよ。裏切り者を使ったんだ」

「裏切り者…ですか？」

「そうだ。我が公国のスパイ網は既に連邦軍上層部から末端の小部隊に至るまで広く…それでいて深く浸透している。それらのスパイを使ってあの暗礁宙域に補給基地があると言う事実を捏造させた。更にあの艦隊を差し向けさせた。何…このゴタゴタの中艦隊が一つ無くなつたぐらいで気にするほど…いや気に出来る程のまともな頭など居らんよ…問題は無い」

「そう言い切り、私は部下に下がるよう手を振る。部下は資料をわきに挟み、一礼して部屋を出て行く」

「……」

部下が部屋を出た後、私は手に持っていたカップを全力で地面に叩き付けた。カップは粉々に砕け散り、中に残っていた僅かな液体が床のカーペットに染み込んでいく…私はその光景を見てさらに苛立ちを募らせる。

「ああ…、ああ…！。あああああああああもう！。一体なぜ今になって私が良心の呵責などと言うつまらない物に支配されねばならんのだ!?!。ふざけるのも大概にしているよ!?!」

髪を引きちぎらんばかりに引つ張りながら発狂した私は。デスクの上に置かれていた全ての物を床へと弾き飛ばし。何度も何度もデスクにこぶしを叩き付け悶絶する。何故だ?。…何故今さらこんな所でこんなものが現れる…?。…もう捨てたはずなのに…!

「もう私に心ナカミなどない筈なのに…!。何故だツ!?!」

私は怒り狂った。あの時捨てたはずの心が今になって再び現れた事に。そして…

「何故だ…?、もうこんな苦しみと無縁でいられると喜んでいられたのに…!。何故だ…!?!。何故…こんなあ…!?!」

いつの間にか涙を流しながら。…今にも崩れ落ちそうな体をデスクにしがみつくと懸命に耐えながら。私はまるで許しを請うかのように泣きながらなぜ?と問い続けた

あの時私は心を捨てた。ジオンが敗北する事を…そしてなにより

ジオンがその思想ごとく忘却されると言う事実を知ったその時から……。私は……その時から心を無くした。奴らから得られた限りある知識の断片から兵器を作り。彼女らを作る過程で私の心が擦り切れることなど目に見えていた。私はそれに耐えられない。……だから私は心を消した。私が信じた理想と誇りが消え去る未来に抗いたくて……。私たちが信じて戦った全てが誰からも忘れられる……そんな無慈悲な未来を消し去る為に……なの……

「あの男か……？。私にこれを取り戻させたのは？。あの男なのか……？」

彼……カイト・バジュールを人間から機械へ変えた時。私は彼が日に日に人間味を失っていくところを見て来た。

「ああ……なんだ……」

感嘆だった。私は……

「結局人を捨ててきていかなかった……」

弱かったから。人の心を捨てることが怖かったから。ただ忘れてただけだったんだ……

「……はあ……」

全てを吐き出すように私は大きく息を吐き出し。部屋を出ようと立ち上がる。向かう場所はもちろんあそこだ

「これが私の最後の寄る辺……」

そう言つて、私はブレイムの頭を撫でる。最早私にはこれしか残されてはいない。他の者はすべて捨てた。心も。家族も。友人も。自分と言う名前も。何もかも……けど

「結局私も人間だった……と言う事か……?」

そう言つて。私はブレイムの顔を撫でつづけた。この身の内を焦がす炎が消え去るまで……

銀の流星

「良いかね大佐。今回のターゲットはジャブローから打ち上げられたニュータイプ部隊だ。既に彼の赤い彗星ことシャア・アズナブル大佐とキャメル・パトロール艦隊が交戦、結果はザンジバルが中破、キャメル・パトロール艦隊は壊滅した。現在敵はサイド5に進路を取っており。このままでは我々の研究施設の存在に気付く可能性もある。その前に排除するんだ。最悪撃退でも構わん」

初めて乗るゲルググのコクピットに違和感を憶えつつ、俺は出撃前の最終確認をしながら博士の作戦説明を聞いていた。……毎度思うのだが何故博士がそんなことするんだろう。と言うよりブリーフィングも無しに今直接説明されても非常に困るんだよなあ……

「了解しました。ですが彼の赤い彗星を退けたニュータイプ部隊を相手に、ブレイムも無く私一人で戦うのは……」

「ブレイムは現在コアユニットの調整で出撃できん。……だが君はたかがその程度の要因で敵に勝てないと、そう私に言いたいのかね？、ん？」

私の言葉を遮るように博士のドスのきいた声が聞こえてくる。私はすぐさま

「いえ、ただ非常に厳しいと言葉を続けようと思っただけです。ご命令とあらばいかなる手を尽くしてでも必ずや勝利して御覧に入れます」

と、一切の焦りも慢心も過信すらも無く即答する。博士はそれに満ちげに頷き

「それでこそだ、大佐」

そのタイミングで機体の最終確認が終了し、俺はスクリーンの電源を入れる。次の瞬間格納庫の内の景色が投影され、整備兵の1人がハンガーのロックを外したから射出位置まで動いてくれとジェスチャーで促していたので、機体をゆっくりとハンガーから出してカタパルトへと向かう。そしてカタパルト前まで来たところで一度止まり、まず右腕のアタッチメントにシールドを装備し、腰後ろのア

タッチメントにビームナギナタを装備。そして腰右側のアタッチメントに連邦軍の地上専用MSが主に使用する100mmを元に開発されたMP43を装備し、最後にビームライフルを左手に持てば武装は完了である。そのままカタパルトに両足を乗せれば後は完成からの指示を待つのみだ。尚この間博士が

「今回は45号被検体と46号、そして47号の3体を投入することが決定した。なあに、今回は前回の君の戦闘データをフィードバックしてあるから。君には劣らずともなみのエースクラスなら十分に粉碎できるだろう。では出撃だ。君に我が父の慈悲が賜らんことを…」

首から下げた首飾りを握りしめながらそう言っただけで博士は通信を切る

「ジーク・ジオン…」

直後、カタパルト前のランプが赤から青に変わる

「カイト・バジュール、ゲルググシルバー。出るぞ！」

カタパルトが起動し、一気に機体が戦闘速度にまで加速される。そのまま灌漑へと射出されると同時にランドセルのメインスラスターを起動し、研究施設と、それを隠す為にワザと配置されたデブリによって作られた暗礁宙域を出る。そのタイミングで施設から3つの光が続けざまに現れる。見れば俺と同じゲルググ（塗装は俺のシルバーと違い、ダークグレー）が3基、編隊を組みながらこちらへと接近してくる

「こちら施設防衛隊所属、45号以下3名。これより貴官の指揮下に移る」

先頭のゲルググから通信が入って来るのでそれに了承し、俺が先頭になるように編隊を組み直す。そのタイミングで目標である例のニュータイプ部隊の母艦…木馬だったか？、を最大望遠でスクリーン上に捉えた

「ガンダムは俺が止める。お前らは他の奴を殺れ」

「了解」

俺が散開を指示する手信号を送ると同時に被検体が乗る3機のゲ

ルググはそれぞれ3方向に散開。俺は牽制として木馬目掛けてライフルを2発放つ。放ったビームは木馬に命中する事なくブリッジの左右を通り過ぎ、すぐさま木馬から反撃が飛んで来るのでそれを回避。そのタイミングで木馬の左側の前足がゆっくりと開く。どうやらあれが格納庫のようだ。俺はMSが格納庫からカタパルトで射出された際の起動線の上にライフルの照準を合わせ。木馬の反撃をかわし続ける。そして格納庫から白を基調としたカラフルなMSが一機、木馬から射出される

「当たれッ！」

俺はそのタイミングでライフルの引き金を引く。放たれたビームは真っ直ぐに白いMS：ガンダムへと吸い込まれ。そして回避される

「なっ!？」

明らかに回避不可能なタイミングで撃つたにもかかわらず、ガンダムはまるで最初から知っていたかのようにそれを避けた。まるでそれが当たり前だとも言わんばかりに回避して見せたのだ。俺は思わず舌打ちしつつさらに4度引き金を引くも全て避けられ、逆にガンダムが放ったバズーカを内蔵された胸部のバルカン砲で撃ち落としつつ背中からとりだしたビームナギナタを振り回しつつガンダムへと迫る。ガンダムもビームサーベルをランドセルから抜き取り、俺を迎え撃ってくる

「仕留めるー！」

俺が腰だめで放ったビームライフルをガンダムは容易く回避し、俺はその回避先を読んでナギナタの展開は煮を限界まで伸ばし、スピアのようにガンダムの回避先へと突き出す。それをガンダムは理解^{わか}っていたかのようにナギナタの切っ先が装甲に触れるギリギリのところまでサーベルを使ってナギナタを弾く

「チっ!？」

舌打ちしつつ懐に模擬R込もうとしてきたガンダムをライフルで牽制しつつ一氣に後方に飛んで距離を取る。そして再びナギナタを振り回しつつガンダムへと迫る。今度はガンダムにナギナタの刃が

届くよりもそこそこの手前の地点でジャンプし、そのままナギナタをガンダムの頭部目掛けて振り下ろす。ガンダムは素早くサーベルでそれを受け止めて来るので、間髪入れずにライフルをガンダムの頭部へと向けるも、引き金を引く前にもう一本のサーベルが俺のライフルを真つ二つに切り裂く

「嘘だろ!？」

反射的にライフルをガンダムの方へ放り投げつつシールドを構えて全速力で後ろに飛ぶ。俺が飛んですぐにライフルは爆発し、その爆炎の中からガンダムがライフルを乱射しながら突っ込んでくる。その光景に私は恐怖した。初めて心の底から恐怖した。どれほど先を読もうともその先を読んでくる敵言葉にすればたったそれだけの事だ。だがそれがどうしようもなくどうしようもなく……

「ッ!？」

恐怖で言葉も出せないまま、俺は盛大に舌打ちしつつMP43を抜き取り、ガンダムに向けてばら撒く。ガンダムはシールドを使ってそれを完全に防いで見せた。……なんだあのシールド、何で出来てんだ？

「アニメじゃねえんだからよお……!？」

愚痴りつつスラストターを全開にしてビームを回避し、そのままサイド5の残骸で出来た暗礁宙域舞台にめまぐるしく攻守が入れ替わる攻防戦が始まる。残骸を利用して相手の攻撃を回避し、隙を見て守りから攻めへと転ずる。これがめまぐるしく入れ替わり続け、サイド5の残骸で出来た暗礁宙域内に美しい花火が上がり続けていた。……だが……

「このッ!?!、いい加減に……!！」

それは何時だって唐突に終わるものだ

「落ちろってんだよ!!」

弾切れ寸前となった最早威嚇にすらならない豆鉄砲と化したMP43をばら撒きつつナギナタを後ろ手に回して振り回す。そしてシールドを構えたままこちらへと向かってくるガンダムを、シールド越しに限界まで伸ばしたナギナタを突き刺す。しかし貫通した

シールドの向こう側にガンダムはおらず

「なっ！、ッ!?。しまっ…」

直前で真下へと逃れ、そのまま俺の後ろへと回り込んだガンダムが、ゲルググの左腕を切り飛ばす

「ぐう…!?」

続けざまに放たれた一撃を何とかシールドから引き抜いたなぎなたで受け止め。もう片方のサーベルを振りかぶって来ると同時に手を蹴り上げることでサーベルを蹴り飛ばす。そして

「ッ!」

誰かが私たちを見ている。そんな確かな感覚が俺を襲った。そしてそれはガンダムのパイロットも感じ取ったようで、お互い一瞬動きを止める。俺はその隙を突いて胸部のバルカン砲を頭部から胴体に掛けてばら撒き。その場を離脱する。ガンダムは俺を追撃する動きを見せたが、恐らく母艦に撤収命令を出されたのだろう。こちらを一度観た後。すぐさま母艦の方に飛んで行く。私もこのまま作戦継続は難しいと判断し。追っ手を警戒しつつ施設へと向かう…

強襲

「3番ゲートより零番機が出撃する。メカニックマンは退避急げエ!!」

司令部からの通達にあわただしく動く整備兵たち。それを横目に、俺は今回自分が乗る機体を眺めていた

「これがゲルググ用の強襲兵装か…」

通常のカタパルトでは接続できないため、専用のカタパルトアームを使って吊り上げられた斑緑のゲルググ。その姿は通常の物とかなり変わっていた。まず両肩には機体の頭部から腰辺りまでを覆えるサイズのシールドが取り付けられており、そのシールドの外側にはミサイルランチャーが3機ワンセットのものが2つずつ。計12本あり、内側にはザクマシンガン用のマガジンが一つずつ備わり。更に機体全体に追加装甲が施され、背部には大型のエンジンユニットと、その燃料タンクがむき出しの状態で一体化された大型のブースターユニットが取り付けられ、両足は正座した状態で、固定させるために太ももより下がドダイのような飛行ユニットに接続され。その飛行ユニットにはバズーカやマシンガンなどの各種武装がずらっと取り付けられていた

「またずいぶんとゴツイですね…」

隣で背部のブースターユニットや足の飛行ユニットの機体本体とのリンク確認を行っている整備兵にそう言うのと

「なんでも、元はルナターに対する単機での強襲ユニットとして開発された奴を、こっちで引き取って再設計したらいいですよ」

そうやって、整備兵は感慨深げな表情でをゲルググを眺めていた

「それでこんなゴツイ見た目に…でも、これだけの重装備に追加装甲。おまけに専用のシールドにブースターユニット。武装ラックも兼ねた補助飛行ユニットまで……こんな機体を採用したなんて話は聞かないし。計画段階で凍結されたブラックリスト（実行されることなく計画段階で凍結されたMS、MA及び新型艦船の事をひとくくりにしてそう呼んでいる）の奴じゃないんですか？」

そう聞くと、整備兵は苦笑しつつ、後ろ頭を掻きながら

「ま、事実その通りっすね。けどまあ、カタログスペック上はザンジバル級の最高速度の2.5倍は出せるそうなんで。これならソロモンまで30分もあればつけますよ」

「そっか…、ありがとう。じゃあ私は行くよ」

そう言つて整備兵の方を叩き、私は地面を蹴つてゲルググのコクピットへと飛ぶ。すると整備兵は姿勢を正して敬礼しながら

「ゴ」武運を」

と言つてくれた。その言葉から勇気を貰いつつ。私は彼に「必ず戻つて来るから」と言つてコクピット前で待機していた整備兵にキヤッチして貰い、そのままコクピットへと押し入れて貰う。私は有難うとその整備兵に礼を言つて。ハッチを閉める。既に機体は稼働体制に入つており、後は格納庫から射出されるのを待つだけだ。そう考えた矢先、司令所のオペレーターから通信が入る

「パイロット。状態はどうだ？」

「問題ありません」

「よろしい。ゲート開放、メカニックマンの回避確認。ブースターユニットの起動は射出3秒後に行う。以降、機体の射出タイミングはパイロットに一任する」

「了解。カイト・バジユール、ゲルググ・シユマイザー。出るぞ!!」

直後、カタパルトアームが一気に機体を戦闘速度まで加速させ。ゲートから出る直前でロックを解除。私の乗る機体が宇宙へと放り出され。ブースターユニットが起動。凄まじいGによつて体シートに食い込み、全身が押しつぶされるような感覚と痛みを前に絶叫しそうになる口を無理矢理歯を食いしばつて抑え込み、オートパイロットを起動してソロモンへと向かう

「良いかね、カイト君。今回の君の任務はソロモンへの救援だ」

出撃の1時間前、私は何時も通り博士からのブリーフィングを受けていた

「ルナツーより出撃した連邦艦隊は、ソロモンへと進路を取っている。貴官には連邦艦隊に対しての攪乱、及び遅滞戦闘を行ってもらおう。その後。しかる後にソロモンに後退しろ。ただし、今回戦闘が予想される宙域はこの施設からあまりにも離れ過ぎているため、この施設を発進後、ソロモンに帰還するまでの間は一切の通信は出来ない。…まあ、多少いつもと違うが。やることは同じだ、気楽にな」

そう言つて。博士はいつも通りこっちの事ちやんと考えて言つてんのか？。と、そう考えずにはいられない、何時も通り無責任オーラ満載の歪な笑顔をしてくれた

「…どう考えても単機でやる数じゃねエな」

あの時のブリーフィングでの言葉を思い返しながら。最大望遠で捉えた連邦艦隊を見つつ俺はそう溢した。宇宙要塞ソロモンを攻略

するための艦隊と言う話だったから。相当数の敵艦がいる事は想像できたが、まさかこれほどとは…

「連邦軍の国力は凄いな……」

と、素直な称賛の言葉を述べながら。俺は下の補助飛行ユニットに搭載された牽引用のワイヤーを使って運搬していた。このゲルググより少し大きいくらいのサイズの小惑星から牽引用のワイヤーを外すと、そのまま小惑星の後ろに回り、両手を小惑星につけ。一気にブースターユニットを最高速度にまで上げ

「射程まであと5…4…3…2…1…0」

0と同時にトリガーを引く。直後、両肩のシールドに取り付けられていたミサイルランチャー12発が全て発射され、ランチャーの発射機がシールドから外される。発射されたミサイルは真つ直ぐに連邦艦隊の前衛部隊へと真つ直ぐに突き進む

「さく。これでこの小惑星を衛星ミサイルかなんかだと思ってくれるかな？」

と、私は博打でもするような気持ちで連邦艦隊がどう対応するのかを眺めていた

「レーダーの誤認じゃないのか!？」

自室で休息を取っていた地球連邦軍第3艦隊の司令官であるワツケイン中佐は、突如としてブリッジの当直オペレーターから飛び込んできた敵襲の報に慌ててブリッジへと向かい。状況の把握と掌握のためにオペレーターに怒鳴る様に確認した

「い、いえー！。確かにミサイルです！。先ほど速度を上げて艦隊の正面から突入してくる小惑星から発射されました」

と、オペレーターは艦隊と小惑星の侵攻ルートを床のスクリーンに映し出す。確かに小惑星から複数のミサイルと思われる飛翔体が、艦隊の前衛部隊目掛けて直進してくる様子が映し出される。ワツケインはその事実には舌打ちしつつ、直ちに迎撃を命じる

「今すぐあのミサイルを撃ち落とせ！。それとあの小惑星も破壊するんだ！」

すぐさまワツケインの命令に従い、数席のサラミスがミサイルへと弾幕を張り、その後方から2隻のマゼランが少サラミスの少し前に出て小惑星に対してメガ粒子砲を使い砲撃を敢行。一瞬のうちに小惑星は爆散。飛来したミサイルも全て迎撃できた。脅威がさつとことに安堵したワツケインがほっと胸をなでおろした次の瞬間。オペレーターがそれを撃ち壊す次なる悲報をもたらした

「ッ!?!。MSらしき物！。先ほど破壊した小惑星より突如として出現!!」

その言葉に何!?!。と驚愕の声を上げながらも。ワツケインは素早く敵MSに関する報告をさせた。そのタイミングで先ほどミサイルと小惑星の対処に当たったサラミスとマゼランが砲撃を開始。ワツケインの体はオペレーターから砲撃を行うサラミス達へと向きなが

らも。オペレーターから必要な情報を聞き出していた

「何機だ!？」

「1機です!。1機ですが…は、速すぎます!!。高速艦並みのスピードでこちらに接近中。会敵まであと15秒!!」

オペレーターの言葉に反射的に戦闘配置の号令を出す

「総員第1種戦闘配置につけ、全艦対MS戦用意!。MS隊緊急発進
急げ!!」

しかしワッケインがその号令を出した次の瞬間。MSの迎撃を行っていたマゼラン2隻が爆散。続いて艦載砲クラスの大サイズの緑色のメガ粒子がその後方で弾幕を張っていたサラミスを全て薙ぎ払う。その光景にワッケインを含めたブリッジクルーは皆絶句し

「……………はっ!?。何をしている!。対空砲火はどうした!?!」

と、周りの物を叱咤する。それによって意識を取り戻したブリッジクルーたちは慌ててワッケインの命令を艦隊に伝達する、しかし、その時点で先ほど撃破されたサラミス達と合わせ、既に20隻近い艦艇が撃破され。独断で出撃したMS隊がたった1機のMSを相手に翻弄されていた

「あのMS隊を掩護するんだ!、全MS隊発進急げ!!」

翻弄されるMS隊を指さしながらワッケインが命令を下し、MS隊が順次発進を開し、更にワッケインのマゼラン以外の艦艇も遅れながら対空砲火を始める

「バラバラに撃つな!。10隻単位の小部隊に分かれ相互に連携しながら敵機に対して弾幕を張れ!!」

ワッケインの命令を受け。10隻単位の密集しつつ、相互に連携できる程度に艦隊は散開しはじめる。そして

「MS隊は敵を艦隊のクロスファイアポイントに追い込むんだ!」

ワッケインの命令通りにMS隊は犠牲を出しながらも、敵機を懸命に追い立て。そして

「敵機。艦隊のクロスファイアポイントに来ます!。後10秒!!」

オペレーターからの命令に思わず小さくガッツポーズを作りつつ

ワツケインは

「よし！。全艦敵機がクロスファイアポイントに入り次第一斉射だ
！」

と。号令を下す。そして、敵機がクロスファイアポイントに入ると同時に。文字通り雨の如き弾幕が放たれ。完全に回避する隙間もない中。ワツケインは敵機を撃破できると確信した。が

「…甘いな」

敵機は突如として取り出した量手持ちの大型のライフル：と言うより大砲のような物を取り出すと。そこから先程サラミス達を撃沈せしめた阿野メガ粒子を放ち。そのまま弾幕ごと艦隊を薙ぎ払う様に1回転する。

「ッ!?!。か、回避イ!?!」

ワツケインの悲鳴とも絶叫とも取れる命令が下されるよりも速く、操舵主は素早く舵を切つて艦に回避行動をとらせ、僅かに艦種が蒸発する程度の損害に留めて見せた。が、僚艦は回避しきれずにビームによつて艦を真っ二つにされ爆沈。その衝撃波によつて艦が大きく揺れ、ワツケインはその場に倒れる

「ぐわッ!?!」

「艦長!?!」

倒れるワツケインを心配し、何名かのクルーが持ち場を離れてワツケインを起こそうと駆けよつて来るが。ワツケインは一喝してそれを止め。持ち場に戻るよう命令した後。帽子を拾いつつ倒れた際に打った右側頭部を抑えつつ

オペレーターに

「か…艦隊の被害は?」

と聞く。直ちにオペレーターが情報を収集し。簡潔に報告してくれた

「先程の一撃で艦隊は半壊状態です。残った艦艇も3分の1近くが戦闘不能なしし航行不能状態となつてしまいました。出撃したMS隊は健在ですが、このままでは全滅かと…」

その報告に苦虫をかみつぶしたような表情を取りながら、ワツケイ

ンは

「後退命令の発行信号を上げろ。予備のMS隊を出して直俺に着かせる」

力なく発したワツケインの命令に、オペレーターは

「で、ですが……」

と、今一度再考するよう提案した。なぜならこのタイミングで交代すると言う事は。航行不能な状態の艦艇や。沈んだ船の乗組員たちを見捨てると言っているような物だったからだ。しかしワツケインはそれを拒否し

「このままではどの道全滅だ。ならばここは後退して後方の増援と合流後。しかる後負傷者や損傷艦の救援を行う。これは命令だ。こうしている間にも味方が死んでいる。早く命令を遂行したまえ」

最後の方は声が僅かに震えていた。それだけで。ワツケインがどれほど考えた末の苦渋の決断であったのかは簡単に理解できた。だからこそオペレーターはそれ以上何も言わず、他のクルーたちもまたオペレーターと同様何も言わずに命令を遂行し、発行信号を打ち上げ、後方に控えていた予備のMS隊が艦隊の直俺に着き、統一された軍隊とはとても呼べないが、それでもなんとか最低限の統率を保った状態で交代を開始し、敵機と戦うMS隊は観方の後退を支援する為、壁となるように展開。そのまま睨み合いの状態のままMS隊はじりじりと下がり。そして突如として敵機はMS隊に背を向けると。ソロモンの方向に向かって飛んで行ってしまった

「……」

突然逃げ去って行った敵機が飛んで行った方向をしばらく眺めた後。艦隊からの帰投命令を受け。MS隊は後退し。戦闘は終了した

「この後。生き残ったMSパイロットの1人がこう話したと言う」

「俺は何度もジオンのMSと戦ってきたが。あんな戦い方してる奴は

初めて見た。まるで機械みてえに無慈悲に仲間を殺して行った。まるで殺人機械《キリングマシン》だったぜ」

このパイロットの言葉から。あの敵機は殺人機械キリングマシンと呼ばれ。戦場で出会えば生きて帰れないと噂され。連邦パイロットたちに畏れられる事となる

ソロモンにて

「ふん、大したものではないか？。総帥が新たに創設した。例のモルモット部隊とやらは…」

執務室にて部下からの報告を受けたドズルは、渡された資料に一通り目を通したのち、それを無造作にデスクに投げ置くと。やや不満げに、皮肉を込めてそう言った

「確かにめまぐるしい戦果ではあります…ですがあの部隊は信用できません。先ほどお見せした資料に詳細を記載しておりますが、あのモルモット部隊唯一のパイロットであり、今回の戦果を叩きだしたあのデスピナと言うパイロットが存在すると言う証拠は出ませんでした。デスピナが存在していたと言う証拠を捏造したものは見つかりましたが…とにかく私としてはあの部隊は入港させず、そのまま要塞周辺の索敵班として使うべきだと。進言する物であります」

と、部下は確固たる意志を持ってドズルに進言するが、ドズルは僅かに考えるそぶりを見せたのち、部下に対して

「いや、曲がりなりにも兄貴がビッグ・ザムと共に送って来た増援だ。蔑ろに扱えばここをしのげて後々不都合があろう。ここはあくまでも普通に対応すべきだ」

と部下の進言をはっきりと却下し、その上で

「…しかしお前の報告の事もある。…よって、あのモルモット部隊には監視としてグリムリーパー隊を監視につかせることにする」

と、部下が納得はいかなくとも、最低限は部下の面子が保たれるよう折衷案を提示する。すると部下は

「ぐ、グリムリーパーを…ですか…？」

と、僅かに声を荒げる。その声には驚きだけではなく、ドズル中將が指揮する宇宙攻撃軍最強と呼び名の高いエース部隊を付けると言い出した事に対する疑問も含まれていた

「お前の報告が確かなら、最悪あの部隊を切る事も考えねばならんかな。そう言った配慮も含めた処置だ。…異論はないであろう？」

そうドズルが聞くと、部下は姿勢を正して首を一度だけ縦に振り

「…いえ。分かりました、直ちに手配します」

と、ドズルの命令に従い、一礼して部屋を出て行く。それを見送り、一人となった執務室で。ドズルは柄にもなく大きなため息を付いて、今自分が座っている皮張りの椅子に体をゆつくりと体を預けると。先ほどの直接会談の中で、兄が言ったあの言葉を思い出していた

「お前には私が持つ部隊の中で最も使えるものを送る。それとビッグ・ザムで5個師団程度の戦力にはなる筈だ。…なあ、ドズル。お前が支えてくれればジオンは勝てる。…頼んだぞ?」

「……」

あの時兄が発した。何時もの兄なら決して口にしないであろう発言、その裏にある真意をずっと考えていた、が、しかし…

「…ふ、分かる訳がないか……」

当たり前だ。兄貴は間違いなく天才だ。俺みたいな石頭の猪武者なんか知恵を絞って分かる程度の発言などするわけがない

「…だが…俺はこのまま捨て石などにはならんからな、兄貴…」

そう言つて、ドズルは執務室から見える宇宙へと椅子の向きを帰ると、眼前に広がる宇宙にちりばめられた星々を掴む様に手を伸ばし「ようやく手に入れたミネバのためにも、なつてやるものかよ…」と、力強くそう宣言したのであった

「中佐…」

見たことも無い少女が俺の名前を読んでいる

「隊長…」

見たことも無い青年が俺の名前を呼んでいる

「中佐…」

見たことも無い男が俺の名前を読んでいる

お前達は…誰だ？

しかし彼らは何も答えてくれない。…でも、なぜだろう…どうしてこんなにも胸が張り裂けそうになるんだろうか…？、心が傷むのだろうか…？

何故…何故私はお前達に会いたいと思っっているんだ!?

そう口にしようとするも。激しい頭痛に襲われ、私は低いうめき声をあげ。頭を抱えて膝から崩れ落ちる

「ぐうアアアアアアア!?!…あ…頭が…割れる…!」

そうやってその場に私がうずくまると。3人はゆっくりと振り返り、歩きはじめる。私は

「ま、待ってくれ!」

慌てて追いかけてようとするも、激しい頭痛と胸の痛みに立ち上がる
ことが出来ず、その場に手を付いてしまう。そうしている間にも3人
はどんどん私を置いて先に進んで行く

「待ってくれエエエエエ」
———
「!!」

体透けるように消え始めた3人に手を伸ばしながらそう叫ぶ。そ
して気がつくのとゲルググのcockピットの中にいた

「……………あ…え？」

理解が追いつかず、辺りをきよろきよろと見渡す。すると1人でに
cockピットハッチが開き、一人の整備兵がそこから顔をのぞかせなが
ら

「大佐！、またパイロットスーツから着替えもしないでこんな所で寝
て…風邪引いちやいますよ!」

と、そう私に怒る整備兵を見て、ようやく自分が今の夢を見ていた
のだと理解し、私は安堵した。しかし整備兵が

「ん？…何で泣いてるんですか？」

と聞いて来た。そこで再び気づく、自分の顔が流した涙でぐしゃぐ
しゃになってる事に、しかも泣きすぎてパイロットスーツの襟とか
胸元まで濡れて言う上、あの夢の性で全身ぐっしりと汗をかいたせ
いでパイロットスーツの中がサウナ&べちやべちやで大変気持ち
悪い。私は苦笑しながら腰のポケットから取り出したハンカチで顔
を拭きつつ

「ちよつと…夢を見てたみたいで。…多分そのせいだと思う…」

そう言つて、悲しげでありながら、どこか懐かしいような、寂しい
ような顔をしながら答える。それに対し整備兵は

「そうですねか…お引止めしてしまいすみません」

優しいな笑みを浮かべた整備兵hさ、そう言つて隣の予備機に向
かって飛んで行く。私は

「…あんな奴乗ってたっけ？」

と呟きながら、今度こそ待機室に向かって飛んで行く

あの後待機室でシャワーを浴びた私は、制服に着替えて自室に戻ろうとしたところを招集され、現在はここドズル・ザビのいる執務室に来ていた

「ジオン公国総帥府直轄 国立技術研究所所属 第1MS実験隊、旗艦「ファルシオン」艦長の「ディーラ・ディ・ビスコッテイ」大尉であります」

直立不動のまま敬礼するビスコッテイ大尉に続いて、私も同じように所属と階級を述べた後に敬礼する

「同じく、第1MS実験隊所属の「ハルフアー・フォン・デスピナ」大佐であります」

ドズルは私たち二人の経歴が書かれた書類に目を通しながら、楽しんでくれ。と言って来る。それに「はっ」

と答えて敬礼をとく、ドズルは一旦書類を机に置くと、その強面とかそんなレベルで済まされない野獣のような顔に、見ているだけでこちらが冷や汗をかいてしまうその高圧的な目が、まるで私の事を見定めているかのように、私とビスコッテイ大尉の2人の眼を交互に見つめ、そして…

「…ふん、貴様はともかく、デスピナ大佐、お前は戦士の眼をしているな…」

と、ビスコッティ大尉に対して落胆したかのようなため息を付いたドズル閣下は、私の眼を真つ直ぐに見ながらそう言ってくる、それに私は

「ありがとうございます」

と返す。それにふん、と鼻を鳴らしたドズルは、彼の側で控えていた副官に合図を送る、それを受け、副官はビスコッティ大尉にそのままで厚みの無い茶封筒を渡してくる。それをビスコッティ大尉はしっかりと両手で持つて受け取る。そして

「兄貴…総帥からはお前達を好きに使っていいと言われてる。近々ここに敵の大部隊が接近中だ。お前達にはサイド4方面の第11ブロックの防衛隊として配属される。…入れ！」

と、一旦話を切ったドズル中尉のしつかりとした声に続いて執務室の扉が開き、顔の左半分にある火傷の痕に左目が義眼、そして首全体を隠してしまうほどのお気差の機械を付けた銀髪の士官が入ってくる

「失礼します…」

機械音声でそう言つて敬礼する男に、ドズルは自慢げな態度を取りつつ

「第11ブロックの防衛を担う「グリムリーパー隊」の隊長を務める

「ヘルムート・ホフマン」大佐だ」

そうドズルに紹介されたホフマン大佐は

「閣下よりご紹介に預かりました、ヘルムート・ホフマン大佐であります」

と、敬礼する。それに我々も

「デイーラ・デイ・ビスコッティ大尉であります」

「ハルフアー・フォン・デスピナ」大佐であります」

と階級と名前程度ではあるが、挨拶をして敬礼する

「貴様ら第1MS実験隊には、このグリムリーパー隊と共に第11ブロックを防衛して貰う。以上だ、下がって良いぞ」

と、ドズルが言うので、私たちはそれに

「はっ、失礼します」

と言って敬礼したのち、回れ右してさっさと執務室を後にする。それを見送ったホフマン大佐は

「よろしいのですか、あのような部隊を要衝に配置して…」

そう質問するホフマンに、ドズルはふん、と鼻を鳴らしつつ、にやりと笑うと

「その為のお前達だ、期待しているぞ」

そう言つて、彼はホフマンにも下がる様に手を振る。それに対しホフマンは

「お任せください」

と云って敬礼し、そのまま執務室を後にする

これから約4時間半後、連邦軍の艦隊がソロモンの第3戦闘ライン上を突破し、ドズル・ザビ貴下の宇宙攻撃軍との間で戦端が開かれる。後の世にいうソロモン攻略戦の始まりである

ソロモンの戦い 前編

漆黒の宇宙を彩る無数の星の光と、それに照らされる無数の、……かつてサイド4と呼ばれていた墓標のようにたたずむコロニーの残骸をゲルググのコクピットから眺めていた

「デスピナ大佐」

私のゲルググの左肩に乗機であるリックドムの手を置き、直接回線で話しかけてくるホフマンに。私は

「何でしょう？」

と淡白に答える。ホフマンの瞳は明らかにこちらを警戒していた。こちらが不穏な動きを見せれば躊躇なく撃ち殺すと言わんばかりのすこみがあつた

「いや、作戦前に雑談をしようとおもつてな、他に他意はない」

そう切り出すホフマンに

「そう言うことでしたら、幾らでもお付き合いしますよ。大佐」

と、私は笑顔で返す

「感謝する。早速なのだが、君は今の所属になる前は何処の部隊に所属していたんだ？」

「ん〜申し訳ない。私は記憶喪失でして。ここに入る以前のことは何も覚えていないのですよ……」

と、後ろ頭をかきつつ、私はなんでもないと口をつた風で答える。それにホフマンは一瞬だけ眉毛を寄せ、こちらを明らかに怪しむ……と言うよりは疑いの目をこちらに向けながら、わずかに眉間にしわを寄せつつ

「ではいったい何故この部隊に配属……いやそれ以前にどうやって軍に入隊したのだ？」

と聞いてくる。私は

「博士が私を拾ってくれた。病院のベットの上で何をするわけでもなく、ただひたすら窓から見えるズム・シティの景色を眺める毎日を送る私の元に来て。あの人はこういった」

「私が、君に生きる意味を与えよう。祝福を与え、君のその停止した人生を脈動させてあげよう。さあ…」

「おいで」

「っ…!」

ふと、あのとときの記憶が頭をよぎり、私の中で何かがぎしりと悲鳴を上げる。私は苦痛に顔を歪ませ、右手で頭を抑える

「どうかしたか?」

ホフマンの声にだ、大丈夫です…と返し

「すみません、少し気分が優れないので、一旦回線を切ります」

と伝え、デスピナは

「待て、その状態で戦闘は無理だ、私が引っ張っていくから、一度艦に戻ろう…」

直後、コクピット内に高熱原体の接近と、それがどの方向から向かってくるかを教える矢印がスクリーンに表示され。計画のアラームが鳴り響く

「敵襲です!」

私は素早く操縦桿を握り、開強いて来たミサイルを迎撃しつつ敵艦隊からの砲撃であろうまるで流星群が如きメガ粒子砲の雨の範囲を即座に読み取り、天頂方向に機体を急旋回させると同時にホフマンのリックドムの腕を掴んで最高速まで一気に加速して逃げる。それにグリムリーパー隊の他の機体も続き、グリムリーパーの母艦であるザンジバル級の「ラムチャット」も回避行動に入る

「このまま散開する!、話はまた後でしよう!」

と、左手で敬礼した後、じゃあな、とハンドサインをしてから敵艦隊に向かって突っ込んでいく

「なっ!、おい待て!?!」

デスピナがこちらを止めようとするも、既に私は敵艦隊へと肉迫しており。また連邦艦隊から発進した敵の突撃艇を止めるよう司令部から指示が来たホフマンは私の方を睨み付けると、部下と共に迎撃に向かう

「パプリク戦闘艇の消耗率45パーセント、ビーム攪乱膜の散布が完了しました」

オペレーターからの報告にワツケインは頷くと、艦隊に散開しつつ前進するように指示を出す

「さて…後は何処まで注意を惹きつけられるか…」

本命であるサイド1の連合艦隊とソーラーシステムの展開完了まであと30分。それまで要塞の目をこちらに惹きつけ続けなければならぬ

「…」

艦長席に座るワツケインは、自然と肘置きを掴む手に力が込められ、緊張からかその額には汗がにじんでいた。もしシステムの展開前に敵に気づかれれば全てが無駄になってしまう。焦りと不安。自分

にこなせるのか、と言う不安に押しつぶされそうになりながら、ワイアットは味方を鼓舞し、地震が最適と思える命令を下す

一方ソロモン要塞内の指令室に置いてても、ドズル・ザビは各方面から贈られて来る報告を聞きながら

「ビーム攪乱幕か…連邦め、中々姑息な手を使ってくるではないか」

と、不敵な笑みを浮かべつつ要塞防衛隊と要塞の各防衛セクションに対してミサイルを主体としての迎撃を命じつつ、防衛隊にはビーム攪乱膜の散布範囲外まで移動するように指示を出す

「第7師団に…援軍を求められては？」

参謀総長がコーヒーを手渡しながらそう提案して来る。ドズルはそれを受け取り、コーヒーを飲みながらメインコンソールに表示された戦況MAPを見ながら

「キシリアにか？、この程度の事で…国中の物笑いの種になるわ！」

と、参謀総長の提案を一蹴しながらも、ドズルの心中は不安だった。責めてきた敵は、ルナツーを出発した連邦艦隊の総に比べて明らかに少ないのだ。更に艦隊の陣形や戦い方がティアンムとはまるで違う、つまりティアンムは今この戦場にいないのだ

「(一体ティアンムの主力艦隊は何処に消えたのだ…?)」

心中に渦巻く不安を取り除くため、ドズルは具あらん隊を始めとして搜索部隊を防衛隊から抽出し、ソロモン周辺の宙域をしらみつぶしに搜索するように命令した

そして部隊は再び前線へ。ソロモンとサイド4との間で両軍は正面からぶつかり、初めはミサイルによる小競り合いだった戦いは、

ビーム攪乱膜の濃度が減衰すると同時に艦砲による砲撃戦に移行していた。おびただしい量の紫がかったピンクと黄色の光が両軍の間を行きかい、敵を蒸発させる

「貰ったあー！」

その激戦の中を縦横無尽に駆け回り。私はマゼラン級のブリッジとエンジンにバズーカを撃ち込んで撃破し、そのまま止まることなく敵艦隊の中を突き進む。戦端が開かれてから20分が経過したが、今だに連邦軍は前に出ようとはせず、まるで混戦を避けるかのよう……いや、まるで要塞を攻略する動きが無いかのような攻撃を続けていた「囷か……だとすれば本命は……」

十中八九サイド1辺りから来るかな？、と適当に当たりをつけつつ、次はどのあたりの敵を仕留めようか考えていたその時、ようやく連邦艦隊がMSの発艦を開始する。私は舌なめずりしつつヘルメットのバイザーを上げ

「ようやくか……!?!」

と、歓喜の声を上げて敵MSの中に突っこむ。艦隊の猛烈な弾幕を潜り抜け、高速艦並みの速度で突き進んでくるゲルググに発艦した直後のGM達は隊列を乱しながらも各個に迎撃を始め

「いやっふう~~~~~!」

私のゲルググに蹂躪される。まずゲルググの突進によって完全に分断されたMS隊にバズーカを撃ち込んで敵機を何機か撃破しつつ散らせ、そのまま散らしたGMにヒートホークを叩き込んでそのまま引っぱり、手近なサラミスブリッジに叩きこんでそのまま爆散させ、敵艦を盾にしながら両手のMP43をばら撒いて確実に敵機を撃破しつつ両肩のミサイルランチャーで敵艦のエンジンやブリッジだけを破壊していく

「弾切れエー！」

弾切れになったMP43をGMのコクピットに叩き付け、ユニットから引き抜いたメガビームランチャーを引き抜き、MSごと敵を10隻ほど薙ぎ払う。これにより敵の戦線に小さな穴が開いたので、これでは戦線にほころびの出来た連邦艦隊を圧迫してすりつぶすだ

け…

と、そこまで考えたところでメガビームランチャーに2発のビームが直撃する

「ッ!?!」

反射的に電力供給用のケーブルを切り離し、メガビームランチャーを投げ捨てながら、シールドを構える。直後、メガビームランチャーの被弾部からスパークが連続して発生し、第爆発を起こす

「ぐづうう…!?!」

爆発によって発生した衝撃波に機体を激しく揺さぶられながら。私は必死に機体を立て直しつつ、敵を探す。そして私からみて南南東の方角、下60度の辺りからこちらに急接近してくる白を基調としたカラフルなMS…間違いはない

「ガンダムう…!?!」

歓喜と憎悪に顔を歪ませ、私は一旦ガンダムから逃げつつユニットからジャイアント・バズとMMP80を引き抜き、背中のアタッチメントに装着、そして両手にゲルググJも使用するビームマシンガンを引き抜き。ユニットをパージして私を追いかけてくるガンダムにぶつけ。それをスナイパーモードに変え、ユニットごと撃ち抜く。が、ガンダムは咄嗟にユニットを押し出しつつバーニアを全開にして後ろに飛び、私のゲルググが放ったビームを済んでのところ回避したのだ、そのまま私に反撃のビームライフルを撃ちながら迫るガンダムに思わず

「バケモンかよ!?!」

と、罵倒しつつマシンガンモードに変えた左手のビームマシンガンをばら撒きつつ、腰のアタッチメントに装着して、左の二の腕下からビームサーベルを出して、迫り来るガンダムに向かって振り下ろす

「でやあー」

ガンダムは紙一重でサーベルを躲し、そのままシールドを私に叩きつけてくる。それに私はカウンターで叩き付けて来たシールドへサーベルを突き刺すも、ガンダムは直前でシールドを持つ手を持ちかえつつ横にそれる事で僅かに脇腹を掠らせる程度の損傷で回避し、私

はツシールドを延ばしきった状態で受け止めたせいで左腕が裂けるように潰される

「クソが!？」

そのまま追撃を淹れようとするガンダムの頭部に目掛けてバルカン砲を放つて牽制する、すると運よくガンダムの左目に命中し、ガンダムの動きが一瞬鈍る

「貰った!？」

その隙を逃さず私はまだ肘関節まではいかれていなかった潰れた左腕全体を使ってガンダムの頭部にヘッドロックを掛けるようにしてくつくと、ガンダムのコクピットコアがあるであろう胴体の中央にビームマシンガンの銃口を向ける

「勝った!？」

勝利を確信した私がゲスな笑みを浮かべた次の瞬間。ソロモンの一角。丁度サイド1に面する部分に巨大な光の弾が現れる

「なっ、何だ!？」

私が驚愕と共に光の方へと視線を逸らしたその時

「ソロモンが…焼かれている…!？」

と、まだ若い少年の声が聞こえてきた。私は驚いてガンダムの方へと視線を戻す。まさか…

「子どもが操縦しているのか…!？」

連邦、ジオン共に兵士不足に悩まされているらしいと言うのは良く知っているが…まさかこんな年端もいらない子供を戦場に連れ出していると言うのか…!?!、連邦のクズ共め…!

「だったら…どうだっていうんですか!？」

そう言つて、ガンダムはがむしゃらに体を動かして私の拘束から脱出し、私は振り回され、そのまま吹き飛ばされた背で体勢を崩して吹き飛ばされながらも、ビームマシンガンを躊躇なくガンダムへと放つ。が、ガンダムは容易くそれを回避すると、ソロモンへ向かって飛んで行く

「…」

私は心中に渦巻く感覚に不快感を感じながら期待の破損状況を

チエックする。先ほどガンダムに暴れられた際の損傷で左腕の方と肘の関節、そして胴体の駆動系に深刻なダメージが出ていた。いつ壊れてもおかしくないレベルだ。私は大きいため息を吐きながらファルシオンが待つア・バオア・クーに面するソロモンの第12ゲートに停泊中のファルシオン野本へと機体を飛ばす

ソロモンの戦い 後編

「予備で出るぞ！、武装はコイツと同じ奴を積んでくれ！。それとシールドとユニットはつけなぬていい！、またガンダムみたいな化物と出くわした時に邪魔になる！」

ファルシオンの格納庫にて、ゲルググから出てきた私は、整備班庁に今自分が出て北ゲルググを親指で指しつつそう命令し、整備兵から手渡された経口補水液を一気に飲みほす

「大佐、ビスコッティ大尉が至急ブリッジに来て欲しいとの事です」

と、整備兵の1人が私にそう言うってくる。私は整備兵の肩を叩きながら

「じゃあお前が代わりに出といてくれ」

と、いって、予備機の方に向かって床を蹴って飛ぶ。整備兵はた、大佐あ!。と素っ頓狂な声を上げて私を止めようと手を伸ばすも、届く事は無くそのまま私は予備機のゲルググに乗り込み、カタパルトデッキへ向かって機体を歩かせる。整備兵はそのまま手すりにもたれかかりながら

「どうしよう…ビスコッティ大尉に殺されちゃう…」

と、情けない声を出しつつ。私が出撃して行く様子を眺めていた

連邦軍の新兵器によりソロモン防衛隊はその戦力の過半を喪失、指揮系統は崩壊した。これを受けドズル中將はソロモンの放棄と残存戦力のア・バオア・クーへの撤退を決定。ドズル中將自らビッグ・ザムに乗り込み、撤退する味方の時間を稼ぐために連邦軍主力に対して特攻を開始。これに私を含む一部のMS隊が追従した

「くそっ！、数が多すぎる…!?!、うわあああああああああ!?!」

GMに群がられたザクが撃破され、パイロットの断末魔の悲鳴が回線越しにこちらに伝わってくる。私は舌打ちしながら

「とにかくバラバラになるな！、最低でも3機以上のエレメントを組んでドズル閣下を掩護するんだ！」

群がるGMを両手に持ったビームマシンガンで迎撃しつつ、ビグ・ザムの側面にまわりこもうとするMSや、体当たりを敢行して来る敵艦を他のMSと共に迎撃してドズル閣下を掩護する中、連邦軍の主力艦隊がビグ・ザムに対して砲撃を始め、敵味方共にビグ・ザムの周囲に近づけなくなる。が

「ガハハハッ！、このビグ・ザム、長距離ビームなどどうと言う事は無い！。…道連れに一人でも多く、地獄に引きずり込んでくれるわ！！」

そこから先はビグ・ザムによる蹂躪が始まった。艦砲による攻撃はまるで効果が無く、私を始めとしたMSに守られ接近する事も出来ず。ビグ・ザムのメガ粒子砲によりティアンム指揮下の第2連合艦隊は成す術も無く一隻、また一隻と沈められていった。そしてティアンムの座乗艦であるタイタンもドズル閣下の手により沈められ、指揮系統は崩壊、連邦軍は半ば潰走状態となりながら、それでも健気にビグ・ザムに攻撃を続ける

「ハハハッハッハッハッハッ！、観たか連邦め！、ビグ・ザムが量産の暁には連邦など、あつという間に叩いて見せるわ！」

連邦艦隊の残骸の中で高笑いするドズル。その時俺らはこのまま行けば連邦を撤退まで追い込めるのではないか。ソロモンを守るのではないか。そんな楽観的な期待を抱いていた私たちを、現実に連れ戻す凶報が、回線に飛び込んできた

「が、ガンダムだ！。ガンダムがこっちに来てるぞ!？」

直後、見方がの反応が3つ、ほとんど同タイミングで消え。新たにソロモンの方角から4機の敵の反応が急速にこちらに接近してくる。振り返ればガンダムを筆頭に戦闘機が1機と支援機が2機。それが味方を蹴散らしながらこちらに突き進んでくる。私は楽観的な思考に陥りかけていた自分を罵りながら

「ガンダムは俺が抑える。お前らは支援機と戦闘機を止めろ!!。ドズル閣下をなんとしてでも御守りするんだ!!」

と、残った味方に指示しつつ。

左手のビームマシンガンを臀部のアタッチメントに装着し、左の二の腕下から取り出したビームサーベルを構え、右手のビームマシンガンを乱射しつつガンダムに突貫する。振り上げたビームサーベルをガンダムへと振り下ろし、ガンダムも背中中のランドセルから左手で抜き取ったビームサーベルで防ぎ、空いた右腕でビームマシンガンをガンダムの左腕に放とうとしたのをガンダムはシールドを腕に叩き付けて逸らさせる

「チッー」

一旦距離を取るためにガンダムを蹴飛ばし、体勢が崩れた隙を狙ってビームマシンガンを放つ。それをガンダムは全速力で飛ぶと出足に掠らせる程度にとどめる

「バケモンかよ!?!」

どんなスーツ来たたらあんな急加速のGに耐えられるんだ!?!。と続けながらビームマシンガンを放つも、ガンダムはまるでどこで打たれるのかが分かっているかのように楽々と此方の射撃を回避し、そのままシールドを構えてこちらに突っ込んでくる

「一直線ならー」

ビームマシンガンを腰だめで構えた直後、ガンダムが投擲したビームサーベルがビームマシンガンに突き刺さる

「んなにい!?!」

素っ頓狂な声を上げつつガンダムへビームマシンガンを投げつける。直後、ビームマシンガンが爆発し、爆炎の中からガンダムのシールドが投げ込まれる。私は右手にもビームサーベルを持ちつつそれを回避し、続けざまに両手にサーベルを構えたガンダムが左手のサーベルで突きを放ってくるのを右手のサーベルを受け止め、続けざまに胴体を狙って放たれた右手のサーベルの横薙ぎの一撃を左手のサーベルで上から叩き付けるようにして防ぎ、更にガンダムの体勢をやや前のめりに崩す

「取る！」

そのままガンダム左手のサーベルを押しつけるようにして弾き、逆手に持ち替えたサーベルをダガーのように構えて振り下ろそうとしたところで敵の戦闘機のミサイルのバルカン砲が振り上げた私の右腕を穴だらけにして飛び去って行く。その瞬間を逃さずガンダムが体勢を立て直しつつゲルググのどてっばらを全力で蹴り上げる。衝撃で機体にガンダムの足裏の形がはつきりと出来る程に凹み。そのままコクピット内をシェイク去れたかのごとき勢いで振り回されつつ私は吹き飛ばされる

「ぬぐあああああああああああああああ!？」

オートパイロットが作動し、機体を停止させる。私はヘルメットのバイザーを上げる事も出来ずにいのなかの物をすべて吐き出しながら。震える手で何とかバイザーを上げてヘルメット内に溜まった吐瀉物をコクピットの中に出すと。再びバイザーを閉めて、とにかく気を落ち着かせようと深呼吸を取ろうとするも、喘息のように荒い呼吸のまま指一つ動かす事の出来ない私にガンダムは追撃をかけようとするも戦闘機に呼び止められたらしく。そのままビッグ・ザムの方へ飛んで行く

「ぐう…おえ…」

嘔吐しながらも何とか操縦桿を握った私は震える手で機体の破損状況をチェックし、まだ戦闘が可能であることを把握すると同時にドズルを助ける為にビッグ・ザムの方へと飛ぶ

「ど、ドズル閣下…」

友軍反応を頼りにドズルを探す中。ようやくドズルを見つける事ができた。が、私がドズル閣下を見つけた時には、既に敵の戦闘機がビッグ・ザムの対空ミサイルを潜り抜け、底面のスラスタに向かつて特攻する直前だった

「ドズル閣下!？」

そのまま戦闘機はビッグ・ザムに体当たりし、凄まじい爆炎がビッグ・ザムを押し上げる。反射的にドズルの名を叫びながらビッグ・ザムの元へ向かうも、ガンダムが両手に構えたビームサーベルを頭上に構え、

ビグ・ザムの頭部目掛けて振り下ろしていた

「ドズル閣下アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

凄まじいスパークと共にビグ・ザムの頭部にサーベルの刀身が3分の2ほども切りこまれ。そのまま止めとばかりに両手で逆手にサーベルを構え。突き刺そうとしたガンダムへ残る左腕に構えたビームマシンガンを乱射しつつ、そのまま体当たりする勢いでガンダムへ突っ込む。ガンダムはビグ・ザムへ止めをさせないままビグ・ザムからジャンプし。私はビグ・ザムとガンダムとの間に飛び込む、そのままガンダムへ穴だらけになった右腕で殴りかかり、ガンダムは左手に持ち替えたビームサーベルで右腕を肘のあたりから綺麗に切り飛ばし、私の体勢が大きく右側に仰け反るように崩れ。その隙を逃さず両手にしっかりと握ったサーベルを私へと突き出す

「…(ニツ)」

そのタイミングでガンダムの頭にビームマシンガンを撃ちつつ期待の右側のバーニアを全て使って回避行動を取り、胸ではなく右肩にサーベルが命中する。そのままガンダムを蹴り飛ばし。ビームマシンガンをガンダムへ向け

「下れ、お互い此処で死にたくはないだろう？」

と、南極条約で定められた救難チャンネルを開いてガンダムに呼びかける。それを聞いたガンダムは後退し。私はビグ・ザムへ向かって飛ぶ。見れば生き残りのリックドムとザクが護衛をしながら、一機のザクのパイロットがコクピットからドズルを連れ出すところだった

「閣下！、ご無事でしたか」

バーニアでドズルを飛ばさないように気を付けつつビグ・ザムの側に機体を止まらせる。ドズルは私の方へと顔を向けながら

「貴官のおかげで命拾いが出来た。礼を言う」

と、感謝の言葉を送るドズルに

「ジオン軍人として当然のことをしたままでです」

と、ビームマシンガンをその場に置いて、ゲルググの残る右腕で敬礼し、私は続けて

「早く逃げましょう。今ならまだ連邦の指揮系統が回復していないは

「ですから、後退中の友軍と合流できるはずですよ」

と、進言し、ドズルも頷き

「そうだな、急ぐとするか」

と、ため息交じりに言いつつザクのパイロットに先導され、そのままザクに乗り込み。私を先頭に左右にリック・ドムがつく形でドズルの乗るザクを掩護しつつ。ア・バオア・クー方面へ後退を始めた味方への合流を図るのであった

敗走

「ドズル閣下が戻られたぞ！」

屈辱の敗北と一部の連邦艦隊からの追撃を受けながら撤退する不安と焦燥感により絶望に包まれていたソロモン防衛隊は、ドズル・ザビの帰還と言う吉報によって息を吹き返した

「ふん、俺が少し足りないだけでその様とはな…何を狼狽える事がある！。この俺が指揮を執るのだ、拭抜けている暇などありはしないぞ！？」

そしてドズル・ザビ指揮の元、秩序と指揮を回復させたソロモン防衛隊は、逃げる敵を一方的に追撃すると言う勝者の立場に完全に油断しきっていた連邦艦隊に反転攻勢を掛ける

「続けえ!!」

アナベル・ガトー大尉指揮の元、防衛隊の中から稼働可能な機体のみをかき集めて結成された決死隊は、想定していなかった敵のもう反抗を前に足並みを崩し、半ば烏合の衆と化した追撃部隊を蹂躪した。そもそもティアナムを始めとした主だった第2連合艦隊の幕僚は全てビッグ・ザムとドズルの活躍により全員戦死し、またサイド4方面の艦隊もワッケイン以下主だった指揮官のほとんどが戦死していた。つまり連邦軍の頭は完全になくなっていたのである。おまけに両艦隊とも戦力の多くを喪失し、ティアナム艦隊に至ってはビッグ・ザムの特攻による蹂躪を受けてパニック状態となっており、本来であれば追撃など出来る訳が無いのだ。しかし一部の部隊はジオン憎し、あるいは手柄などのために撤退するソロモン防衛隊に対してバラバラに追撃を開始したのだ。

「落ちろオ!!」

急遽乗り換えたりクックドムに乗り換えた私は、左手に持ったMMP80でGMの胴体に3発撃ちこんでパイロットだけを殺し、そのまま頭を掴んで突出したサラミスのブリッジ下に叩き付け、そのままヒートサーベルでGMごとサラミスに突き刺し、そのままサラミスから離れる。サラミスはメインブロックへ突き刺されたサーベルのダメー

ジと、GMの爆発を食らい爆沈。そのままジャイアントバズでキツチリ4発で敵艦を2隻仕留め。続けざまに最後の1発をマゼランのエンジン部に撃ち込み破壊し、そのまま対空砲火をマゼランの左側面から天頂方向、そして右側面から艦艇部にまわりこむようにして躲しつつMMP80の玉が尽きるまでばら撒いて撃破し、右肩のシールドバックラー裏のマガジンを取りだして空になったマガジンと交換しつつバズを背中にしまい、臀部のアタッチメントから予備のマシニングを取り出し構える。既に完全に攻守の入れ替わった連邦の追撃部隊は駆逐され。ドズル閣下からの撤退命令を受け。味方は我さきに母艦へと撤退を始め。私もファルシオンに撤退する

ソロモン攻略戦の結果は、宇宙要塞ソロモンの攻略と言う戦略目標を達成した連邦軍であったが、戦術面では想定をはるかに上回る量の損害をだし、本来出すはずは無かったルナツーの駐留艦隊に出撃を命じる

一方ズム・シテイでは、ギレン・ザビが副官からの報告を聞きつつ「…まさかドズルが生き残るとはな」

と、内心想定外の事態に若干不機嫌になっていた

「はい、既にドズル閣下以下、宇宙攻撃軍の残存兵力はア・バオア・クーに入港し。ドズル閣下とそのご家族がサイド3へ移動中です」

と、副官のいつも通りの丁寧且つ端的な報告を受け、ギレンは右手で右のこめかみ僅かに掻きつつ

「ドズルを出迎える準備をしておけ、それと父上にも報告をせねばならん、謁見の準備を頼む」

と、副官に命じて下がらせると、ギレンはゆっくりと立ち上がり、ある施設との直接回線を開く

「お呼びですか総帥」

直接回線に応じたのはザクスだった。ギレンは

「ザクス、お前のモルモットは正史とはかけ離れた結果を生んでしまった、その結果がどこに波及するかは最早起こってみなければわからない。その意味が分からん貴様ではあるまいな？」

と、強い口調でザクスを試すようにそう言い放つギレンに、ザクスは

「はっ、全ては処置を完璧にこなせていなかった私の責任ですどのような処罰でも甘んじて……」

と、そこまで言いかけたザクスを遮り、ギレンは

「ザクス、私は別にお前を責める為にこうして貴重な時間を無駄にしている訳では無い。ノーマの調整はできたのか？」

と、ザクスに尋ねる。ザクスはハンカチで額の汗をぬぐいつつ

「も、もうしわけありません……まだ人格の強制が完全には出来ておらず……」

と、申し訳なきさそうにうつむくザクスに明らかに不機嫌そうに眉間にしわを寄せ。ギレンは

「何としても一年戦争中に調整を完了させる。いいな？」

ギレンの発言に、ザクスを姿勢をただし

「必ずやー」

と力強く応える。そのまま回線を切ったギレンは、ズム・シテイの景色を見ながら

「面白くなって来たではないか」

と、不敵に笑うのであった

宇宙要塞ア・バオア・クー前編

「ソロモン攻略戦から僅か2日後、ルナツィーからの増援及びジャブローから打ち上げられたレベル將軍率いる主力艦隊が第2連合艦隊と合流。幾度かの妨害を受けるも、進撃を中止する事無くグラナダを無視してア・バオア・クーへ突き進み。そして…」

「宇宙世紀0079 12月30日21:00。ギレン・ザビは連邦との和平のために出向したグレート・デギンが合流した連邦軍艦隊の3つの内の一つがレベル率いる主力艦隊であると判断。おおむねチャージさせておいたソーラ・レイを使用し、連邦の主六艦隊と、主だった指揮官をデギンもろとも消滅させた。これにより連邦は戦力の3割と指揮系統を消失。先のソロモン攻略戦でレベルの代わりに指揮をとれるレベルの階級を持つ軍人は軒並み死んでいたため。残った若い指揮官や無能な老害では混乱しきつた連邦艦隊を統制できる訳も無く、この隙を突いてジオン軍はサイド3、及び本国から出でるだけの戦力を抽出し、限界までア・バオア・クーの防備を固め…」

「宇宙世紀0079 12月31日5:00」

……ユニットを外し、その代わりに外付けのブースターを3本、左右斜め下方向に2本、上に1本背部に取り付けられており。両手にジャイアントバズと、本来肩部に装備すべき大型シールドを装備し、そのシールドにはグフ・カスタムのシールド・ガトリングと同じガトリング砲が2丁ずつ計4丁と、シールド前面に4本ずつ計8本のグレネードランチャーが装備され、更に背中にはブースターの邪魔にならないようランドセルの左右に2丁のMMP80を装備し、腰の右側のアタッチメントにはヒートサーベル、左側にはMMP80を装備し、臀部にはビームマシンガンを装備すると言うガチガチの重装備をしたゲルググに登場し、Nフィールドの最前線に立っていた

「……」

スーツ越しに全身の肌をピリピリと焦がす感覚初めての感覚に、な

ぜか懐かしさを感じながら。私は周囲にたたずむゲルググやリツクドムへと視線を向ける。乗っているのは殆ど学徒動員で召集された学徒兵や、訓練が完了したばかりの新兵ばかりで、その動きは見ているこつちが冷や冷やしてしまうほどに危なっかしく。またどこか戦場であると言う雰囲気からは大きく外れた…まるでピクニックにも似た雰囲気があった

「…ままならん、こんな子供たちまで戦場に駆り立てて…勝った所で何が残ると言うのだ…」

深いため息と共に視線を前に戻す。そのうち目の前をビームとミサイルが埋め尽くすのだ。その時彼らはどれだけ生き残れるのだろうか…この戦闘をどれだけ生き残れるのだろうか

「考えたところで何も変わらないと言うのに…」

再びはいたため息と共にそう溢した私の肩に、新兵のゲルググが手を置き

「すみません。お伺いしたい事があるのですが…」

と、直接回線でそう私に話しかけてくる新兵の顔は、不安げで、どこなく頼りなかった。私は苦笑しつつ

「良いぞ、何でも答えてやる」

と、返す。新兵は嬉しそうに笑いながら

「あ、ありがとうございます。えっと…自分はサーヴェ・ラーバ伍長であります。この度は…えっと…」

何だろう、今コンソールに写るこの新兵のおろおろとした様子を見ていると、なんだか懐かしさが込み上げて来るな…

「私はデスピナ大佐だ。そう固くならなくても良い。で？、私に聞きたい事とは」

「い、いえ。大佐は見るからに実戦慣れしてそうなので…その…生き残る秘訣でも聴けたらと…」

と、何だか申し訳なさそうにそう言うてくるサーヴェに思わず笑いながら

「何だそんな事かあ、だったら簡単だ、常に味方という事。そして味方が観れない場所を良く観ながら前をしつかりと見る事。これができ

ればまず死にはせん。と、いいたいところだが…」

「……」

「ふ、そう不安げになるな。戦場で絶対はないし、死なない事も無い。いいか？。戦場じゃ血気盛んな奴も、臆病な奴も皆死ぬときは死ぬ。それがこの戦場か、次の戦場かの違いなだけだ…だから」

「だからこそ全力で最善を掴みとり続けるんだ。それができれば生き残れる」

直後、前方から膨大な熱量が押し寄せて来ることをコンピュータが告げ、続いてアラームが鳴り響く。私はブースターを点火しつつ

「あとは自分で考えろ、おら逃げろひよっ子ども!!」

と、最後の部分のみ全域通信で声を張り上げる。その声に弾かれたようにMSが退避を始め、私も目の前に迫り来るミサイルの雨を回避するために天頂方向へと飛び、艦隊が迎撃のために砲撃を開始。瞬く間にア・バオア・クーを埋め尽くさん勢いで無数の爆発が起きては消えて行く

「衛星ミサイル第1派が発射された。射線上の友軍は至急退避されたし」

司令部からの指示と共に送られて来た衛星ミサイルの移動ルートを見つつ、近くを通過する衛星ミサイルに飛びつき。そのままMSの発艦準備をしようとしていた敵艦隊に躍り掛かる

「おくらおらおらあ!!」

敵の対空砲火を封じるために常に背後や側面などに敵艦が来るように敵艦隊の陣形の中を駆けまわり、シールドのグレネードランチャーを2発ずつエンジンに打ち込んで爆沈させ。続けざまに空になったシールドをそれぞれ一枚ずつサラミスのブリッジに叩き付け、ジャイアントバズで船の旗艦部を狙って攻撃し、撃沈させる。丁度ジャイアントバズの弾が切れたところで船に固定されたままビームスプレーガンを放って抵抗するGMへとジャイアントバズを全力で叩き付けて破壊し、誘爆で他のMSも破壊する。そのまま背部から取り出したMMP80で片端から発艦前、または発艦途中のMSだけを狙い、とにかく敵のMSの数を減らす

「ここで減らせばあいつらが死ななくて済むかもしれない」

その思いで必死に敵を撃破し続けるも、一機で押さえられる量などたかが知れており、抑えれていない他の缶から次々に発艦したMSがこちらを攻撃してくる

「くそー、ここまでか…!」

これ以上個kの言とどまれないと判断した私は。手近なGMの残骸を盾にしつつア・バオア・クーへと飛び、追撃しようとしたGMは衛星ミサイルの第2派によりはばまれ、そのまま私はア・バオア・クーの要塞砲の射程にまで接近し、戦闘を始めた敵に背後から襲いかかる「くたばれえええええええええ!!」

叫びながらMMP80の玉が尽きるまで撃ちまくりながら敵の中を突っ切り、弾切れしたMMP80をしまい、引き抜いたヒートサーベルとビームマシンガンで敵を撃ち殺し、切り払いながら突破し、そのまま今まさに片腕の無いザクにとどめを刺そうとしていたGMを背後からヒートサーベルで一突きにして、そのまま振り抜くように投げ飛ばす

「早く逃げろ!、一旦下がって修理と補給を受けるんだ!!」

と、恐慌状態の新兵と思われる兵士に怒鳴るように命令し、後方へと下がらせる、そのタイミングで後方からマシンガンを放ちつつこちらに接近するGMの攻撃を避けつつ、ヒートサーベルを投擲してGMの頭に付きさし、そのまま決るようにして胴体を真っ二つに切り裂き、そのまま後ろにいたボールの編隊へビームマシンガンをばらまいて散らし、そのまま迎撃しようと4機編隊で棒立ちのままザクマシンガンを撃ち続ける小隊に

「止まるなあ!、艦砲の的になるきかあ!」

と、怒鳴りつつヒートサーベルをしまい、そのままザクの残骸から回収したザクマシンガンでGMに牽制しつつ動くように命じる。そのタイミングで撃ち漏らしたボールが後方へと抜け、それを追撃しようとする後ろを振り向くザクの小隊に

「後ろの敵に構わず前だけ見てろ!!」

と、再び怒鳴るように指示しつつ、ザクを狙い打とうとしたGM

の編隊にザクマシンガンをばら撒いて抑えつつ一気に突貫。こちらに矛先をむけたGMが私へと放ったビームや弾丸を上に乗んで回避し。そのままビームマシンガンで牽制しつつ、一機に飛び込み、ザクマシンガンをバットのよう振りかぶってGMの頭を破壊し、続けざまに残りの2機のGMの胴体にビームマシンガンを撃ち込んで撃破し、引き抜いたビームサーベルで頭を吹き飛ばしたGMのコクピットを切り裂いて破壊、そのまま交代しようと弾幕を張るムサイ級の援護のために、ムサイに纏わりつこうとするGMに側面から攻撃を掛けて隊列を崩しつつ、通り抜けざまに2機のGMを切り裂き、1機のコクピットコアを穴だらけにしては開始、そのまま通り抜ける。この時点でビームマシンガンのエネルギー残量は12パーセント、MMP80は弾切れ、シールドは敵艦にぶつ刺した後に船ごと破壊した。機体とブースターとの連結部の損耗も馬鹿にならない。ここは…

「二度下がるか」

そう判断した私は後方に控えるファルシオンに向けてゲルググを飛ばす

宇宙要塞ア・バオア・クー中編

「ギレン総帥から…?」

6度目の出撃から帰還した私は、整備兵から投げ渡された経口補水液を飲みつつビスコッティが読み上げる要塞司令部の指令を読み上げていた

「そうだ、ゲルググの補給と整備が完了次第、本艦は直ちにSフィールドに移動する。以上だ」

と、司令を読み上げたビスコッティは通信を切り、私は整備兵に終わり次第起こすように言いそのまま目を閉じ、ゆっくりと休息を取る（主戦場ではないSに配置転換する意味などあるのだろうか…いや、考える必要はないか）

ふと、疑問がわいたものの、自分のような兵士が考える事ではない、と一蹴し。私はこの後補給と整備が完了するまでの12分間。ゆっくりと休息を取った

「さてと…行きますか…」

14分後、補給と整備を終え、Sフィールドにまで移動した私はファルシオンから発艦し。ア・バオア・クーの第113ゲート付近に集結中の迎撃部隊に合流した。ざっと見た限りではほかの部隊よりかはベテランがいるようだが…それでも全体的には新兵や学徒の方が数が多く。フォローする身にもなれよ…、と内心愚痴る中ゲートから一機のMS…と言うには余りにも大きき昼、足の無いMSが出撃していく。それに続いて私もほかの部隊と共にア・バオア・クーを飛び、足の無いMSの少し後ろに着く

「ミサイルだ!」

新兵の1人が叫ぶ。直後、宇宙のかなたから無数に飛来したミサイルの津波が我々に襲い掛かり、慌てて迎撃しつつ雲の子を散らすように射線から離れる

「うわあああ!？」

そして動きが遅れた新兵たちが呑み込まれて消え、要塞と艦隊の対空砲火を文字通り物量で押し切り、要塞の防衛設備をミサイルが吹き飛ばしていく。そのタイミングで正面から連邦軍の大部隊がおびただしい火線でもってSフィールド守備隊に襲い掛かり、それにMS隊が正面から突貫する

「落ちろおー!」

足の無いMSが五指から放った一撃がマゼランを破壊し、それを皮切りに衛星ミサイルにより飽和攻撃で艦隊の陣形をぐちゃぐちゃにし、続いて潜り込まれば完全な死角となる要塞連結部を守るため、そして敵艦隊を上下の要塞のクロスファイヤポイントに留め続ける為にドロワが前進を開始し、連邦艦隊は思うように全身出来ぬまま、圧殺されようとしていた

「このっ!?!、落ちろオ!!」

両手のガトリングシールドをガンダムへとばら撒き、続けざまにグレネードランチャーの隙間を縫うようにしてこちらに接近してくる。その異常を通り越して狂気とすらいえる芸当を平然とこなす目の前の敵に戦慄しつつ両手のシールドをパージし、そのまま両手にビームサーベルを構えてガンダムに正面から切りこむ。ガンダムはすぐさま抜き取ったサーベルで反射的にこちらが放った袈裟斬りを弾き返すとか言うキチガイじみた芸当をこなし、そのまま蹴りを放ってくるのでそれをバーニアで無理矢理真横に逸れて回避しつつ蹴りを放った足の進行上に合わせてサーベルを振るう。するとガンダムは足裏だけを少しだけ斜め下にして、そのまま足裏のバーニアをふかして勢いをつけ、そのままランドセルの巣スラスターも使って一気に機体を加速させて一回転しつつ後退するとか言うスラスターのタイミングミスればそのままコクピットまで切り裂かれかねないキチガイ回避（確実に中の人間はGで死ぬ）をして後退しつつ、追撃でビームマシンガンを構えた私に牽制でバルカンを掛けつつゆっくりと停止し。そのままビームライフルを放ってこちらを牽制しつつ突破しようとするのを

「ならさつさと新兵ども救って来いやあ!？」

と、怒鳴りつけると、足の無いMSは弾かれたように味方のもとへと飛び、私は深い深い溜息を吐きつつどうしていいか分からず固まったままのガンダムに向き直り

「ああ、味方の恥を見せたな、すまん…じゃあ殺ろうか？」

ノータイムでビームマシンガンでガンダムへと撃ち込む。ガンダムは慌てて回避しつつバルカンを放ってこちらを牽制して来る、殺し損ねた…。そのままガンダムへと切りこもうとしたその時

「死神イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!？」

と、金切声のような狂気と歓喜の混ざった絶叫を上げ、ビームライフルを乱射しながら赤と白の実のカラーデザインに、ガンダムに類似した形状の頭部を持つMSが私に襲い掛かってくる。私は全速力で後退しつつビームマシンガンで牽制射を加えつつ右手でサーベルを構え、目の前のガンダムタイプの二の腕の上側から現れたクロー上のビームが3本右腕に現れ、薙ぎ払うように振りかぶって来るそれをサーベルで受け止め、そのまま力を流す様にしてクローを滑らせ、そのまま腕部を切り裂くも。そのままガンダムタイプは切り裂かれた腕を押し込むことでクローが消える前に私のゲルググの右肩の真ん中から右胸にかけて切り裂く。小爆発に続いてコクピットの右側、丁度切り裂かれた右胸あたりの壁が爆発し、爆炎と破片が私のノーマルスーツを切り裂き、焦がす。

「ぐうあああ…!？」

鈍い悲鳴を上げながら、私は反射的にバルカンを放って頭部から胴体にかけてを穴だらけにして無理矢理蹴り飛ばしてガンダムタイプを離し、そのまま後方のファルシオンまで後退しようと跳び始めた直後。ドロワの砲撃が止み。次の瞬間ドロワが大爆発を起こす

「なっ…!？」

死に体の私の心を砕くその爆発を背景に、ドロワの直上にガンダムが佇んでいた。間違いなく奴がドロワを沈めたのだ

「ドロワが沈む!?!、Sフィールドは、維持できないぞおっ!?!」

「俺達はあ…何処に降りればいいんだあ…!?!」

「後退だあ！、要塞まで後退するんだあ〜!?!」

と、ドロワ撃沈による混乱により、前線は総崩れとなり。私が這う這うの体でドロワに到着したその時、ギレン総帥の戦死と、事実上の停戦命令が出ていた

宇宙要塞ア・バオア・クー後編

「大佐、やっぱり出撃はやめた方が良いのではないでしようか?」

私と共に機体の最終調整を行う整備兵が、不安そうな表情で私に出撃を止めるように提案して来る。私は包帯で左半分の視界が奪われているため、上半身を捻って整備兵の方を向き

「大丈夫、頭さえあれば動かせるから…体がこうなっても大丈夫」

そう言つて、軽く笑つて見せる私の姿は、一目見ても分かるほどにボロボロだった。上半身の内、左目や口元、左耳以外の全ての場所に包帯が巻かれ、下半身も包帯が巻かれていた。歩行すら満足にできないのだ。こんな状態で戦うなんて不可能なはずなのに…

「ブレイムならでできるから」

ただそれだけの理由で戦おうとする彼は、仲間の為に…と言うよりもどこか死に急いでいる様にすら感じられた

「あ、あの…大佐?」

別に何か伝えようとした訳でも無く、自然と彼の名前を呼んでいた「どうした?」

彼が私の方に向き直る、その時傷が痛んだのか彼が痛がるそぶりを見せる

「や、やっぱりその体で戦うのは無理ですよ!、今からでも遅くはありません、やめましょう!」

と、私は彼は彼の方を持ちながら、出撃を止めようと頼む。しかし、彼は額に大量の汗を浮かべ、本当に苦しそうに顔をゆがめながら

「それでも…それでも行かなきゃならない…利用なんてない。どうしても…そう、どうしても行かなきゃならないんだ。俺が俺である理由が…もうあの中戦争にしかないのだから…だから」

「ごめん、俺をあの中に行かせてくれ」

そう言つて、彼は本当に清々しい笑みを浮かべました。何故あんな笑みを浮かべることが出来たのか、この時の私には理解できませんでした。……ただ

「ッ…!?!」

本当に、悲しい人だなんて…じゃあこの戦いが終わった後、彼には何が残るのだろうか…そう思って

「うう…」

気がついたら涙があふれて来て、私は彼に一言

「はい、必ず行かせて見せます」

そう、力強く応えました

「サイコ・コネクター接続確認。神経系とブレイムの駆動中枢へのリンク確保…起動再確認…問題なし。全兵装最終動作確認…完了」

私はてきぱきとブレイムの起動確認をしながら、彼のバイタルをチェックしていた。…やっぱりこんな状態で戦いに行けば彼は死んでしまう…けど

「私じゃ…彼の代わりにはなれない」

情けない、ふがないと言いたいと悔しさで唇をぎゅつと噛みしめ、涙をこらえながら作業を続ける

「全行程終了ブレイム、カタパルトデッキへ移動」

クロノスとブレイムを固定する4本のアームがブレイムを持ち上げ、ゆつくりとカタパルトにブレイムを運ぶ。そして使い捨て方式のカタパルト（四方からアームでクロノスとブレイム本体を固定し、加速。そのまま船外にブレイムと共に射出される）に到達すると、ゆつくりと次世代型汎用MS戦闘母艦「ファルシオン」級のネームドシツプ「ファルシオン」…そのブリッジ部分のみに搭載された唯一の前面カタパルトがゆつくりと開く

「大佐、ブレイムはまだコアの最終調整がすんでいません。20分以上の戦闘はコアが暴走する危険性がありますので、それ以上の戦闘は絶対にしないで下さい」

殿整備兵からの通信に分かった、と返す。その直後天井から現れたランプが発進を許可しない赤から、許可する青へと色が変わると同時に機体が急加速し、そのままカタパルトごと船外へと射出され、カタパルトが射出されると同時に外れ、クロノスのエンジンを点火させ、今だ砲火の止まぬ戦場へと飛び込んで行った

ノーサイドってかあ…？、レフリーは…ここにはいねエよオ!!

チンピラまがいの連邦兵が学徒兵の乗るオツゴに真下から急上昇して捻りこむ用に急接近し、オツゴの目と鼻の先にまで近づき、明らかに興奮しきった声質で叫びながら手に持つマシンガンをつごへと向ける。私は反射的にやめろ、と叫んでGMをロックオンするも、このビグ・ラングに装備された武装ではオツゴごと殺してしまいかねない、そのままGMがオツゴへと構えたマシンガンの引き金を引こうとして

「そうだな」

全周波数で発せられたその言葉に続いて、目にもとまらぬ速さで後方からビグ・ラングの頭部横をかすめるようにして一機の見た事も無いMSが通り過ぎ、そのままGMの頭へすれ違いざまに巨大な鉄塊の如き鋼鉄の斧を叩きつけてあたまをぐういんにひきちぎり、その反動でGMを回転させながら後ろへと吹き飛ばし、続けざまに機体後部に連結された巨大なブースターを束ねたコンテナのようなものに設置されたアームに装備された無数の重火器が弾幕を展開。先ほどまで数で圧倒していた連邦軍MS部隊を蹂躪し始める

「レフリーがいなのだ、多少の危険プレーは大目に見てもらおうか？」

そのまま後方で弾幕を展開する敵艦隊に一気に突撃を掛ける機体を、私は学徒兵らとともにしばらく眺めていた

「はっ!?、み、みんな散開するんだ!」

はっ、と意識を取り戻した私は学徒兵たちに散開を命じ、私の指示に慌ててオツゴ太刀がビグ・ラングを守るように散開する

「…あの声…」

かつてルウム戦役で、全くあてにされていなかったこちらに救いの手を差し伸べたあの男…確か名前は…

「カイト、カイト…バジュール…」

そう、南米撤退戦の最終局面であるパナマ撤退戦で名誉の戦死を遂げた、ジオンの死神その人である

「何故…彼の声が…?」

操縦桿を握る手に自然と力を込めながら、彼…オリヴァー・マイ技術中尉はたった一機で連邦軍を翻弄する、死んだはずの男を見つめていた

「シネエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

絶叫と何ら変わらない叫びを上げて、私は両手と一体化した、ジヤイアント・ヒートホークよりの倍はあろう巨大な鉄塊の如き斧…ギガント・ヒートホークと一体化した、振るうにはあまりにも細すぎる腕でまるで棒切れのように軽々と振りかぶったギガント・ヒートホークを振りかぶり、そのままサラミスに叩き付ける、一瞬にしてサラミスが叩き付けられた箇所からVの字に変形し、そのまま両断され爆沈。更にクロノスに搭載されたサイコ・アームが装備するバズーカやマシンガンをばら撒いて直掩のGMやボールを次々と撃ち落とし、敵艦の艦艇部や機関部を集中的に攻撃して行く

「邪魔だあ!」

不用意に接近してきたGMを機体ごと回転させて勢いをつけたギガントを叩き付けて粉々に吹き飛ばして破壊し、そのままクロノスを最大加速にして無理矢理敵艦隊からの砲撃を回避し、そのまま宙返りをして機体を艦隊へと向けつつ一気に機体を最高速まで加速させ、艦隊の陣形中央を通り抜ける、通り抜けざまにマゼランとサラミスを艦艇部から艦首方向に斜めに両断して爆散させ、敵艦隊からの追撃を回避しつつ敵艦隊の真上から急降下しつつサイコ・アームのバズーカを全弾撃ち込んで3隻の敵艦を撃破し、更に撤退する友軍を強引に突破しようとしていた2隻のマゼランに斜め45度の角度でブリッジからギガントを叩きこんで両断し、撃破する

「ふう…ふう…」

呼吸を整えつつ友軍の撤退状況を確認すべくMAPを確認しそのままサイコ・アームに装備した武装のマガジンを交換しつつ敵艦の攻撃を回避しつつEフィールドからの追撃部隊を必死に食い止めるオツゴと巨大な赤色のMAの部隊に援護射撃として両腕のギガントをナノマシンに反して、ツイン・バスターライフルに再構築し、敵艦隊の中央部へと叩き込む。放たれた黄色の極太ビームが敵艦隊を一瞬のうちに飲み込み、風穴を開ける。そのタイミングで活動限界が5分を切ったことを告げるアラームが鳴り響く

「チッー、早いな!？」

舌打ちしつつNフィールドからの追撃部隊の指揮官級が乗船する艦を狙ってツインバスターライフルを2度放ち、更に突出した敵に追加で2度放って勢いを削ったところにダメ押しとばかりに動きが鈍り始めた敵に放って陣形を乱して壊乱状態にまで追い込み、Eフィールドに居るMAたちへと飛ぶ

「どけお前ら!!」

通信でオツゴ達にどくように命令しつつ雲の子を散らす様にして道を開けるオツゴ太刀を通り過ぎ、そのままサイコ・アームで敵のMSとボールの混成部隊を可能な限り撃破しつつ艦隊と混成部隊からの弾幕を縫うようにして回避しつつ一気に敵艦隊へと迫り、敵艦隊の中に無理矢理突入して、ツインバスターライフルの連結を解除し、機

体を回転させながら両手のバスターライフルを放って敵艦隊を壊滅させる。そのタイムリングでコクピットをランプが真っ赤に染め、機械音声にて活動限界が1分を切ったことを告げる警告が発せられる
「……ここまでか」

私はツインバスターライフルを分解してマシン・タンクに再構築してクロノスに格納して、既に離脱したファルシオンへと撤退しようとしたところで、MAのパイロットから通信が入る

「こちらは第603技術試験隊所属、試作MAビッグ・ラングパイロットのオリヴァー・マイ技術中尉であります」

「総帥府直属第1MS実験隊所属、ハルファー・フォン・デスピナ大佐だ」

MAのパイロット…枚の挨拶に自分も挨拶を返す

「デスピナ…けどこの声は…」

と、枚は何やら意味深に呟くも、機体の活動限界が近い私は

「すまんがこちらも急ぎのみでな、話の続きは本国でしよう」

とだけ言つて、ア・バオア・クーを離脱した

この戦いの後、宇宙世紀0080 1月1日。ザビ家全員の死亡によりジオン公国は事実上崩壊、ダルシア・バハロを首相としたジオン共和国と連邦政府との間で終戦協定が結ばれる

そして…私は更なる地獄を見る

エピソードぐく 彼の終わり

「大尉、ブレイムが帰還しました」

副官からの報告に満足げに添うか、とだけ答えて視線を進路へと向けるビスコツティ。部下はそのまま彼の右隣に立ち、進路の先によく見えたサイド3を見ながら

「ドズル閣下がご健在です。このままでは歴史は決定的に違う方向へと進んでしまうでしょう…計画が破たんしかねません」

無表情のまま…しかし断固とした決意を込めた、強い口調で話す副官の話を…ビスコツティは黙って聞いていた

「彼のワードは何時でも使用できます。一度限りですが、それでドズル閣下…いや、バグを排除すべきだと私は提案します」

副官はそう言い切り、ビスコツティからの返答を待つ。ビスコツティはただ一言

「任せる」

とだけ発し。副官は了解しました、と敬礼した後、ブリッジを後にする。ビスコツティはかぶっていた軍帽を脱ぎ、指にひっかけまわしながら

「さて…総帥はこの決断をどう思うかな？」

と、誰も答える者のいない。AIによつて動かされるロボットしかないこの薄暗いブリッジの中で、そう呟くのであった

「ブレイムは第1デッキに着艦する。メカニックマンは所定の区画に集合しろ！」

格納庫の隔壁手前に貼られたネットが帰投したブレイムをキャッチし、直ちに機体とクロノスをアームが掴んで機体をネットから引張り出し、ネットをたたんで機体を格納庫の中央に移動させ、整備兵たちがブレイムに群がり、あつと言う間にクロノスをブレイムから切り離し、慣れた手つきでブレイムの状態チェックを始める。そんな中、ブレイムの胴体全体にぽっかりと穴が開き、その中に数人の整備兵が入り、私を抱えて出てくる。

「おかえりなさい」

と、整備兵の1人が私に声をかけてくる。出撃前に話をしていただけだ

「ええ、ただいま」

彼女の言葉に私は何とか作り笑顔を浮かべて答える。その直後

「ギレン総帥の特例により、これより本艦はコードΣを実行する！。総員第1種戦闘配備につけ。ブレイムは直ちに発進準備に入れ!!」

と、副官が館内放送にて意味不明な命令を伝え、その場にいた整備兵たちは突然の事態にどうしたら良いか分からず、作業の手を止め、近くにいる者とどういう事かと話し合いを始める

「…ブレイムに戻してくれ」

私は静かにそう言った。それを聞いた整備兵が止めようとして。小さく悲鳴を上げる。その理由は文字通り感情の無い、機械のような表情をした私を顔を見たせいだろう。私はそのままもう一度戻すようにつげ、私を抱える整備兵たちは顔を見合わせると、ブレイムコクピットへと私を戻す

「…何で…あんな表情を…」

整備兵はそう言って、ブレイムのコクピットに運ばれる私の後ろ姿をじっと見つめていた

コアユニットを始めとした代替品の必要な部品を交換し、おおむね貯蔵されていたナノマシンを利用した急速再生により、再出撃が可能となった私は、ファルシオンを出撃し、たった一機でサイド3に向かって進んでいた狙うはドズル・ザビ中将が乗るドロス級の3番艦「ミドロ」である

「命令はたった一つだ。ドズルを殺せ」

副官は直接回線にてただそれだけを命令した。それで十分だ…

「ニンムリョウカイ」

まるで機械のように感情もなければ抑揚もない無いかたことの言葉でそう喋り、スクリーンに最大望遠でサイド3を捉えると同時にクロノスのブースターを最高速にまで加速させ、高速艦の20倍もの速度で一気にサイド3へ接近する。加速時に発生したGに体がきしみ、体中にまかれた包帯の至る所に血がにじみ出始める。が、私の表情は変わらない。その目に光は無く、まるで機械のように変わる事の無い表情のまま、私は機体を進ませる。そして

「モクヒョウヲシヤテイナイニカクニン、ハイジョカイシ」

マシン・タンクを全て使い、左腕と一体化する形でバスターライフルの4倍はあろう長さを持った巨大なライフルを作成し、最大望遠にて捉えたミドロに照準を合わせる

「エネルギーラインチョツケツ。チャージカイシ」

直後、コアユニットから莫大なエネルギーがライフルへと供給され、そしてチャージが管路輸した事を機械音声が伝えると同時に、私はあつさり引き金を引いた。

放たれた膨大なエネルギーは進路上に存在する全てを飲み込みながら真つ直ぐにミドロへと突き進み。ミドロを完全に蒸発させ、その後ろにあるコロニー基を破壊した

「ニンムカンリョウ。コレヨリキトウシマス」

ライフルをマシン・タンクへと分解、再構築した後。私はファルシオンへの帰路に着こうと機体を反転させたその時、真上から無数のビームと実弾が私を襲う

「ッ!？」

反射的にクロノスをかばう様にして、機体を上へと向け、マシン・タンクを使って再生したシールドで機体を守る。

「テキカラノコウゲキヲカクニン。コチラノレルム・Dヲ、カンツウデキズ。キョウイドテイトハンダン」

シールドをランチャー・ジェミナスに変換しつつ、敵をスクリーン上に捉える

「…」

敵を捕らえた瞬間、理解が出来ずに機体が一瞬だけ固まる。その機体の形状はブレイムと全く同じであり、カラーリングは紫と白で、クロノスの代わりにマシン・タンクが7つもついたリングを肩のあたりで装備していた

「コチラハダイーMSジツケンタイシヨゾク、デスピナタイセテアル。シヨゾクトナマエヲアカシ、タダチニセントウコウイヲテイシセヨ」と、ジエミナスを構えながら警告をするも。目の前のセンチュリオタイプは警告を無視して両手にブレード・ルミナリウムを生成し、こちらへ接近してくる、私は即座に迎撃を判断。躊躇なくジエミナスを乱射するが、センチュリオタイプのレルム・Dによりすべて分解され、ダメージが通らない

「レルム・Dヲカクニン、キンセツセントウニイコウ。ケンセイシヤ」サイコ・アームの武装で弾幕を展開しつつジエミナスとマシン・タンクを分解してこちらも両手にルミナリウムを再構成して装備、弾幕をものともせず突き進むセンチュリオタイプを正面から迎え撃つ。ルミ也有無同士が激しくぶつかり合い、刃から放出されたナノマシンがぶつかり合うことでまるで火花のように辺りに飛び散る

「…」

足でセンチュリオタイプを蹴り飛ばし、間髪入れずに右手のルミナリウムを頭部目掛けて投擲、それをセンチュリオタイプは左手のルミナリウムで弾かれ、そのままセンチュリオタイプはルミナリウムを回収しようと手を伸ばす私へと迫り、私は手を伸ばしたまま残る左手のルミナリウムを構える。そのままセンチュリオタイプは横薙ぎに右手のルミナリウムを振るい、それを左手のルミナリウムを逆手に持ち替えて受け止めるも、センチュリオタイプは左手のルミナリウムを真横から胴体を刺し貫くように振るう。私は左手を盾にするも、そんなものではルミナリウムは防げない。センチュリオタイプは勝ちを確信したのか、一瞬動きが鈍くなる

「…」

直後にセンチュリオタイプのリングを切り裂き、弾かれたルミナリ

ウムがセンチュリオタイプの背中から人と言う鳩尾：丁度パイロツトが固定される辺りを狙って突き刺さり、がくん、と大きくセンチュリオタイプの体勢が崩れ、そのまま動かなくなる。

種は簡単だ、投擲したルミナリウムのポンメルにブースターを作っておいて、わざと相手に隙を晒す事で近接戦闘に持ち込ませ、勝ちを確信したタイミングで突っ込ませただけ、見事に成功し、私はルミナリウムをセンチュリオタイプから引き抜こうと握ったその時。突如として再起動したセンチュリオタイプが私を抱きしめる

「ッ!?!」

突然の事態に動揺した私を、更に動揺させ、焦らせる凶報がもたらされる

「敵内部に高エネルギー反応を検知、危険、危険」

自爆か!?!、と即座に判断した私が逃れようと腕を切り裂くために逆手に持ち替えたままの左手のルミナリウムをセンチュリオタイプの右肩に突き刺そうとするも、センチュリオタイプは残りのマシン・タックを全て使って生成した槍上の物を私に突き刺してくる。衝撃で機体が揺さぶられ、レルム・Dを貫通した槍が腕や肩コクピット内に幾つも突き刺さって私の体を傷つけ、引き裂く。

「…!」

痛みは無い…が、このままでは出血多量で死んでしまう。何とかしなければ…そう考えた矢先、センチュリオタイプが激しく発光し始め「ッ!?!、コンナ…!?!」

直後センチュリオタイプが大爆発を起こし、ブレイムは爆炎の中に飲み込まれて消えた

その様子を、私に気付かれないように遠方から環境にある主モニターで見ていたビスコッティは、すぐにこの場から撤退するように指示をだし

「…君が悪いのだよ、カイト・バジュール。いや、デスピナ大佐。悪いが汚名は全て被って死んでもらうよ」

回頭を始めたファルシオンの艦長席の座り心地を堪能しながら、ビスコッティはそう言つて笑うのであつた

「その後の歴史は君達を知る通り。主だったザビ家の人間が全員死亡した事により政治的指導者をすべて失つたジオンは、生前デギン公王と交わした密約に従い、首相であるダルシア・バハロ主導のもとジオン共和国が建国され。地球連邦政府との間で終戦協定が結ばれる」

「それから3年後、0083に発生したデラーズ紛争においてムーンスレイスと名乗る謎の勢力が現れ、当時の人類の遙か先を行く技術力と圧倒的な軍事力により地球連邦を始めとした諸勢力は全て降伏した」

「遙か未来から黒歴史を防ぐためにこの時代にやつてきた。そう宣言したムーンスレイス女王「ディアナ・ソレル」は地球圏の統治を開始。緩やかな平和の時代が訪れる」

「しかし一部のコロニーで生活していたコーディネイターがムーンスレイスの技術力を吸収し、軍事組織ザフトを設立。地球とムーンスレイスに対して宣戦を布告。それを皮切りに地球連邦政府よりOZ、テイターンズ、エウーゴ等の新勢力が現れ、内戦状態に突入。さらに同タイミングでディアナ・ソレルがムーンスレイスから消えた事によりムーンスレイスは大混乱に陥り、これを好機とアステロイドベルトに存在するジオン残党が地球圏への進撃を開始」

「この時代の急変を知らず、またトップが消えた事により崩壊したムーンスレイスにこの流れを止める事は出来ず。時代は再び動乱の時代へと戻ろうとしていた」

「……」

そんな中、一人の男がかつてサイド7と呼ばれるコロニーに足を踏み入れた

「用こそグリーンノア2へ、本日はどのようなご用件で？」

彼は1度その存在を消され、2度目は宇宙世紀最大の大量殺戮者と、戦争犯罪人と呼ばれた

「観光だよ」

そして三度目は復讐者として、ズタボロになった体を引き摺り続ける

「はい、確認が取れました。ではグリーンノア2での観光をゆつくりとお楽しみください」「カイト・アーガナツハ」さん

自分の全てを奪った者たちを、殺す為に

しかし、それは彼の苦難の道に他ならず。しかして救いはいりえな
い

これは彼の物語。かつての全てを奪われた、悲しき復讐者^かの物語^れ…